
魔法の合成師

Sumire

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の合成師

【Nコード】

N1385W

【作者名】

Sumire

【あらすじ】

ある日、不思議な女性に魔法の世界に連れて行かれた森嶋聡一。その世界で魔法を手に入れる。手に入れた魔法は合成魔法。この魔法は二つの魔法を合成することにより、新たなひとつの魔法を作り出すというもので・・

act 1 肝試し

カタカタカタカタカタ・

少女はパソコンで何か文章を書いている。

「ハアー」

少女は溜め息をつくくとパソコンをシャットダウンした。

玄関にむかい、靴を履く。

外に出ると少女は、ゆっくりと歩き始める。

向かった先は学校だ。

しかし、今日は日曜日で夕方だ。

それでも少女は学校に入る。

正面玄関は鍵がかけられるため、金曜日に鍵を開けっぱなしにして
おいた一階の窓から校舎内に入る。

少女は行き先が決まっているかのように階段をのぼる。

そして最上階の屋上につながる扉の前まで来る。

その扉を開き、屋上に出る。

少女が学校に入ったときとは違い、少し雨が降っている。

それでも少女は屋上に出て、落下防止用の柵の前まで行く。

雨は、さらに強さを増してくる。

少女は柵を乗り越え、その先にある、とても狭い足場に立ちつくし
ている。

しばらく立ちつくした後、少女は笑みを浮かべ屋上から飛びおりる。

「なあ、聡ちか一今日、肝試しに行かないか？」

季節は真夏。夏といえばコレ！と言わんばかりに浩介が言う。

「別にいいけど、二人で行っても楽しくないだろう。」

「ああ、それなら女子数名確保してあるから。」

「ふーん。じゃあ、何時にどこ行けばいいの？」

「八時に町はずれの墓場で。」

「了解。」

朝っぱらから肝試しの話するか？と思いつながら一応、行くと答え
た聡一だが、肝試しが好きなのではない。なぜなら霊を信じてい
ないからだ。そしていたとしても怖いとは思わない。そもそも、死
んだ人には、もう会えないという考えが間違いだとしたら霊は存在
してもおかしくないわけだ。「信じていない」理由は、自分で見た
ことがないだけであって、

その存在を自分で確認したら、すぐに信じるだろう。

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる。

生徒たちは席につく。

「最初に、皆に言わなくてはいけないことがある。」

担任は、とても真剣で周囲の空気を重くさせるような表情をしてい
る。

「誰か、なんかしたのか？」

「おいおい、なんだよ・・・」

少し教室がざわつく。

「静かに。これは、本当に重大な問題だ。だから、これから緊急の
全校集会を行う。」

詳しいことは集会で話されるが、皆には先に言うておく。三組の高
梨なし袖月ゆづきが自殺した。「

「自殺？」

「マジかよ・・・」

また教室がざわつく。

「静かに。体育館に行くから廊下に並べ。」

生徒たちは静かに廊下に並ぶ。列を乱さずに体育館へ向かう。

体育館に全校生徒がそろると、校長が壇上上がり、自殺について説明を始める。

校長の話は、とても長かった。三十分・いや、一時間経っただろうか・・

話の最中には、柚月と仲の良かったと思われる女子たちの泣く声が聞こえる。

校長の説明は、とても詳しく、あまりにも生々しい話だったので、中学生の前で言うような話か?と思った。

自殺の詳しい状況については、今日の朝、出勤してきた教員が柚月の死体を発見した。

うつ伏せになるように倒れており、頭からは考えられないほど大量の血が流れており、すぐに警察と救急車を呼んだということだ。

その後、病院に運ばれたが死亡が確認された。というような感じだ。自殺した理由は調査中とのこと。

集会が終わり全校生徒は教室に戻る。

「今日は、もう下校だ。」

担任が言う。すぐに帰る準備をし、帰りのホームルームが行われ、下校する。

聡一は、浩介といつも一緒に帰っている。

「なあ、俺、高梨ってやつ顔わかんないんだけど。」

少し柚月に悪いと思いつつも聡一は浩介に聞く

「俺も、わかんないんだけどさ、結構かわいかったらしいぜ。」

「ふーん。でもさ、まさか同学年で自殺をするやつが出るとわな。」

「ああ、俺も驚いた。いじめとかでもあったのか?」

「さあな。」

「そっか・・。」

「でもさ、今日の肝試しは続行だからな。他の奴らもいって言うてたし。」
なんて不謹慎なやつなんだ。でも、まあ仕方のないことなのかな。同じ学校の同学年とはいえ、顔も覚えてないし、一度も話したことのないやつだからな。
「どうした？」
「え？ああ、わかった。」
思わず黙り込んでしまっていたらしい。なんとか誤魔化せたからいいけど。

時刻は午後七時三十分。

肝試しをするのに、指定された場所に行くには今から行かないと間に合わない。

あまり、行く気にはなれなかったが、約束してしまったから仕方なく行くことにする。

自転車を出し、少し急いで墓場へ向かう。

墓場の入り口に着くと、もうすでに五、六人の人が集まっていた。

「よし、これで全員そろったな。じゃあ行くか。」

浩介を先頭に全員でゆっくりと進む。

墓場は、とても暗く懐中電灯の明かりだけでは、前がよく見えない。どンドン奥へ進み、一番奥にある祠まで来る。

その祠は、とても小さく何が祀られているのかもわからない。

突然、強い風が吹き始め、木々がざわめく。

「ねえ、あれなに？」

一人の女子が祠の横に立っている大きな柳の木を指差す。

「うわっ、なんだよ！」

その方向を見た浩介は驚きのあまり声を出してしまう。

浩介の声を聞いた他のメンバーも、柳の木を見る。

柳の木の後ろには白い光が見える。そんなに遠くないはずなのに、とても遠くで光ってるように感じた。

肝試しに来たメンバーは、「さすがにヤバい」と言っ、その場を逃げるように立ち去る。

聡一は、祠の前に残り、光の正体を確かめることにした。

a c t 1 肝試し(後書き)

話の進行が遅いかもしれません。
更新も毎日にはできないと思いますが
よろしくお願いします。

act 2 不思議な女性

その光は、少しずつ近づいてくる。聡一は覚悟を決め、口の中に溜まった唾液をのみ込む。

「へー、君は逃げないんだ。」

光のほうから女性の声が聞こえる。

「え？」

声のする方に立っていたのは、一人の女性だった。

その女性は、高校生くらいで長い黒髪を後ろで一つに束ねている。

暗いので顔は、よく見えない。

「だから、普通こんな時間に墓場に一人でいる人なんて見たら怖くはない？」

「いや・普通、霊的なものって、なんていうか・

とにかく、俺から見たら、あなたは怖くありませんよ？」

「そう？じゃあ、一応、自己紹介。私は幽崎美羽 君は？」

「森嶋聡一です・・・」

「聡一君ね。じゃあ君に頼みがあるんだけど。」

「・・・」

待て待て、まだ会ってから五分も経ってないよな？

それなのに、いきなり頼みごとって・・・

「何、黙ってるの？まあ、いいや。一応、言っておくね。この世界を守るために私と戦ってくれない？」

「は？」

なんだよ、ただの電波さんかよ・・・相手にするだけ無駄かもな。

「まあ、正確には、この世界ともう一つある世界なんだけど・・・」

「その話、聞く価値ありますか？」

「死にたくないんだったら聞いた方がいいと思うよ？」

おいおい、同年代のやつが自殺した日の夜に「死にたくない」とか言われたらな・・・

当然、俺は死にたくない。だから一応、聞いてみることにする。

「わかりました・・あくまでも死にたくないから聞くんですよ?」

「それでもいいよ。多分、全然、信じれないと思うけど最後まで聞いてね。」

「続けてください。」

「うん。まず、この世界では科学がすごく発展してるでしょ?」

「はい。」

「で、もうひとつの世界・・私がいた世界なんだけど、そっちは魔法が発展してるんだよね。」

「じゃあ、魔法が使えるんですか?」

「うん。こんな感じ。」

暗くて良く見えないが女性の表情が変わったような気がした。

その瞬間、唖一をありえない強さの風が襲う。

あまりの強さに倒れてしまう。

「え?・・え?」

思わず、戸惑ってしまう。

「今が私の魔法。風を操れるんだよね。」

そして、また女性の表情が変わったような気がする。今度は、笑顔に。

「今・・あなたがやったんですか?」

「そうだよ?これで信じてくれた?」

「い、一応ですけど・・」

本当にありえない。でも、目の前でやられてしまうと、信じるしかなかったってしまう訳だ。

「まだ、信じてくれないか・・まあ、いいや。どこまで話たっけ?」

「えーと、もう一つの世界には魔法があるってところまで・・」

「そうそう、もう生活には魔法が欠かせないくらいに重要なものになってて、

この世界でいう、科学くらい重要なものなのよね。」

「それが・・なんで世界を救うとかいう話になるんですか?」

「それは・・・むこうの世界にも、いくつかの国があつて、私がい
国が他国と戦争中なの。」

まあ、言ってみれば魔法戦争ってことね。で、現在その戦争の戦況
は圧倒的不利。」

負けが確定しているようなもので、このままでは国民にも甚大な被
害が出る可能性がある。」

そこで王の出した答えが、この世界の住人と自分の国の人を魔法に
よって入れ替えるということ。これは王の魔力があれば不可能なこ
とじゃないわ。」

でも、そんなことをしてしまえば、科学を維持することによって生
活が出来ている場所に魔法を維持することによって生活できている
人々が来るってこと。」

「そのの、何が悪いんですか？」

「だから、科学の維持方法をわからない人たちが、この世界に来て
しまえば、科学がすぐに崩壊して、生活ができなくなってしまうっ
てこと。」

逆に魔法の維持方法がわからない、こつちの世界の人たちが魔法を
維持している場所に

行つても、魔法が使えないから生活が困難になつてしまつてわけ。」

「えーと、まだわからないんですけど・・・」

「うーん・・・じゃあ魚がいきなり水の無い場所で生活しろと言われ
ても無理でしょ？」

まあ・・・進化していけば不可能でもないんだけど、長い時間がかか
つてしまうでしょ。」

で、陸で生きている生物が水中で生きろつて言われても無理。」

「うーん・・・なんとなく、わかつたような気がします。」

「じゃあ、協力してくれる？」

「考えておきます。」

「じゃあ、明日までね。」

そう言うと女性は、どこかへ歩いて行く。
なんだったのだろう・・・不思議な人だったな。
言っていることは、なんとなく正しいような気がするけど・・・
でも、なんで、俺なんかに協力を求めたのかな・・・
不思議に思いながらも、先に行ったメンバーが待っていると思った
ので

急ぎ足で墓の入り口まで戻る。

「ああ、やっときたか。何やってたんだよ・・・」

「ごめん、ごめん。ちょっと気になるものがあつてさ・・・」

「それは、いいとして、まだ一人たりないんだよな。」

「え？俺は見えないけど。」

「そうか。もう帰ったのかな？いいや、もう帰っちゃおうぜ。」

どうやら浩介は、他のメンバーが帰っても、一人で俺を待っていてくれたようだ。

こんな薄暗くて、気味の悪い場所で・・・感謝しなくちゃな。

二人は自転車を猛スピードで走らせ、家に帰る。

act3 自殺の理由

「そろそろ起きないと遅刻するよ?」

翌日の朝、聡一は聞きなれない声で目が覚める。

「うーん・・・うわぁっ!」

その声の主は昨日の肝試しのとき墓場で会った幽崎美羽だった。

「なんで、そんな大声出すの?」

「いやいやいや・・・まず、どうやって入った?そして、なんで来た?」

「えーと、昨日、君に使った魔法って「風」だったでしょ?」

「そういえば、強い風が起きたような・・・」

「それを応用して、体を浮かせて窓から入ったってわけ。」

この部屋は二階にある。玄関も鍵がかかっている。

「それで、私に協力してくれるの?」

「うーん・・・」

「お願い。」

美羽は、手を合わせながら、こちらを見ている。

美羽の顔は、このとき初めて見た。・・・意外とかわいい・・・

なんていうか不思議な気分になる。こんなかわいい女の子がこんな近くにいるのは初めてだ。ヤバイ・・・このままじゃ惚れてしまいそうだ・・・

「・・・わかったよ。」

なんとか、その場を回避するために「世界を救う」「ことを承諾してしまおう。

「やってしまった・・・」そう思ったときには、もう遅かった。

「ホントに?ありがとう!」

「いや、えーと・・・で、何をすればいいの?」

今更、「やっぱ、無理」などと言えるような状態ではない。

美羽の嬉しそうな表情・・・ああ、どうしようか・・・

仕方ない。どうせなら世界の二つや三つ救ってやろうじゃねえか！
聡一が人生で一番の決断をした瞬間だった。

「じゃあ、今日の昼休み、君の通ってる学校の屋上に来てね。」

「え？それだけでいいの？」

「うん。じゃあ、もう一回、自己紹介。私は幽崎美羽。魔法の世界の住人です。」

「森嶋聡一。絶対に世界を救ってみせます。」

「お？言ってくれたわね？じゃあ、よろしくね。聡一君。」
「……………」

女の子に下の名前で呼ばれたのなんて初めてだ…

「何、黙ってんの？まあ、いいけど遅刻するよ？」

「ああ！すっかり学校のこと、忘れてた…」
本当に何やってんだろうな…俺。

翌日は通常どおり授業が行われた。

たとえ前日に自殺があったとしても、授業は通常どおり行われるらしい。

四時間目の授業を受けている途中、美羽の言った言葉を思い出す。

「昼休みに、屋上に来て。」

なんとなくだが屋上に行くことによって、魔法の有無、世界崩壊の事実がわかるような気がした。

たとえば、わからなくても昼休みを無駄にするくらいだから、大したことはない。

昼休みのことを考えているうちに四時間目の授業が終わる。

それぞれ班にわかれて、給食を食べる準備をする。

給食関連の当番に当たって無い人は、準備中は自由な時間を過ごせる。

聡一は自分の分の給食を貰いに行き、自分の席で他の人の給食が終

わるのを待つ。

全員、準備が終わると、日直が「いただきます」とあいさつをして、給食を食べ始める。

今日のメニューは、カレーだ。このカレーは、あまり辛い味付けになっていない。

そのおかげで早く食べ終わることができる。

「ごちそうさま」をする時間は決まっております、その時間になったら食べている途中でも片づけなくてはいけない。この時間の五分くらい前に食べ終わったが、班の人と会話することもなく、静かに「ごちそうさま」をするのを待つ。

「ごちそうさまでした」

日直が言っていると皆、一斉に食器を片づけ始める。

人混みの嫌いな人は少しタイミングをずらして片づけをする。

聡一も、その一人だ。

片付け終わったあとは昼休みになり、自由に過ごすことができる。食器を片づけ終わった聡一は、少し急ぎ足で屋上に向かう。

屋上は四階。三年生の教室は三階のため、すぐに屋上につく。

屋上の扉を開けると、美羽と見知らぬ女の子がいた。年は、聡一と同じくらい。

見た目は・・・それなりにかわいい。黒いショートヘアをしている。

「お？約束どおり来てくれたね。」

「そりゃあ、色々、気になる事がありましたからね。」

「美羽さん、この人、誰ですか？」

見知らぬ女の子は美羽にだけ聞こえるように小声で言ったが聡一にも丸聞こえだった。

「そういう、君は誰だよ？」

この学校の制服を着てるし、年上ではないだろう。

そう思い、あまり丁寧な言葉は使わなかった。

「え？私・・・ですか？」

「うん。」

見知らぬ女の子は美羽の方をチラッと見る。

「この人は味方だよ。」

と美羽が言う。

「わ、私は高梨・・・高梨柚月です・・・」

「へー、たかな・・・って、自殺したんじゃないのかよ!？」

「えーと・・・それは、その・・・」

「いいわ、私が説明するから。」

この子は自殺したと思われるけど実際は、そうじゃないわ。」

「じゃあ、なんなんですか？」

「魔法で一時的に仮死状態にしただけ。」

「・・・なんで、そんなことを？」

「死んだことにしておけば、いつでも魔法の世界に来れるから。」

「それと、どういう関係があるんですか？」

「だから、生きてたら毎日、学校に行かなくちゃいけないでしょ？」

でも、死んでたら存在しないことになってるから、なんでも都合の

いいときにできるってわけ。」

「じゃあ、俺も死んだことにされるんですか？」

「いや、別にいいけど？」

「じゃあ、なんで高梨は・・・」

「柚月は何回か魔法の世界に来ていて、もう魔法も使えるのよ？」

だったら自由に「こっち」と「魔法の世界」を行き来できるように

したら?って提案したら、死んだふりをしてくれたってわけ。」

なんか、滅茶苦茶なやつばかりだな。魔法が使える奴って。

「そういえば、なんで屋上なんかに呼び出したんですか？」

「ああ、それは、もう魔法の世界に行かなくちゃいけないからよ。」

「え?じゃあ・・・」

「そう。今すぐ、魔法の世界に行くわよ。」

「ちよ・・・午後の授業もあるんですよ?」

「いや、でも時間ないからさ。」

なんなんだよ一体。世界を救うとかいう話を承諾してしまった、俺

がわるいけど・・・

これは、いくらなんでも突然すぎだろ・・・

そんな風に思っている聡一の横では美羽が魔法の世界に行くための魔法を発動させる準備をしている。

「よし、もう行く準備できたから。」

美羽が使った魔法は、ブラックホールのような姿をし、少しずつ吸い込まれていくような感じだ。美羽と柚月は、もうすでに吸い込まれてしまっている。

聡一は抵抗するだけ無駄だと思い、「どうにでもなれ」と自らブラックホールの中へ飛び込む。

吸い込まれた瞬間、不思議な感覚になり気を失ってしまった。

act 4 魔法の世界

目が覚めると、古い小屋の中にある小さなベッドの上だった。

「あ、起きた？ やっぱり、皆、最初は気絶するんだね。」

聡一は、全く状況がつかめずにいた。

窓の外には見たこともない木や植物が生えているし・

「なに、驚いた表情してるの？ ここが魔法の世界だよ？」

目の前には美羽の姿・このとき、やっと気がつく。

「魔法の世界に来てしまった」ということに。

「本当に存在したんだ・」

「え？ 信じてなかったの？」

「あたりまえです・それで、魔法の世界って、どこなんですか？」

「おお、その質問してくれた人、初めてだよ。」

「答えてくださいよ・」

「うーん・正確には、ここは「もうひとつの世界」なんかじゃない、地球の科学技術で観測可能な範囲より、遙か遠くにある「惑星リーフ」って言う惑星よ。」

「地球以外に生命のある惑星は無いんじゃない？」

「だから、言ったでしょ。地球の観測範囲外だって。」

「だからといって、存在するとは思えませんが・」

「・まあ簡単に説明すると、地球みたいに生命が誕生できる、気温・自然環境が整っている惑星があつたというだけよ。」

「じゃあ、ここは・」

「そう。宇宙のどこかにある惑星って考えてくれればいいわ。

あと酸素の濃度が地球より少し濃いから、運動したりするの楽になるかもね。」

「そういえば、なんか体が軽いような気がする・」

「じゃあ、さっそく聡一君の魔法がなんなのか確認しに行こうか。」

「そんなこと、できるんですか？」

「うん。この小屋の近くに洞窟があつて、その中の石碑が、どういふ魔法なのか教えてくれるの。」

「わかりました。そういえば高梨は・・・」

「ああ、柚月なら外にいるよ。」

小屋の外に出ると、あたり一面、とてもきれいな自然であふれていた。

しかし、どの植物も見た事ないものだった。

「そういえば、戦争がどうかつて・・・」

「そう。この森を抜ければ、私の住んでいた国につくわ。この星では、十年に一回、戦争が行われるの。」

「十年に一回も!？」

「それで、負けると国の領土を奪われていくつてわけ。今回の戦争に負けると、私の国は渡せる領土がないから、国自体が他の国のものになってしまうの。」

「でも、戦争が行われているにしては静かじゃないですか？」

「そりゃあね。この星には戦争にもルールがあつて、お互いに魔法を使って戦える国民を十人用意して、その人たち・・・計二十人で戦つて一人でも生き残つたほうの勝ちになるの。」

「もしかして美羽さんの国つて戦える人が十人いないとか？」

「ううん。十人はいるんだけど・・・弱いよね・・・それで新戦力が欲しくて、私は自分自身を地球に召喚して、聡一君をこっちに連れ来てたつてわけ。」

「本当に俺なんかで戦力になるんですか？」

「さあね。ほら、ついたわよ。ここが、さっき言った石碑のある洞窟よ。」

洞窟は、どう見ても、そんな特別な石碑があるようには見えない。ただ、崖に穴があいている。

そんな感じだ。

美羽は洞窟の中に入って行く。そのあとを追い、聡一も洞窟の中に入る。

act 5 合成魔法

洞窟の中は、結構狭い。

湧水が壁を伝うように流れ、足下に少し水が溜まっている。

そして、真ん中に大きな石碑がある。

「さあ、この石碑の前に立って。」

言われた通り石碑の前に立つ。

「・・・」

しかし、何も起こらない。

「何も起きませ・・・」

そう言い振り返ろうとした瞬間、地面が揺れ、石碑が光り始めた。

「うわ・・・」

光は、とても明るく、思わず目を閉じてしまった。

光が消えるのを待つ。

眼を開くと石碑には、とても長い文章が書かれている。

「美羽さん・・・これ、なんて読むんですか・・・」

「ああ、これが聡一君の魔法の説明よ。」

なにに、「この魔法、合成魔法。二つの魔法を合わせ、新たな力を生み出す。すなわち、この魔法、無限の力を持つ。」だって。

私の魔法の説明なんて、「風を操る魔法」だけだったんだよ・・・」

「そうなんですか・・・それで、このあとは何をすれば・・・」

「うーん・・・そうだね、じゃあ実際に魔法を使ってみようか。この森なら誰にも迷惑かからないし。」

「わかりました。」

洞窟から出ると、袖月がいた。

「そういえば、高梨の魔法って、なんですか？」

「え？じゃあ実際に受けてみれば？袖月、魔法使ってみて。」

「わかりました」

急に体が重くなる。どんどん体が重くなり、立っているのがやっと

だ。

「ちょっ…どうなってるんですか…」

「袖月、もういいよ。」

「はい。」

体の重さが元に戻ったようだ。

「これ、どんな魔法なんですか…」

「はははは、これはね、重力の大きさと向きを操れる魔法だよ。」

美羽が笑いながら言う。

「じゃあ、君の魔法も見せてください。」

不意に袖月に話しかけられる。

「ああ、聡一君の魔法は、これから試すつもりだから、ちょっと待

つてて。」

「はい。」

「聡一君、ここだったら洞窟があるから、少し離れましょう。」

五分くらい歩くと、あたり一面、木しかない場所に来る。

「ここなら、いいかな。じゃあ、やってみて。」

「でも、二つの魔法が必要なんじゃない？」

「そうね。じゃあ、私と袖月の魔法で試そうか。」

「いいですよ。」

「袖月は？」

「わかりました。では…」

また体が重くなる。

「じゃあ、いくわよ。」

さらに美羽の魔法で強風が吹く。

風が聡一に当たった瞬間、重力は元に戻り、風も収まる。

そして、ゴオオオという音とともに、聡一を中心に巨大な竜巻が起

こる。

竜巻は五秒ほどでおさまり、まわりの木々はボロボロになっている。

「…すごい…」

「え？今、俺なにもしてないですよ？」

「コントロール無しで、この威力って・・・よし、今から、その魔法をコントロールできるように特訓するわよ。」

「全然、自信ないんですけど・・・」

「大丈夫。私が教えるから。」

一体、何回、美羽と柚月の魔法を合成したのだろう・・・
段々、慣れてきたため、威力を弱めることはできるようになってくるが、強くすることができない。

「怖がつてるからダメなのよ。どうやら、合成する魔法の強さは関係ないみたいだから、聡一君次第なのよ?」

「わかりました。もう一回、お願いします。」
何度もやっているように美羽は強風を起こし、柚月は重力を大きくする。

ゴオオオオ!!

合成後の魔法の形は竜巻のままだが、明らかに発生する瞬間の音が違った。

確実に竜巻の大きさは違った。

バキバキバキと、まわりの木々が倒れる音も聞こえる。

今まで五秒程だった竜巻の持続時間は十秒近くまで伸びている。

スウウウ

静かに竜巻はおさまり、まわりの様子を見る。

さっきまでは綺麗な植物でいっぱいだったはずなのに、荒野のようだ。

そして、美羽と柚月の姿が無い。

「美羽さん?高梨?」

「ごめん、ごめん。その威力じゃ、私たちも非難しないと危なかつ

「たからさ。」

「すいません・・・」

「いいのよ。あと、今のが本気だった？」

「わからないです・・・」

「そう・・・それにしても、すごい魔法ね。今の竜巻、並みの魔法使いが命かけても出せないと思うよ。」

「そうですか・・・」

「じゃあ、次は形状の変化ができるのか、やってみてよ。」

「どうやってやるんですか？」

「多分、威力を上げた時と同じ感覚だと思うけど？」

「わかりました。「威力」じゃなくて「形状」ですね。」

「よし、じゃあ袖月！」

「はい！」

今日だけで、何度この二つの魔法を受けたのだろう・・・
形状を変える・・・そう思いながら、また魔法を受ける。

今回は竜巻の発声音は聞こえなかった。

スツ

かわりに、こんな音が聞こえる。

その瞬間、竜巻で倒した木々が正面にあるものだけ、真つ二つに斬れた。

「今度は、かまいたち・・・」

「なんとか、できましたよ・・・」

「聡一君、本当にすごいわね。私の言ったこと、すぐにできるようになってる・・・」

「ありがとうございます。次は、何をすればいいですか？」

「ああ、今日は、もういいわ。」

そう言つて、袖月を指差す。

袖月は、ハアハアと息を荒げて、とてもつらそうだ。

「まだ・・・大丈夫・・・です・・・」

「大丈夫じゃないわ。あんまり、魔法使いすぎる、倒れるわよ？」

「・・・」

「さあ、今日は、もう帰りましょう。」

この星の時間経過も、ほとんど地球と同じらしく、空は少し赤くなっていた。

「あれが、地球で言う太陽ですか。」

「そうよ。本当にこの星は地球と似ているわ。」

そして、小屋に向かう。

act 6 組み合わせ

三人は、小屋に戻る。

美羽は夕食を作り、テーブルに並べる。

テーブルの上に並べられている料理は白いスープ・シチューに似ているような気がする。

「これ、なんの料理ですか？」

「この森に生えている植物で作ったスープよ。栄養もあるし、魔力回復にも役立つの。」

「そうなんですか。」

一口、食べてみると不思議な味がする。

不味いわけではないのだが、今までに食べたことのない味で・・とにかく不思議な味だ。でも、結構、美味しい。

「このスープ、美味しいですね。」

「そう？ありがとう。」

柚月は無言でスープを食べている。

「そういえば、聡一君の魔法について色々、考えてみたんだけど・・」

「なにか、わかりましたか？」

「えーと・・まず、二つの魔法が絶対に必要。そして、新しく発生する魔法の「形状」は変えられるけど、「性質」は、あまり変えられないみたいね。」

「そういえば、竜巻もかまいたちも「風」の魔法でしたもんね。」

「うん。でも柚月の魔法である「重力」の性質が出てないところを考えると・・」

「両方の魔法が新しく生まれる魔法に影響するとは限らない、ということですか？」

「それは、まだわからないわ。まだ「風」と「重力」の組み合わせしか試してないからね。」

明日は、別の組み合わせを試してみよう。」

「わかりました。」

そういえば、柚月は全然、喋ってないな・
美羽さんに聞いてみようかな。

「起きてますか？」

「なに？」

柚月が眠った後、美羽に話しかける。

「高梨つて、俺のこと嫌ってませんか？」

「そんなことないわ。」

「でも・全然、喋らないし・・。」

「あら、もしかして柚月のこと好きになっちゃった？」

「そんなことはありません！でも・・。」

「大丈夫。心配するようなことじゃないわ。」

「本当ですか？」

「うん。もう寝ましょう？」

「わかりました。」

「さあ、今日も色々、試したいことあるんだから、もう起きてよ。」

「うう・・。」

眼を開けると、テーブルには、もう朝食が並んでおり、柚月は椅子に座っている。

「いただきます。」

朝食は、パンとスープだ。

五分ほどで食べ終え、外に出る。

「昨日の様子を見ると、小屋の近くでやったら壊されそうだから、少し離れたところに行こうか。」

「すみません・・。」

また、五分ほど歩いたところに来る。昨日とは違う場所だ。

「じゃあ、まずは私の魔法と治癒系の魔法を合成してみましようか。」

全然、気がつかなかったが美羽の肩に小さな白い鳥が乗っている。

「その鳥は・・・」

「ああ、私のパートナーみたいなものよ。治癒系の魔法を使ってくれるから、怪我しても大丈夫よ。」

「で、今回は、その治癒魔法と風の魔法を合成すると・・・」

「うん。じゃあ、さっそくいくよ。」

いつもどおり、強風が起きる。

白い鳥の羽根が緑色に輝き、聡一の体も緑色の光に包まれる。

その瞬間、辺り一面から緑色の光が溢れ出す。

「すごい・・・森が喜んでるみたい・・・」

「キレイ・・・」

袖月が初めて喋ったような気がする・・・

いや、初めて会った時に少し喋ってたか・・・

「すごいわね。どうやら、治癒魔法の範囲を広げる感じのようね。」

「でも、敵も治癒させちゃうんじゃない・・・」

「だいじょうぶよ。たぶんだけど・・・」

「なんですか・・・それ・・・」

「やっぱり、攻撃系の魔法を合成しないとダメみたいね・・・

よし、ちよっとついてきて。」

言われた通り、美羽についていくと小さな集落につく。

「ここわね、どの国にも在籍せずに生活をしている人々の集落よ。皆、優れた魔法使いだから、自分たちの身は自分たちで守って生活しているのよ。」

「何で、ここに連れて来たんですか？」

「ここには、姉がいるのよ。」

「そうなんですか・・どんな魔法を使うんですか？」

「氷の魔法よ。氷璃^{ひょうり}って言う名前なだけで、すごい魔法使いでね。まだ、私と一緒に住んでいたところに国で強盗殺人が多発してたの。

で、その犯人を見つけ出して、三十人くらいの盗賊団だったんだけど、全員を氷像にしちゃってさ。」

「氷像・・三十人って・・。」

「それも、一瞬で。氷璃が本気のなれば、国ひとつは氷づけになるわね。」

「そんなに怖い人なんですか？」

「怖くないわよ。「怒らせたら」やばいけど。」

「怒らせたら・・って」

「大丈夫よ。そう簡単に起こるような人じゃないから。ほら、ついたわよ。ここが氷璃の家。」

「ゴクツ・・。」

「そんなに緊張しなくてもいいよ。」

建物自体はテントのようにつくりになっている。

玄関のところにある布をめくり、中に入る。

「氷璃ー、いるー？」

「はい、ちよっと待ってー」

奥から声が聞こえてくる。

「ごめん、ごめん。ちよっと、洗濯しててさ。おっそっちの男の子

と女の子は？」

「ああ、聡一と袖月だよ。そういえば袖月も氷璃に会うのは初めてだったね。」

「はい。よろしく願います。」

「よろしくね、袖月ちゃん。で、聡一君かぁ・・・」

「よろしく願います。」

「はははは、なんか、かわいい子だな。」

「え？」

かわいいなどと、言われたのは初めてだ。どう見ても、かわいいというよりは怖いとかだと思っただけ・・・

「それで、なんの用？」

「そうそう、聡一君の魔法の練習に付き合っしてほしいの。」

「ふーん・・・」

氷璃は聡一をジッと見つめる。

「どんな魔法を使うの？」

「合成魔法よ。」

「合成？どんなの？」

「二つの魔法を合成して新しい魔法を作り出すっていう魔法。」

「へー、おもしろそうな魔法ね。その練習に私が必要な理由は？」

「まだ、袖月と私の魔法を合成させたことと、治癒魔法と私の魔法を合成させたことしかないのよ。それで、氷璃の魔法も合成させてほしいってこと。」

「いいわよ。そのかわり、美羽は私と勝負ね。」

「・・・しょうがないわね。」

「じゃあ、さっそくいこうか。」

「なんで、美羽さんと氷璃さんが戦うことになるんだよ・・・」

「聡一君・・・」

「え？」

袖月に初めて話しかけられたため、思わず驚いてしまった。

「な、なに？」

「美羽さんと氷璃さん、どっちが勝つと思う？」

「・・・氷璃さんじゃないの？」

「やっぱり、そうよね・・・」

この後、聡一と柚月も氷璃の家から出る。

集落の人々も集まり、美羽と氷璃を円形に囲むようになっている。

「美羽と勝負するなんて、本当に久しぶりね。」

「そうね。負けないから。」

「どうかね。」

美羽の頭上に巨大な氷の塊が出現する。

「美羽さん！上！」

「わかってるわよ。」

美羽は身軽な動きでバックステップをし、氷をかわす。

そして、風を起こし、氷を粉々に砕き、その破片を氷璃に向けて飛ばす。

「無駄、無駄！」

氷璃の前に氷の壁が発生し、氷の破片を弾き返す。

「氷璃、手加減はやめてよ。」

「美羽もね。」

ヒュー・・・美羽の表情が変わり、風の動きは美羽を中心に渦を巻くような形になる。

さらに、空気中に光る粒がたくさん浮き、気温が一気に下がる。

光る粒は美羽の体に纏わりつく。

「ウウツ・・・」

風の動きは無くなり、美羽の苦しむ声が聞こえる。

「私の勝ちね。」

気温も元に戻り、空気中の光る粒も無くなる。

「それでも・・・ないわよ・・・」

氷璃の着ている服が斬られ、下着が丸見えになっている。
サツ・・・

「へえー、結構、強くなったんじゃない。」

氷璃は胸を隠しながらいう。

「じゃあ・・・聡一君の練習に・・・付き合ってもらおうよ・・・」

「いいけど、着替えさせてね。」

美羽は相当、無理をしていたようだ。

それに対して氷璃は、まったく疲れている様子がない。

「聡一君、君も来てくれる？」

「え？」

「だから、着替えたいから、ついて来てって言ってるの。」

何を言ってるんだ、この人は・・・

「わかりました・・・」

よく、わからないが、すごい魔法使いなのだから、なにか考えがあるのだろう。

「じゃあ、美羽と袖月ちゃんは、待っててね。」

こうして、もう一度、氷璃の家に向かうことになる。

「じゃあ、着替えてくるから・・・のぞかないでね。」

「そんなこと、しませんよ！」

「はははは、聡一君は、おもしろい人だね。」

なんだよ・・・この人・・・見た目は超人なんだけど・・・

「終わったわよ。それで、君を呼んだ理由なんだけど・・・」

「あまり、からかわないでください・・・」

「ごめん、ごめん。それでさ、君の魔法について聞きたいんだけど・・・」

「すいません・・・俺も昨日、こつちの世界に来たばかりで、なにもわからないんです。」

「じゃあ、このあと、練習のときに確認することにするわ。」

「じゃあ、行きましょつか。」

「はい。」

聡一と氷璃は、家から出て美羽と柚月の待っている場所に向かう。

a c t 7 幽崎氷璃（後書き）

やっと、新キャラを出せました。
登場人物、少なすぎますよね（笑）

act 8 パートナ

「遅かったわね。早く練習、始めましょうよ。」
「そうね。少し離れたところでやるわよ。この集落に被害が出たら大変だから。」

この集落に来る前に練習をしていた場所に来る。

「じゃあ、早速、氷璃と私の魔法を合成してみて。」

「わかりました。」

「じゃあ、いくわよ。」

強風が起こる。

「私は、何をすればいいの?」

「聡一君に魔法を当てて。．．ちゃんと加減してよ。」

「わかってるわよ。」

気温がどんどん下がっていく。

ゴオオオ!

二つの魔法が聡一の体に当たると、吹雪が起きる。

美羽と氷璃が魔法を止めたため、すぐに吹雪はおさまったが、まわりの木々が凍りついている。

「．．全然、コントロールできませんでした．．．」

「なんで?私と柚月の魔法でやったときは、できてたじゃん。」

「わかりません．．．」

「もしかして．．次は柚月と氷璃の魔法でやってみてよ。」

「え?私ですか?」

「うん。もしかしたら柚月の魔法が聡一君がコントロールできるようにしてるかもしれないって思ってたさ。」

「わかりました。」

「氷璃も、いい?」

「うん?あ、はいはい。」

また、気温が下がり、体も重くなる。

パツ！

一瞬、強烈な光が発生し、眼を閉じてしまう。

もう一度、眼を開けると、まわりには光る粒が大量に舞っている。

「キレイ・・・」

美羽が呟く。

段々、空気中の光る粒は消えていく。

「今度は、コントロールできましたよ！」

「じゃあ、やっぱり柚月の魔法が影響しているみたいね。」

「はい。」

「・・・」

「どうやら、聡一君と柚月ちゃんの魔法は相性がいいみたいだし、パートナーになれば？」

「パートナーって・・・」

「うーん・・・一番、相性のいい魔法使いがペアを組むってことよ。」

「それは、わかります。でも・・・」

「柚月ちゃんじゃ、いやなの？」

「そうじゃなくて・・・俺、高梨と話した事ないし・・・」

「大丈夫。あくまでも「魔法」の相性がいい二人組だからさ。」

「・・・聡一君がよければ、私は・・・いいよ・・・」

あれ？高梨が顔、赤くしてる・・・かわいいし・・・

「ほら、柚月ちゃんも、こう言ってることだし。」

「わかりました・・・」

「まさか、こんなに速くパートナーが決まるとはね。」

「・・・聡一君、よろしくね。」

高梨が手を出している・・・握手、したほうがいいのか・・・

「よろしく・・・」

静かに柚月の手を握り、握手をする。

柚月は、嬉しそうにしながらも顔を赤くしている。

「パートナーになったら、なにか、いいことがあるんですか？」

「正式なパートナーになるには、教会に行つて、儀式みたいなものをしなくちゃいけないんだけど、正式なパートナーになると、お互いの魔力を共有して、さらに強力な魔法を使えるようになるわ。」
「それって、すごいじゃないですか。」

「うん。だから私もパートナー欲しいんだけど、なかなか、いい人がいなくて・・・」

「氷璃さんと組めばいいじゃないですか。」

「氷璃には、もうパートナーがいるから、ダメなのよ。」

「氷璃さんのパートナーって、どんな魔法を使うんですか？」

「そうね・・・簡単に言つと自然を操る魔法かな。私より遥かに強いわ。」

「え？氷璃さんより、強いって・・・」

「彼も、君たちと同じで地球から来た人なのよね。今は地球に帰つてるから、会えないけど、戦争のときは、帰ってくると思うわ。」

「そうですか・・・」

「そういえば、柚月ちゃんの魔法のこと全然、聞いてなかったわね。」

「

「私のは・・・重力を操る魔法です・・・」

「すごいじゃない。もつと自信、持ったほうがいいよ！」

「でも、私の魔法・・・地味ですし・・・」

「そんなこと、ないわよ。すごい実用的でいい魔法じゃない。」

「・・・」

「大丈夫よ。そのうち自分の魔法のすばらしさに気づけるわ。」

「そうですか？」

「うん。私も最初は自分の魔法が嫌だったから・・・」

「なんでですか？あんなにキレイな魔法なのに・・・」

「子どものころから、私の魔力が大きくて自分でも制御できないほどだったの。」

それで、まわりの人たちに「寒いから近づかないで」って言われちゃつたわ。

今じゃ、自慢の魔法だけだね。」

「なんか、すいません・・・」

「いいのよ。もう、お昼だし、うちに来てご飯、食べない？」

「いいんですか？」

「うん。」

「ありがとうございます！」

今日だけで袖月と氷璃は、とても仲良くなったようだ。

そして、昼食を食べるために、もう一度、氷璃の家に向かうことになる。

act9 自信

「おお、めちやくちや美味しい！」

「そう？ありがとうございます。」

「・・・」

珍しく美羽が黙ったままだ。

「うーん、こういう味付けが・・・」

小声でなにかを言っているようだが、本当に静かだ。

昼食を食べ終えたあとも少し、話をしている。

「聡一君の魔法ってさあ、単体だったら、なんの役にも立たないよね。」

「・・・言われてみれば、相手の魔法だけだったら、なにもできませんね。」

「そのために、袖月がいるんじゃない。」
美羽が口を開いた。

「・・・私は・・・なにもできませんよ・・・」

「袖月ちゃん、もっと自信を持ったほうがいいよ？」

聡一君には、二つ目の魔法を使ってくれる人が必要なように、君には自身を持つことが大事よ。」

「そうだよ。高梨の魔法がないと、俺の魔法なんて制御が効かないんだから。」

「・・・ありがとうございます。」

美羽が氷璃のもとへ聡一と袖月をつれてきた理由は、聡一の魔法の性質を確認するためではなく、袖月にも自身をつけてもらうためでもあった。

袖月の魔法は、とてもよいものなのだが、使い方を考えなくては、ただの宝の持ち腐れだ。

だからこそ、自信を持ってもらい、さらにすばらしい魔法に進化させていってほしいと思ったのだ。

「そういえば、聡一君の魔法って単体だったら無力同然だよね。」
「・・・気づかれましたか・・・でも、信頼できるパートナーができたので大丈夫です。」

「しかし、これは紛れもない事実だ。信頼できるパートナー・・・こんな言葉を使える日が来るとは思わなかった。」

しかし、これは紛れもない事実だ。

柚月は顔を赤くして、下を向いている。

「よし、そろそろラグの国に行きますか。氷璃も久しぶりにどう？」

「ラグの国ってなんですか？」

「私と氷璃が生まれ育った国よ。」

そして、地球を守るためには、この国を戦争で勝たせなくてはいけない・・・

だから、君たちの魔法は戦争のために使わないといけなくなるけど・・・

「・・・」

「覚悟はできています。こっちの世界に来たのは、地球を救うためなんですから。」

「そう・・・」

初めは聡一のことを頼りなさそうだと思っていた美羽だが、今の聡一を見てみると、

地球だけではなく、この星も「救って」くれるような気がしていた。

「じゃあ、氷璃も来るよね？本当は氷璃にも戦争で戦ってほしいんだけど・・・」

「いいわよ・・・和彦かずひこも、やるって言ってたし・・・」

「和彦・・・って誰ですか？」

「氷璃のパートナーよ。本当は和彦さん一人で戦争に勝てるんだけどね・・・」

「そんなに強いんですか？」

「うん。じゃあ、和彦は後で、こっちの世界に来るみたいだし、先にラグの国に行きますか。」

「わかりました。」

「はい。」

「じゃあ、ちょっと待っててね。」

氷璃は食器を台所に持っていき、しっかりと洗う。

「ごめん、ごめん。じゃあ、行きますか。」

聡一、柚月、美羽、氷璃の四人は、ラグの国へ向かう。

森の中を進み続けると、急な下り坂になる。

この下り坂付近は森の中より、植物や木などが少ない。

そして、坂の下を見ると、とても巨大な都市が見える。

真ん中には、かなりの高さがあると思われる塔があり、その下には町が広がっている。

「すごく、大きな国ですね。」

「うーん．．そうかもしれないけど、この星では小さい方なんだよね．．

そもそも星自体の大きさが地球の三倍近くあるしね。」

「三倍．．」

「そうよ。だから国の数も、いくつあるか、私もわからないのよね。」

「そんな数え切れないほどの国と戦争するんですか？」

「そうよ。」

美羽は平然と言う。

ラグの国の入り口につき、そのまま中に入る。

「パスポートとかは必要ないんですか？」

「パスポート？」

「地球では国と国を行ったり来たりするのに必要なんです。」

パスポートの話をしているとき、聡一には、二つの疑問が生まれた。

一つ目は、なぜ、こっちの世界の人が日本語を話しているのかということ。

もうひとつは、パスポート無しで国に入れるのに、なぜ戦争が起きるのかということだ。

「じゃあ、早速、教会に行って正式なパートナーになるつか。」

「俺は、いいですけど．．」

「私もいいよ。」

少し、街中に入ってくると、すぐに教会がある。

「教会があるっていうことは、この世界にも神を信仰する習慣があるんですか？」

「ううん。この世界の人たちが信じるのは、「自分自身」よ。

魔法は自分を信じることによって、さらに強力なものになるって言われてるの。

だから、教会に来る人は、自信を持つためとか、パートナーを決める時は、

「パートナーを信じる」ことを誓うのよ。」

「なんか、不思議ですね。

「神」じゃなくて「自分」を信じる・・・か。」

「そうよ。じゃあ、中に入るわよ。」

教会の作りは、地球のものと特に変わらない。

しかし、ひとつの大きな違いがひとつある。

「神を祀っていない」ことだ。さらに、神父もいない。

「あの・・・なにをすればいいんですか？」

パートナーになるための儀式みたいなもの・・・

美羽からは、それしか聞いていないため、何をすればいいかわからない。

「もつと、奥に行けばわかるわ。」

美羽に言われたとおり、奥に行くと台の上に、とても厚い本が置いてある。

その本は真ん中あたりのページが開いてあり、何も書かれていない。

その横には一本の黒い万年筆が置かれている。

「その本に二人の名前を書いて。」

そして、パートナーとなり協力しあうことを誓うのよ。」

言われたとおり、二人の名前をノートに書く。

そうすると、本が光出し、どこからか声が聞こえてくる。

「二人はパートナーとなり、協力し合うことを誓うか。」

「はい。」

「はい。」

聡一と袖月の声が重なる。

光は少しずつおさまる。

もう一度、本を見ると、さっき書いたはずの名前が消えていた。

「これで、パートナーになるための儀式は終わり。」

「あの・・・名前が消えたんですけど・・・」

「それで、いいのよ。」

あの本は、この世界の魔法を司る塔・・・マグメントに情報を送るための本なの。

だから、さっき書いた文字は情報としてマグメントに送られたのよ。

「

「そうなんですか・・・」

あまり意味がわからなかったが、そんなに必要な情報とは思わなかったので、詳しいことを聞かなかった。

「じゃあ、教会の用事も済んだことだし、そろそろ行くつか。」

四人は、教会から出る。

「このあとは、なにをするんですか？」

「そうね、王に会いに行きましょうか。」

「え？」

「別に大丈夫よ。「戦争に協力する」って言えば。」

「・・・そういえば戦争って、いつからですか？」

「五日後よ。聡一君は、人を殺したことがある？」

「あるわけないじゃないですか・・・」

「そう・・・それでも戦争に参加するって言うの？」

「はい。地球を救うために来たんですから。」

「じゃあ、地球のために、人を殺せる？」

「・・・」

「まあ、いいわ。私も敵を殺すつもりは無いから。」

「・・・じゃあ、なんで聞いたんですか？」

「さあ、なんだろうね。でも、私の思ったとおりの言葉が帰って来たから、いいわ。」

「そうですか。」

「うん。じゃあ、王のところに向かいますか。」

四人は、歩き始め、王の住む塔へ向かう。

ザワザワ・・・

「あれって、幽崎氷璃だよな？」

「帰って来たのか・・・」

「これで、この国は安心だね。」

四人が道を歩いていると氷璃を見て、まわりが騒がしくなる。

「氷璃さんって、有名人なんですか？」

小声で美羽に聞く。

「そうよ。この国にとっては救世主みたいなものだからね。」

「そうなんですか・・・」

「おお、氷璃じゃねーか。」

美羽と小声で話していると、横から男の声が聞こえた。

「お？和彦じゃん。もう来てたんだ。」

「おう。そっちの三人は、誰だ？」

「妹と、あとの二人は、あなたと同じく地球から来た人たちよ。」

「そうか。よろしく。俺は、せんだいかずひこ仙台和彦だ。」

和彦は、とてもいい体つきをしており、すごく喧嘩とかが強そうだ。顔も少し怖いような気がする。

しかし、喋り方からは、なんとなく優しさを感じる。

「森嶋聡一です。」

「高梨袖月です。よろしくお願いします。」

「氷璃の妹の美羽よ。」

「聡一、氷璃に手出したら許さねーから。」

「は、はい！」

この言葉には、とてつもない殺気を感じた。

「それで、お前らは、なんで地球から、こっちの世界に来たんだ？」

「地球を救うためです。」

聡一は迷うことなく答える。

「ほう・・・どうやら本気みたいだな。俺も同じ目的だ。」

「和彦さんも戦争に参加するんですか？」

「そうだ。目的も同じだし、一緒に行動してもいいか？」

「僕は構いませんが・・・」

「いいわよ。今から王に会いに行くから。」

「そうか。では行くとするか。」

和彦を加え、五人になった聡一たちは、王のもとへ向かう。

「ここに王が住んでるんですか？」

王が住んでいる塔、それは国に入る前に森から見た一番大きな塔のことだった。

「そうよ。王でも塔の全体を使えるわけじゃないんだけどね。」

「なんで、ですか？」

「そのうち、わかると思うわ。」

「そうですか・・・」

「じゃあ、入りますか。」

塔の入り口を入ると、とても広い空間になっている。

奥の方には、階段があり、さらに上に続いている。

「王は、どこにいるんですか？」

美羽は近くにいた兵士のような格好をした男に聞く。

「王に、なにか用か？」

「ああ、戦争のことです。」

「そうか・・・ならば、その階段を上がって、王の間に入れ。王様は、そこにいる。」

「ありがとう。」

言われたとおり階段を上り、王の間に入ろうとする。

「止まれ。」

王の間の扉の前に二人の兵士がいる。

彼らの腰には、魔法の世界のはずなのに剣が携えてある。

「王に用があるのだが。」

「・・・しばし待たれよ。」

兵士の一人が王の間に入り、二分程度経つと戻ってくる。

「王様から許可が出た。」

そう言うと二人の兵士は王の間の扉を開け、五人を王の前まで連れていく。

「なんの用だ。」

「戦争に参加したい。」

「なに？」

「私たちは本気だ。」

美羽の話し方は、王に対する態度とは思えないほど強気だ。

「そうか・・・ならば、お前ら五人の参加を認めよう。」

「ありがとうございます。」

「お礼を言うのは、こつちだ。他に用はあるか？」

「いいや、もう無い。では。」

美羽は回れ右をして、四人に「ついて来い」という態度で王の間から出る。

そのまま王が住んでいる塔の出口まで行く。

「ふう、緊張したー」

どうやら美羽も緊張していたらしい。

「一つ気になったんですが、なんで簡単に僕たちの参加を認めてくれたんですか？」

「前に、この国が戦争に負けてしまう理由、教えたよね？」

「はい。戦える人はいるけど、弱いつて・・・」

「王の間の前にいた兵士つて武器を持っていたよね？」

「そういえば、剣を持っていましたね。」

「あれは、魔法じゃ犯罪者の一人も捕まえられないからよ。もともと、この国は皆で暮らすための国だったの。」

「だから国の人たちが使える魔法は生活のための魔法ばかりなのよ。それを戦争のときは、無理矢理、攻撃の形にして使うだけだから、勝てるわけがない。」

「さらに普段は戦うこともない。だから身を守る方法もわからない、っていうこと。」

「確か、戦争に参加するのは十人ですよ？」

「じゃあ、俺たち以外の五人はどうなるんですか？」

「国民や兵士の中でも戦える人を使うんじゃない？」

「そうですか・・・」

「ねえ、いつまでも喋ってないで進もうよ。」

氷璃が言う。

袖月と和彦も「早くしろ」というような顔で見ている気がする。

「わかったわよ・・・」

五人は歩き始める。

「これから、どこ行くの？」

「美羽の家だよ。」

「なんで、うちのなのよ・・・」

「この国に住んでるの、あんただけでしょ？」

「しょうがないわね・・・」

「美羽さんつて森の中の小屋に住んでるんじゃないんですか？」

「あの小屋は、魔法の練習をするときに泊る小屋よ。」

「なあ、氷璃 こいつらの使う魔法ってなんなんだ？」

和彦が口を開く。

「美羽の家に行ったら説明するわ。あと、戦争のときの戦い方もね。」

「そうか・・・」

五人は、話しながら美羽の家へ向かう。

act 12 戦争のルール

美羽の家は、日本のどこにでもあるような一軒家で、結構、綺麗な家だ。

「じゃあ、まずは戦争のルールについて説明するわ。」

戦うことに関しては、氷璃が一番詳しい。

過去に戦争に参加した経験もある。

「まず戦争についてのルールだけど、覚悟してね。

もしかしたら、腹が立つかもしれないから。」

「大丈夫です。」

「私も・・・覚悟はできてます。」

「速く、教えてくれよ。」

「まず、この星で戦争が行われている理由だけど、領土の奪い合いなの。」

十年に一度、戦争が行われるわ。私も十年前に参加したんだけどね。それで、この戦争は、この星のルールみたいなものだから、どんなに仲の良い国どうしても戦争をしないではいけないの。

ここまででいい？」

「はい」

「はい・・・」

「おう」

「次は戦争のルールよ。」

お互いに十人の魔法使い、もしくは戦える人を出すの。

その人たちは、戦争の会場・・・わかりやすく言うとスポーツのコートみたいなのにつれていかれるわ。

そのコート内で、集められた人は戦う。

勝つための条件は、相手を全員、殺すか戦闘不能にすること。

降参は認められていないわ。」

「なんですか、そのルール！ゲームみたいじゃないですか！」

「そうよ。私もルールを聞いただけで腹が立つたわ。

でも、今回は本気で勝たないといけない。そうでしょ？」

「はい・・・」

「じゃあ、次は戦い方を考えるわ。最初に何か聞きたいことはある？」

「三人の魔法を教えてください。」

「あ、そっか和彦は私の魔法しか知らないんだもんね。

うーん・・・一人ずつ自分の魔法を説明してもらおうかな。」

「じゃあ、私から。」

私の魔法は風を操る魔法よ。遠距離攻撃が得意かな。」

「次は俺が・・・合成魔法です。二つの魔法を合わせて新しい一つの魔法を作り出す魔法です。」

「なんだよ、それ・・・すごいじゃねえか。」

「ありがとうございます。」

「えっ・・・えと、私は重力を操れます。」

「なんで、お前らは、そんなすごい魔法を使えんだよ・・・

俺なんて、植物だぜ？」

「でも、あなたの魔法、応用の幅が広すぎて恐ろしいのよね・・・

これで、皆の魔法がわかったことだし、戦い方を説明するわ。

まず、和彦は私たち以外の五人を守ること。いい？」

「戦わなくていいのか？」

「うん。あんたが本気出したら国が崩壊するからね。

いい？守るだけよ。攻めちゃダメだから。」

「わかったよ・・・」

「柚月ちゃんは私たちの補助を頼んでいい？」

「ど・・・どんなふうにですか？」

「相手にかかる重力を大きくしてくれればいいわ。」

「わ、わかりました。」

「私と美羽は攻めるから。」

「あのー、俺は何をすれば？」

「君は攻めの要だから。よく聞いてね。」

「はい。」

「柚月ちゃんの魔法が届く範囲の最前線で戦ってもらっわ。相手の使った魔法は、できる限り合成すること。」

「いいわね？」

「わかりました。」

「まあ、余裕で勝てると思うけどね。」

「もし危なくなったら、和彦も攻めに力を入れてもらっわから。」

「戦争のための作戦は完成した。」

「戦争までは、あと五日ある。」

「十分に戦い方を練習する時間があるというわけだ。」

「そして、五人は戦争が終わるまで美羽の家に滞在することにした。」

act 13 吸収と合成

「とりあえず、実戦で試してみますか。」

氷璃の提案で、もう一度、森の中で特訓をすることになった。

王に戦争への参加を言った次の日だ。

戦争まで、あと四日。

五人は森の中で、なるべく木の少ないところに行く。

「じゃあ、始めますか。」

とりあえず、聡一君と和彦が戦ってみて。

そうそう、聡一君は袖月ちゃんがいないと戦えないから、袖月ちゃんは合成をさせるだけね。じゃあ、始めて。」

「聡一、俺に勝つ自信あるか？」

「ありませんよ・・・」

「そうか。俺は手加減するつもり無いからな。」

お前も全力で来いよ。」

「わかってます」

サッ！

和彦は聡一の懐に飛び込み、一発強烈な打撃を繰り出す。

「ゴホッ・・・ゴホッ・・・」

その打撃は聡一の腹部に直撃し、膝をついてせき込んでしまう。

「ストープ！」

「え？」

「和彦、喧嘩の練習じゃないんだから魔法、使つてよ。」

「すまん、すまん。地球にいるときは魔法を使わないようにしてるせいでさ、普通に殴りかかっちゃったよ。」

「聡一君、大丈夫？」

「は・・・はい。」

「じゃあ、もう一回。今度は魔法、使つてよ。」

「はいよ。」

サツ！

和彦は、さっきと同じように懐に潜り込んでくる。

しかし、雰囲気がまったく違う。

「！！！」

和彦は、あと少しの所で腕を止め後ろに下がる。

「なんだよ・・・その魔法・・・俺の魔力が吸い取られるような感じがしたぞ。」

「え？でも、まだ合成はしてませんよ。」

「なるほどね。」

「なにか、わかったんですか？」

「聡一君に、私が攻撃魔法を使った時のこと覚えてる？」

「前に、魔法の特訓をしていたときですか？」

「そうよ。あのとき使った魔法って当たれば結構、ダメージを与えられるんだけど、

聡一君は全然大丈夫そうだったよね？」

「はい。気づいたら合成が始まっていて・・・」

「それでも、合成する前にダメージがあるはず。

それで私が思ったことなんだけど、魔法を合成する前に魔法を聡一君が「吸収」してるんじゃないのかなって。」

「吸収・・・ですか・・・」

「そうよ。もし、これが本当だとしたら聡一君は魔法が相手だったら無敵つてことだよな？」

「そう・・・なるんですか？」

「多分ね。じゃあ、試してみましようか。」

「なにをすればいいですか？」

「柚月ちゃん、聡一君に魔法を使ってみて。」

「は・・はい」

柚月が魔法を使うと聡一は体が重くなるのを感じる。

「柚月ちゃん、もっと強く。」

「わかりました。」

重力が大きくなるのを感じる。

しかし、柚月は魔法を強め続けているはずなのに重力は段々、元に戻る。

「あ・・あれ？」

「どうしたの？」

「魔法が・・使えなくなりました・・」

「大丈夫よ。聡一君に全部、吸収されただけだから。」

聡一君、なんか感じない？」

「なんていうか・・不思議な感じですよ。」

「今から私が魔法を使うから、吸収した魔法と合成してみてください。」

「やってみます。」

氷璃が魔法を使うとき、まわりの気温が少し下がる。

そして、氷の粒が浮き上がり、聡一に向かって飛んでいく。

氷の粒は聡一まで、あと三十センチほどのところで、渦を巻きながら消えていく。

氷の粒は消えたあと聡一のまわりに、もう一度出現する。

「今、出ている氷は操れます。」

「そう。じゃあ、一回ストップ。」

氷の粒は全て消える。

「次は、二つの魔法を吸収したままの状態を保てるか試してみてください。今のは、私の魔法を吸収したあと、すぐに合成したでしょ？」

「はい。」

「柚月ちゃん、一つ目の魔法よろしくね。」

「はい。」

さつきと穴時ように袖月は少しずつ魔法を強くしていく。

「もういいですか？」

「いいわよ。次は私の魔法よ。すぐに合成しないで一回、吸収したままの状態を保ってね。」

氷璃も、さつきと同じように冷気を発生させながら、氷の粒を作り出す。

聡一に向かって飛ぶ氷は、渦を巻くように消えていく。

そのあと、聡一のまわりに氷は発生しなかった。

「どう？」

「わかりません・・・でも、これでいいんですよ？」

「うん。次は吸収した二つの魔法を合成してみて。」

「やってみます。」

聡一が合成を始めようとすると、氷璃が魔法を使うときと同じように冷気が発生する。

そのあとに発生する氷の粒も氷璃のものと似ている。

「なんか、目の前で自分と同じ魔法を使われると不思議な気分になるわね。」

「このあとは、どうすればいいですか？」

「そうね・・・私に向けて氷を飛ばして。」

「・・・わかりました。」

氷璃が言うのだから、なにか考えがあると思い、氷の粒を飛ばす。

氷璃は身を守るための氷の盾を作り出す。

聡一が飛ばした氷の粒は、氷の盾に連続して当たる。

最後の一粒が当たったとき、氷の盾が粉々に割れた。

「すごいじゃない。私が使ったときの氷の粒だったら、この盾に傷すらつけられないのよ。」

「多分、高梨の魔法と合成したからだと思います。」

「そうね。二つの魔法の魔力が合成されて、さらに袖月ちゃんの魔法のおかげで

氷の硬さや形を変えることも可能だからね。」

「はい。そういえば美羽さんと和彦さんは？」

「むこうで戦っているわ。聡一君と袖月ちゃんに魔法の使いかたを教えるのは私で

美羽と和彦は、実戦をして新しいことを見つけてるのよ。」

「そうなんですか・・・」

「もしかして、気になる？」

「はい。」

「見に行こうか？」

「いいんですか？」

「うん。袖月ちゃんも、それでいい？」

「はい。」

美羽と和彦が戦っているところに近づくにつれて、強風が吹き荒れ、地面が少し揺れている。

「な・・・なんですか・・・この風と揺れは・・・」

「美羽も和彦も派手にやっってるわね。」

「なんで落ち着いていられるんですか・・・」

「見てみ。」

氷璃が指さす方向を見ると美羽と和彦が派手に戦っている。

しかし、二人の表情は、とても楽しそうだ。

「多分、聡一君じゃ、あの二人の本気の魔法は吸収できないと思うわ。」

そのとき、戦いに動きがある。

和彦は聡一の懐に潜り込んだときと同じように、美羽の懐に潜り込む。

攻撃が当たるとかと思った瞬間、美羽の体が消えている。

そして、背後に回り込んだ美羽は和彦の頭をめがけて蹴りを繰り返す。

和彦はそれも、わかっていたかのように左腕を上げ、蹴りから身を守る。

「なんで二人とも魔法を使わないんですか？」

「使ってるわよ。美羽は移動のために、和彦は防御のためにね。」

「・・・攻撃には使わないのは、なんですか？」

「移動と防御のためにしか使っていないのに、これだけの強風と揺れが起きてるのよ？」

二人が本気で戦ったら森はぐちゃぐちゃになるし、お互いに命の危険もあるからよ。」

「・・・」

思わず言葉を失う。柚月も驚いているような表情をしている。

急に、さっきまでの強風と揺れがおさまる。

「皆、来てたんだ。」

戦いを中止して、美羽が聡一たちの方を見る。

「うん。二人とも、なにか新しいこと見つけた？」

「和彦さんは、魔法、使わない方が強いっていうことかな。そっちは？」

「聡一君の魔法に大きな進展があったわ。それより、和彦が魔法、使わない方が強いっていうのは、どういうこと？」

「さあね。とにかく魔法を使うと隙だらけになるのよ。だから、魔法を使うのは防御のときだけが一番いいと思うの。」

「そう・・・和彦は自分で、どう思う？」

「・・・美羽の言うとおりだよ。」

「じゃあ、色々な防御の形を考えてみたら？相手によって使う魔法は違う訳だし。」

「わかった。美羽、もう一回、付き合ってくれよ。」

「はいはい。」

「あの二人、ずいぶん仲良くなったみたいね。」

「そうですね。」

「次は柚月ちゃんの魔法を鍛えましょうか。いい？」

「は、はい。」

「俺は、なにをすればいいですか？」

「これから考えるわ。」

さっきまで合成魔術の特訓をしていたところに聡一、柚月、氷璃の三人で向かう。

「柚月ちゃんにやってもらいたいことは、重力を地面に向かって強くするんじゃないかって別の方向にも使えるようになってほしいの。」

「あの・・・もう、できます・・・。」

「え？本当に？」

「じゃあ、どのくらい力の強さの重力なら発生させられるかやってみて。」

「何に重力をかければいいですか？」

「そこにある岩でいいわよ。」

「手加減しないで本気でやってね。」

「柚月は指定された岩に近づくと。」

「岩の大きさは、柚月の膝くらいまであり、丸い形をしている。」

「柚月が魔法を使い始めると、岩は」

「ズズズツ！と音をたてながら、地面にめり込んでいく。」

「す・す・すいわね・・・」

「そ・そんなことありません・・・」

「本当にす・すいわよ！見方に、こんなす・すい魔法使いがいるなんて、す・す・すい心強いわ。」

「でも、重力ですよ・・・」

「重力だからいいのよ。相手の動きを制限できるし、味方にかかる重力を小さくすれば、味方は動きやすくなるし。」

「すばらしい魔法だと思わない？」

「そうですね？ありがとうございます！」

「柚月は、す・すい明るい表情になる。」

「それぞれ新しいものを見つけ出そうと特訓を続ける。」

「そして、日が暮れると美羽の家に行き、休息をとる。」

「こうしている間に戦争に刻一刻と近づいていく。」

戦争の前夜、聡一は眠れずにいた。

氷璃や美羽、和彦がすごい魔法使いだということは身をもって体験しているわけだし

心配は、なにもないはずなのだが、柚月のことが心配だった。ずっと無口で、どんな人なのかも、あまりわかっていない。

「今から、柚月のところに行こうか・・・」

そうも思ったが、もう遅いので、やめることにした。

そのとき、聡一の寝ている部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「はい。」

「こんな時間にすみません・・・でも、どうしても聡一君と話したくて・・・」

この声は柚月の声だ。つまり部屋に来たのは柚月ということだ。

「・・・どうぞ」

ちょうど柚月のところに行こうと思っていたときに柚月が来る。

こんなに良いタイミングなのは偶然なのだろうか。

「夜、遅くにごめんなさい。でも聡一君と話しておきたくて・・・」

「いいよ。俺も高梨のところに行こうと思ってたし。」

「そうなんですか。あと・・・柚月って呼んでくれませんか？」

「うん。じゃあ柚月も敬語、使うのやめて。」

柚月はコクツツと小さく頷く。

部屋は暗いため、顔は、よく見えないが少し照れていることはわかる。

「あの・・・聡一君は戦争のこと、どう思う？」

「・・・くだらないと思う。多分、この戦争を始めた人たちは遊びだと思ってるんだろうね。」

「そうですね。ルールも、なんかゲームみたい・・・」

「そんな、ふざけたゲームだとしても真剣に参加しなくちゃいけない。」

地球を守るためだからな。」

自分では、気づいていないが聡一は思わず熱くなっていた。

「聡一君は、すごくいい人ですね・・私なんて・・。」

「そんなふうにつつちゃダメだと思うよ。」

「え？」

「氷璃さんにも言われたとおり、もっと自信を持たなくちゃ。」

俺は袖月が、魔法使いとしても人としてもいい人と思ってるから。」

「そ・・そんな・・。」

聡一は、やっと自分がとても恥ずかしい台詞を平然と言っていたことに気づく。

顔が焼けるほど恥ずかしい。

「ごめん・・俺、なんか変なこと言っちゃったな・・。」

「そんなことないですよ。ありがとうございます。」

袖月は、他のなにものもない純粹な笑顔を聡一にむける。

「よし、じゃあ明日の戦争、がんばろうか。」

「はい。がんばりましょう！」

「もう寝なくちゃな。袖月も部屋に戻ったら？」

「はい。明日、パートナーとして、よろしくお願いします！」

袖月は手を出している。

聡一は、その綺麗な手を握り、握手をする。

三秒くらい、その状態のままだ。

そのあと、袖月は笑顔のまま部屋に戻っていく。

act 16 開戦当日

まったく眠れないまま朝が来る。

外は、もう明るい。

部屋から出て、リビングに向かう。

「おはよう、聡一君。早いわね。」

リビングには、もう氷璃がいた。

「おはようございます・・・」

「ちゃんと眠れた？」

「全然、寝れませんでしたよ・・・」

「大丈夫？じゃあ、朝ごはん作るから、ちょっと待ってて。」

「なにか手伝いますか？」

「いいわよ。ゆっくりしてて。」

どうせ手伝ったところでなにもできないのは、わかっている。だから、素直に言葉に甘えることにした。

氷璃が朝食を作り終わるのを待っていると袖月が起きてくる。

「おはよう。」

「おはよう。」

昨日のおかげで袖月と話しやすくなっている。

袖月は氷璃のいるキッチンに行く。

何を話しているのかはわからないが楽しそうだ。

会話が終わると袖月がリビングに戻ってきて、聡一の正面に座る。

そして、すぐに美羽が起きてくる。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

「おはよう。二人とも早いわね。」

「お待たせ。」

ちょうど朝食も完成したようだ。

氷璃は、次々と料理を並べる。

「そういえば、和彦がまだおきてないわね。」

「俺、行ってきますか？」

「私が行くわ。」

氷璃は階段を上がっていき和彦が寝ている部屋に行く。

「そうそう、今日の日程だけど九時開戦だから。」

「九時って・・・」

時計を見ると七時を指している。

「あと二時間しかないですか！」

「大丈夫よ。会場、結構近いから。」

「そうじゃなくてですね・・・」

そのとき階段を下りてくる音が聞こえる。

氷璃と和彦が二階から下りてくる。

そして、テーブルの前に置いてある椅子に座る。

「皆そろったし、食べましょうか。」

「いただきます。」

聡一は少し急ぎながら朝食を食べる。

「そんなに慌てなくても大丈夫よ。ちゃんと間に合うから。」

「そうですか？」

食べる速度を落とし、ゆっくり料理を口に運ぶ。

氷璃の作る料理は、いつ食べてもおいしい。

「そういえば、敵国の名前ってなんですか？」

「そういえば言ってなかったわね。」

アカルよ。アカルの国。」

「アカル・・・ですか・・・」

当然、聞いた事などない。

「アカル」これがこれから戦争をしなくてはいけない国の名前・・・

「皆、食べ終わったみたいだし、片づけるわよ。」

「ごちそうさま。」

「ごちそうさまでした。」

手を合わせながら言う。

時計の針は七時四十五分を指している。

「八時になったら出発するから準備しておいてね。」

食器を片づけながら氷璃が言う。

「あと十五分しかないですか・・・」

もっと早く行つてくださいよ・・・」

「ごめん、ごめん。」

聡一は準備を始める。

準備とはいっても、ほとんどすることはなかった。

結局、五分程度だけ昨日の夜寝た部屋を見るだけだった。

まず、こっちの世界に何も持ってきていないのだから準備なんてもともとなかった、ということだ。

「準備できた？」

玄関に美羽と氷璃が立っている。

和彦も玄関に行く。

聡一が部屋から出ると、ちょうど柚月も玄関に向かうところだった。二人は一緒に玄関に向かう。

「じゃあ、出発するけどいい？」

美羽が確認をして家に鍵をかける。

そして、氷璃が案内する形で五人は戦争が行われる会場に向かう。

act 17 開戦

「ここから、戦争の会場に向かうわよ。」

「ここって・・・」

着いた場所は王の住んでいる巨大な塔だ。

戦争に参加することを言うとき、来たことがあったので覚えている。

そのまま建物の中に入り、王の間へ向かう。

「戦争に参加するために来た。王に会わせてくれないか。」

こういうときに話すのは、やはり美羽だ。

そして、前と同じように、かなり強気な話し方だ。

「おお、来てくれたか。では、案内するぞ。」

王の間には、もうすでに聡一たち以外の戦争に参加すると思われる五人がいた。

「俺たち以外に戦争に参加する五人って、あの人たちですか？」

小声で氷璃に聞く。

「多分そうね。」

王が戦争の会場に案内するために歩きだす。

そのあとを聡一たちがついていく。

先にいた五人は聡一たちの後ろを歩いている。

ひとつの建物の中だというのに、ありえないほどの距離を歩かされる。

もう、十分くらいは歩いているだろうか。

「ここから戦場に向かってもらう。」

大きな扉の前で王が言う。

その扉を兵士が開けると、目の前には森が広がっている。

しかし、聡一の知っている森とは少し違う。

道は石造りになっているし、横には石の柱が等間隔で立っている。王は道に従って進み始める。

道は、ずっと一直線に続いている。

五分くらい歩くと、正面に大きなドーム状の建物が見えてくる。

「あの建物が今回の戦場だ。」

王は歩きながら、冷静に言う。

しかし、その奥には不安があるということが丸わかりだ。

ドーム状の建物の前につく。

この建物の入り口も、巨大な扉だ。

王が扉を開け中に入ると、目の前に高さ三メートルはあると思われる壁がある。

今度は、その壁にそって歩き始める。

そうすると、すぐに壁に扉がある。

扉の大きさは普通のものだ。

「この中で戦争が行われる。

覚悟はいいか？」

王は扉に手をかける。

聡一は口に溜まった唾液をのみ込む。

王が一気に扉を開けると、中の様子がすぐにわかった。

どうやら中の作りは、闘技場のようになっている。

障害物や隠れられるような場所は、いっさい無く直接、戦うことになりそうだ。

敵国の魔法使いは、まだ到着していなかったため、中に人の姿は無かった。

聡一たちは戦場で敵国の魔法使いの到着を待つ。

しばらく待っていると聡一たちが入って来た扉の正面にある

同じつくりの扉が開き、人が入ってくる。
敵国の魔法使いらしい。人数も、ちょうど十人だ。
戦場の空気が一気に重くなったような気がする。

両国の魔法使い、計二十人が戦場の中心に集まる。

そして二人の王が戦争の開始を宣言する。

その後、二人の王は戦場から出ていき、

少し高い位置にあるガラス張りになっている部屋に行く。

その部屋からは戦場全体の様子が、すべてわかる。

そして戦場いっぱい大きな鐘の音が響く。

これが開戦の合図のようだ。

戦争について、あまり詳しく知らない

聡一、柚月、美羽、和彦は少し戸惑う。

一度、戦争に参加した経験のある氷璃は落ち着いた表情をしている。
相手も様子を窺っているのかなかかなか動き出さない。

そのまま五分くらいの時間が経ったとき

敵の一人がものすごい速度で柚月に襲いかかった。

「キャッ！」

柚月が悲鳴をあげるが、ギリギリのところまで氷璃が攻撃を止めてい
る。

柚月に襲いかかった敵は剣を持っている。

前に氷璃が言っていたように魔法使いが剣を使うのは珍しいことだ。

柚月に皆が注目している間に敵が散開してしまった。

「なにしてんのよ！集中して！」

氷璃の一言で皆、まわりを見る。

見事に敵に囲まれている。

囲まれていることに気づけたのはいいのだが

どのように対応していいのかわからない。

少しずつ敵が迫ってくる。

ある程度近づいたところで聡一の目の前にいた敵が魔法を使う。その敵の魔法は炎を発生させるだけの単純な魔法だった。

聡一は、その魔法を全て吸収する。

「な、なんだよ・・・こいつ・・・」

敵は驚きを隠せず、少し怯む。

その隙を逃さず、さっきの炎をあらかじめ吸収しておいた柚月の魔法と合成する。

巨大な火の玉が聡一の目の前に発生し、敵に向かって進んで行く。そのまま敵に当たり、敵の体は炎に包まれる。

「あ・・・熱い・・・助けてくれ・・・」

その敵は近くにいた、もう一人の敵に近づく。

近づかれた敵は無言のまま水の魔法を使い火を消す。

「くそ・・・あいつの魔法は、なんなんだよ・・・」

どうやら火傷は、そこまで重度のものではないようだ。

ドゴンッ!!

聡一は背後から聞こえた、ものすごい音に驚き振り向く。

そこには、敵の一人が倒れており、その横で和彦と別の敵が殴り合っている。

美羽は柚月の援護を受けながら、攻撃を繰り返している。

氷璃は、もうすでに二人の敵を氷づけにして戦闘不能にしている。

皆の強さに驚く。

柚月も戦っているのだからやるしかない。

もう一度、前をむくと五人の敵が聡一の前に来ている。

五人は同時に魔法を発動させる。

五つの魔法が混ざり、どんな種類の魔法なのかすらわからない。

しかし、その魔法は聡一の合成魔法とは違い一つの魔法になっているわけではない。

その魔法が聡一に当たりそうになるが、聡一は全て吸収する。

こんなに、たくさん魔法を一度に吸収したのは初めてだ。そのせいか、無意識のうちに合成が始まってしまふ。

聡一の前に巨大な白い光の玉ができる。

その白い光の玉は前にいる五人の敵に向かって飛んでいく。敵に当たった瞬間、光の玉は爆発するかのようになり、さらに強力な光を放ち消えてしまふ。

聡一が目を開けると五人の敵が倒れている。

「すごいじゃない。」

後ろから氷璃の声が聞こえてくる。

自分でやったにも関わらず驚きのあまり言葉が出ない。

「俺と美羽が一人、氷璃が二人、聡一が五人か。」

残る敵は一人だけだな。」

和彦が言う。

そして、全員で最後の一人を探すが見つからない。

障害物や隠れる場所など一切ない。

この戦場で見つからないなんてことは、ありえないはずだ。

「くそ……どこにいるんだよ！」

和彦が大声を出した瞬間、和彦の左肩から血が噴き出す。

「ここだよ。」

低く暗い声の刀を持った男が和彦の横に立っている。

「なん……でだ……全然、見えなかったぞ……。」

和彦が左肩をおさえながら言う。

「どうやら、一番やつかいな敵みたいね。」

皆、油断するんじゃないわよ。」

氷璃の一言で皆、一人の敵に集中する。

しかし、また敵の姿は無かった。

見えない敵と戦う、これは聡一たちの全員が初めてだ。

そんななか、美羽だけが冷静に考え、まわりの空気の流れを変えている。

「なに、やってるんですか？」

「静かに！集中させて。」

美羽は目を閉じ、なにかに集中しているようだ。

そして、少し時間が経ったとき目を開け、魔法を発動させる。

鋭いかまいたちのような風を正面に放つ。

カンッ！

金属と金属がぶつかり合うような音がする。

「へー、風の動きの音で見えない俺の場所を把握したってわけね。」
敵がもう一度、姿をあらわす。

刀で美羽のかまいたちを弾き返したようだ。

「どうやら、あいつの魔法は透明になる魔法らしいわね。」

氷璃が言うが聡一は、それがわかった時点で対処法がないので意味がないと思った。

「こいつの相手は私がするわ。」

美羽の表情は、とても怖い。

さつき、空気の動きで相手の位置がわかった。
だから美羽がこの敵の相手に最も適している。

美羽が一步前に出る。

「美羽！無理すんじゃないわよ！」

氷璃が声を大きくして言う。

美羽は、それに対して大きく頷く。

目を閉じ、もう一度集中する。
敵の動く向き、攻撃をしてくる位置、すべてを空気の動き方から感じる。

右から左方向に向かっての刀の動き・

その動きに合わせて風の壁を作る。
キイイイイ・・と金属同士が擦れるような音がする。

腰の刀をもう一本抜く・・
さらに二本の刀を持ち近づいてくる・・
早さは・・並み程度・・

攻撃に備え一心、風の壁を作る。

カンッ！カンッ！カンッ！

何度も斬りつけてくるが全て風の動きを変え、弾き返す。
何発か弾き返した後、美羽は右手を横に振る。
その瞬間、刀が回転しながら飛んで行くのが見える。
「残り一本ね。」

敵が後ろに下がった・・
今度は何を狙っているんだ・・

なんで・・動きが無い・・

「美羽、目を開けて。」

敵は、また姿を現している。

美羽も集中をやめ、風の動きも元に戻る。

「ハア、ハア・・・」

美羽の呼吸から相当、疲れているということがわかる。

「柚月ちゃん、魔法！」

「え？」

「あいつにかかる重力を大きくするのよ！」

「はい！」

氷璃の指示どおり柚月が重力を大きくする。

「これで、動きが遅くなったわ。透明になっても無駄よ。」

「くそ・・・」

それでも敵は透明になる。

「無駄って言うてるでしょ！」

氷璃は氷の粒を敵のいた場所に放つ。

しかし、氷の軌道は変わらず、まっすぐに飛び続ける。

「当たってない!？」

驚くことに敵は柚月の重力から抜け出したらしい。

「君が一番、やっかいらしいね。」

柚月の背後から声が聞こえる。

皆、柚月のほうを向くと刀を振り下ろそうとする敵の姿。

その瞬間、敵と柚月の間に茶色い壁ができる。

敵が刀を振り下ろすと、すぐに真っ二つに切れてしまったが柚月を守った。

「こんなふうな魔法、使ったの初めてだな。」

和彦が言う。

そして、和彦は敵の懐に潜り込み強烈な打撃を一発。

「ゴホ、ゴホ・・・」

敵は咳をしながら、その場に膝を地面につけるような体勢になっている。

聡一は、その隙を逃さず、あらかじめ吸収していた氷璃の魔法と袖月の魔法を合成し、氷の粒を放つ。

敵は氷の粒を刀で弾こうとするが全て弾くことはできなかった。氷の粒は左肩にあたり、その部分が凍りつく。

「聡一君、いい判断だね。」

氷璃が笑顔で言う。

「さあ、もう終わりにしましょうか。」

氷璃が魔法を発動させる。

敵の体は、ゆっくりと凍りついていき全身が氷に包まれる。

「終わった・・・んですね」

袖月が悲しそうな表情をしながら言う。

「そうよ。終わったの。私たちの勝ちよ。」

二人の王が戦場の中に入ってくる。

「これで終戦だ。国に戻るぞ。」

ラグの国の王が言い、聡一たちを国につれて帰ろうとする。

「待ってください。」

氷璃は氷づけにした三人のところむかい、氷を溶かす。

しかし、中にいた敵は気絶したままだ。

「いいわ。行きましょう。」

ラグの国のメンバーは国に戻る。

アカルの国の王は戦闘不能になった十人の魔法使いを一か所に集め、治療魔法を使える魔法使いをつれきて、治療を始める。

戦争は、とても少ない時間で終戦を迎えた・・・

act 18 終戦（後書き）

アカルの国のやつら弱くしすぎましたね（笑）

出てくる敵が最初から強いというのがあまり好きではないので
こつという結果になってしまいました。

次回もよろしくお願いします。

act 19 お祭り

ラグの国につくと、すぐに王の間へつれていかれる。

「みなさん、本当にありがとう。」

これで、我が国は救われた。今夜は祭りがおこなわれる。

勝利を国民全員で祝おうじゃないか。」

王の言葉を貰い、聡一たちは王の住む塔から出る。

国の中の様子は、とても賑やかだ。

戦争前は少し暗い雰囲気だったのに、皆、明るい表情をしている。

「皆さん、本当にありがとうございました!」

「英雄の帰還だ!」

など国の人々は聡一たちを褒めたたえている。

そんな中を歩きながら、五人は美羽の家へと向かう。

「皆、お疲れ様。」

氷璃が笑顔で言う。

「あのー、意外と楽々勝てたような気がするんですけど・・・」

「そりゃあね。アカルの国なんかに負けるようだったら話しにならないわ。」

「え・・・もしかして・・・」

「そうよ。二週間後に、また戦争があるわ。」

「・・・どういうことですか?」

「まあ、この星にある国のほとんどが戦争に参加してるから仕方のないことよ。」

負けたら、もう戦争に参加しないでいいんだけどね。

次は、もっと強い国と戦争することになると思うから。」

「またですか・・・」

「うん。戦いの形式は変わるけどな。」
「もう、戦争の話はやめて、お祭りに行きましょよ。」
美羽が提案し、皆でお祭りに行くことにする。

家から一歩出ただけで、とても賑やかだ。

王の住んでいる塔の前にある広場には、なにやら不思議な石碑が置かれていた。

「あれ、前からありましたか？」

「うん？ ああ、あれは今回の戦争の詳細が書かれている石碑よ。」

「へえー、すごいですね。」

「そうね。そういえば聡一君と柚月ちゃんはそうするの？」

「どうするって、なにをですか？」

「戦争も終わったし地球に帰るんでしょ？」

「俺は、そうするつもりです。」

「柚月ちゃんは？」

「私も、帰りたいんですが・・・」

地球で私は死んだっていうことになってるし・・・

「聡一君の家にかくまってもらったら？」

「な、なんでうちなんですか！」

「パートナーだからいいんじゃない？」

「よくないですよ！」

「聡一君は嫌なの？」

柚月が顔を真っ赤にしながら聞いてくる。

「い、いやでは・・・ないけど・・・」

「じゃ、じゃあ・・・」

「わ、わかったよ・・・」

「はい、決定。」

柚月ちゃんは地球にいるとき聡一君の家に住むっていつのことかで。

「・・・」

「・・・」

聡一と柚月は顔を赤くしたまま黙っている。

「さあ、お祭りを楽しみましょう。」

気がついたら美羽と和彦がいなかった。

よく見ると少し離れたところで、

なにやら飲み物を飲みながら国の人たちと楽しそうに話している。

「ほら、聡一君も柚月ちゃんも戦争で活躍したんだから。」

氷璃に背中を押され、美羽と和彦のいるところにつれていかれる。

たくさんの人、たくさんのお祭りや飲み物を飲み食いし、お祭りを
楽しむ。

これほど大きなお祭りをするということは、

戦争に勝ったということが相当、重要なことだったのだろう。

聡一たちは、日が暮れるまでお祭りを楽しむ。

そして、お祭りが終わった後は、もう一度、美羽の家に集まる。

「あー、疲れたー」

「本当にお疲れ様。ありがとうね・・・」

「いえいえ、俺はなにもしてませんよ。」

活躍してくれたのは柚月です。」

「そうね。柚月ちゃん、あなたに魔法、もっと強くなるわよ。」

「そうですか？」

「うん。今度、こっちに来た時にもっと特訓してあげるね。」

「ありがとうございます！」

「そういえば、次の戦争どうするんですか？」

「多分、大丈夫よ。」

今回みたいな大人数の団体戦になるのは珍しいことだし。」

「そうなんですか？」

「そうよ。少ない時は一対一っていうときもあるし。もし、また困ったことがあったら協力してくれる?」

「はい。喜んで!」

「いつ地球に帰るの?」

「明日・・・でいいですか?」

「いいわよ。もう一回、美羽の魔法で地球に戻る事になるわね。」

「はい。」

そういうえば、和彦さんも地球の人なんですよね?」

「そうよ。和彦も君たちと一緒に地球に帰ると思うわ。」

「わかりました。」

「そうだ、柚月ちゃんと一緒に暮らすことになったけど、覚悟はできてるわよね?」

「わかってますよ・・・」

聡一の家には親がいないため、柚月を家に住ませること自体は問題がなかった。

「柚月ちゃんもいい?」

「・・・はい」

「もう今日は疲れたでしょ?そろそろ寝たら?」

「・・・まだ大丈夫です。」

「そう?」

それからは、魔法の話し、戦争についての話し、これからのことについてなど色々な話しをした。

そして、気がついたころには皆、寝てしまっていた。

act20 「魔法」の「力」

「皆、起きて。」

氷璃の声で目を覚ます。

「どうやら全員、話をしているうちに眠ってしまっていたようだ。」

「うう・・・」

少し頭が痛いような気がする。

それでも無理矢理、体を起こしあげる。

「さ、もう地球に帰る準備をしないと。」

美羽の地球に行くための魔法は使える時間が決まってるのよ!」

氷璃は慌てて皆を叩き起こす。

全員、まだ寝むそうな顔をしているが、氷璃が無理矢理、四人をつれて森の中へと向かう。

この世界に来て初めて泊った小屋に来る。

さらに森の奥に進んで行くと、

石の地面にある丸い形の中に複雑な模様が書かれた場所に来る。

「ここが地球とこつちの世界を行ったり来たりする場所よ。」

五人とも、この模様の中に入る。

「美羽、あとは頼んだよ。」

氷璃が模様の中から出ると、美羽が魔法を発動させようとする。

「じゃあね、聡一君、柚月ちゃん、和彦。」

また会いましょう。」

「はい!また会いましょう。」

「氷璃さん、さようなら」

「またな。」

こつちの世界に来た時と同じようにブラックホールのようなものが発生する。

その中に吸い込まれると、すぐに気を失ってしまった。

「ううん．．．」

聡一が目を覚ますと、自分の家のリビングにいた。

「あの魔法って好きな場所に出られるのかな？」

そのとき、なにか左手に柔らかいものがあたってるのを感じる。そっと見てみると、そこには袖月が寝ている。

「ううん．．．」

思わず驚いてしまう。

「そうだった．．．今日から袖月と一緒に暮らすんだった．．．」

袖月、起きるよ。」

背中に手をあて、軽く揺する。

「ううん．．．」

ひいつ．．．なんだ聡一君か．．．」

「なんだって．．．」

「そっか、私たち地球に戻って来たのかー」

「ここが聡一君の家？」

「そうだよ。」

「結構、広いんだね。」

「今日から、よろしく。」

「ううん．．．」

「あ、聡一君、学校行かなくていいの？」

「ああ、もう行かないよ。」

「えっ？」

「地球より、あっちの世界のほうが住み心地よさそうだからさ。将来は、あっちの世界に住もうと思う。」

「だからって学校、行かないのは．．．」

「いいんだよ。」

「そうしとけば、いつ呼ばれても、むこうの世界にいけるからな。」

「そう・・・ずっと一緒だからといって、私に変なことしたら許さないからね。」

「しねーよ、バカ」

「それ、私じゃ嫌だっけこと？」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「えへへ、やっぱり聡一君はおもしろい人だったね。」

柚月は満面の笑みを浮かべる。

それを見ていると聡一も自然と笑顔になっていく。

初めて会ったころの柚月は笑顔を見せることもなく

ただの暗くて無口で地味な女の子だったはずだ。

でも、今は違う。

雰囲気も明るくなって、たくさん喋るようになった。

笑顔になる回数も増えていた。

なんのおかげで、そうなったのかはわからないが

確実に魔法の世界に行ったことが関係しているだろう。

聡一は「魔法」には、すばらしい「力」があるということを確信した。

act20 「魔法」の「力」(後書き)

これで第一章は終わりです。

まだ続きますので、これからもよろしくお願いします。

次は登場人物紹介を書きたいと思います。

登場人物紹介・魔法説明（前書き）

第一章、終了時点での登場人物について書きたいと思います。

読んでいただければ本編がよりわかりやすくなると思います。
本編に直接、関係しないので飛ばしても大丈夫です。

登場人物紹介・魔法説明

登場人物紹介

もりしま そうついち
森嶋聡一

この作品の主人公です。

魔法の世界につれて行かれ、「合成魔法」を習得し、さらに袖月と氷璃とともに特訓をしたおかげで「魔法を吸収」することもできるようになる。

年齢は十五歳で普通の中学三年生。

誰からも好かれる性格をしている。

たかなじ ゆづき
高梨袖月

重力を操る魔法を使う中学三年生の女の子。

暗い性格をしていたが氷璃や魔法に出会ったおかげで、明るい性格に変わっていく。

頭が柔らかく、魔法の応用能力がとても高い。

聡一にだけ時折、女の子らしい一面を見せることもある。
料理が結構、得意だったりする。

ゆづき みはね
幽崎美羽

風を操る魔法を使う。

聡一と袖月を魔法の世界につれてきた張本人でもあり、聡一と袖月がどんな魔法を使えるのかも教えている。

とても明るく、思ったことは、はっきり言う。

とても器用で空気の動きから相手の動きを読み取るなどということもする。

ひよつり
氷璃

氷を操る魔法を使う。

美羽の姉で聡一と袖月に魔法の使い方を教えた。とても、すごい魔法使いで、ほとんど敵無しの強さを持っているらしい。

普段は優しいお姉さんの存在だが起こると、とても怖い。

せんたい かずひこ
仙台和彦

聡一や袖月と同じように地球から来た魔法使い。

植物を操る魔法を使うのだが、派手な使い方をしないため

本当に魔法を使ったかどうかの確認ができない。

喧嘩がとても強いらしく、主な攻撃方法は殴るなどというものだ。

単語について

ここからは、この作品でよく出てくる単語について説明を書いています。

ごうせいまほう
合成魔法

二つの魔法を合わせて新しいひとつの魔法を作り出す魔法。

聡一は、もうすでに五つの魔法を合成することに成功している。

きゅうしゅう
吸収

相手の魔法を体内に取り込み、消しさること。

大抵の魔法は一瞬で吸収できるが例外もある。

まじよく
魔力

魔法を使うためのエネルギーのこと。

一人の人が持っている魔力は無限だが、一度にたくさん魔力を使うほど

魔法のコントロールが難しくなる。

登場人物紹介・魔法説明（後書き）

これを書いてて気づいたのですが

登場人物、五人しかいないんですね（笑）

では、第二章もよろしくお願いします。

act 1 電話とニュース

「もしもし、氷璃さん？」

そつちの世界の生活もいいですが、地球のほづがなんか安心するっていうか・・・

やっぱり、慣れてるからでしょうかね？」

「私も地球に住んでみたいわね。」

「柚月・・・朝から誰と話してるんだよ・・・」

魔法の世界から地球に戻って来た日の翌日、まだ朝早いのに柚月の声で起きてしまった。

「あ、聡一君も起きてきたみたい。

出しますか？」

「お願い。」

柚月の手には透明で細長い水晶が握られている。

「なんだよ、それ。」

「電話だよ。相手は氷璃さん。

ほら、出て。」

柚月から、その水晶がわたされる。

耳に当ててみると本当に電話みたいだ。

「もしもし、聡一君？」

柚月ちゃんとの共同生活は楽しい？」

「なに言ってるんですか！

そつちの言い方はやめてください！」

「それで、どうなの？」

柚月ちゃんみたいなの、かわいい子と一つ屋根の下にいる気分は。」

「それは・・・嬉しいですけど・・・」

「やっぱり、そつちよねー そのまま結婚しちゃえば？」

「・・・切りますよ。」

「あーごめん、ごめん 真面目な話し、あるんだって！」

「なんですか？」

「それがね、地球にも結構、魔法使いがいるのよ」

「それが、どうかしたんですか？」

「・・・危険な人もいるみたいだから気をつけてね。

魔法使いだっていうことは、なるべく隠してね。」

「わかってますよ。」

「じゃあ、それだけだから。」

「じゃあね。」

電話が切れる。

電話の切れ方まで地球の電話にそっくりで少し驚いた。

「氷璃さん、なんて？」

「地球にも魔法使いがいるって。」

その中には危険な人もいるみたいだから気をつけてって。」

「へー、どんな人がいるのかな？」

「さあ、あと魔法使いだっていうこと、なるべく隠すようにだって。」

「

わかってるよー」

「そういえば、この電話、いつ貰ったの？」

「美羽さんの家から出るときだよ。」

聡一君は、ちょうどトイレに行ってたかな。」

「ああ、あのときか。」

「うん。今日は、なにか予定あるの？」

「うーん・・・特にないな・・・」

「じゃあ、家でゆっくりしてようか。」

「そうだな」

聡一と袖月は、なにかするわけでもなく
適当にテレビでも見ながら時間をつぶす。

「学校ないと暇だねー」

「そうだな、こんなに暇になるとはなー」

またボーっとしている。

テレビではニュース番組をやっている。

コンビニで強盗があった、殺人が起きたなど、いつもとなら変わらないニュースをやっている。

「次のニュースです。」

また新たな被害者が出ました。」

なにやら深刻な事件のようだ。

その事件の内容は連続殺傷事件だ。

被害者の人数はすでに九人にもものぼっているという。

犯行の方法は人気の無い道を歩いていた被害者が刃物で切りつけられるという感じだ。

凶器は見つかっておらず、被害者は全員、刺された時の記憶がないという。

「なんか、変な事件だな。」

結構、近いところで起きてるみたいだし。」

「ええ！聡一君、この事件のこと知らなかったの？

学校でも注意するようになって言ってたじゃん。」

「そうだったけ？」

どうやら、むこうの世界と地球の時間経過は同じらしくむこうの世界にいた日付のぶんだけ時間が経っている。

つまり、この事件は一週間以上前から起きているというわけだ。

a c t 1 電話とニュース（後書き）

第二章、始まりました。

タイトルが仮のもののため

変わるかもしれません

act 2 黒い球体の魔法

「ねえ、なんかしようよー
すごい暇なだけどー」

「そう言っても、なにもすることないじゃん。」

「確かにそうだけどさー」

「・・・」

「そうだ！魔法の特訓しない？」

氷璃さんがまだ戦争あるって言ってたし、

それまでに新しい魔法の使い方、見つけたいの。」

「別にいいけど・・・ずいぶん熱心だな。」

「だって、私がこんなに人と・・・」

それも男の人と話せるほど自身がついたの、氷璃さんのおかげなん
だもん。

だから、今度は私が氷璃さんの力になれないかなーって。」

これが柚月の本心。

前までの暗い自分が本当に嫌だったんだ・・・

だから、魔法に関しては真剣に考え、新しいものを見つけようとして
いるんだ・・・

「聡一君、どうしたの？」

「え？ちよつとね・・・」

「じゃあ、特訓始めよう。」

「ちよつと待って、その前に魔法を吸収しないと・・・」

「そうだったね。準備、いい？」

「うん」

柚月が魔法を発動させ、聡一にかかる重力が大きくなる。

その魔力を全て吸収しつくす。

「もついい？」

「うん。ありがとう。」

「じゃあ、私の考えた新しい形やってみてもいい？」

「いいけど・・・家を壊さないように加減してよ。」

「わかってるよー」

柚月の目つきが変わる。

完全に集中している証拠だ。

そして、空中に黒い小さな球体が出来始める。

その球体はグオオオンと不気味な音を出しながら、

中心に向かって回りの黒いものが吸い込まれていくような感じだ。

球体は大きさを変えずに、ずっと回転しながら、

空中の一点で止まったままだ。

「聡一君・・・それ・・・吸収して・・・」

柚月は、つらそうな声で言う。

「え？わ・・・わかったよ。」

あまり、意味がわからないまま黒い球体を吸収するために手を伸ばす。

ズズズズズズ・・・

黒い球体に触れた瞬間、体中に激痛が走る。

「うっ・・・な、なんだよ・・・」

まったく吸収することができない。

だが、少しずつだけ黒い球体が小さくなっていつてるような気がする。

「くそ・・・」

聡一は激痛に耐えながら黒い球体の吸収を試みる。

一体、どれだけの時間、激痛に耐え続けたのだろう。

この黒い球体を作り出した柚月は、気絶してしまっている。

前に氷璃から聞いた話によると魔法を発動させた

魔法使いが気絶・死亡した場合は魔法が消えるはずだ。

それなのに、この黒い球体は、まだ存在しつづけている。
黒い球体の大きさは最初の半分くらいになった。

「もうひと踏ん張りだ！」

右手に全神経を集中させ、一気に黒い球体を吸収しようとする。
黒い球体と右手の間から激しい光が発生し、目を閉じてしまう。

もう一度、目を開けると黒い球体は無くなり、体中の激痛も、もうない。

「や、やったのか・・・」

どうやら、黒い球体の吸収に成功したらしい。

「ハ、ハハハ・・・やっと・・・終わった・・・」

一体、なぜこの球体は袖月が気絶したのに消えなかったのだろう。

「そっだ！袖月！」

床に倒れている袖月に近づく。

「大丈夫か、袖月」

右肩を軽く叩きながら声を大きめにして話しかける。

「ううう・・・」

どうやら死んではないらしい。

「よかった・・・」

聡一は袖月を抱きかかえ、袖月がいつも寝ている部屋に行き、
袖月を布団に寝かせる。

一人でリビングに戻り、もう一度黒い球体のことについて考えてみる。

・ 袖月が発動させた魔法

・ 発動させた袖月が気絶しても黒い球体は消えなかった

・ 吸収するのに、かなり時間がかかった

「わかっているのは、このくらいか・・・」

やっぱり、袖月に聞かないとダメかな・・・」

時計に目を向けると、午後三時・・・

黒い球体の吸収を始めてから一時間ほど経過している。

「はー、一人で、なにすればいいんだよ・・・」

袖月が起きてくるまで、どれだけかかるかわからない。

さらに、なにもやりたいことがない・・・

つまり、袖月が起きてくるまで暇な時間を過ごさなくてはいけないということだ。

そうだ、寝よう

自分でも、驚くほどいい考えた。

むこうの世界ではお祭りがあつたから全然、眠れなかった。

よく考えてみれば寝不足だ。

さっき、黒い球体を吸収したせいで、さらに疲れた。

聡一は自分の部屋に向かい、ベッドに潜り込む。

ベッドに入って三秒・・・いや一秒で眠りについただろう。

こんなにも心地のよい睡眠は初めてだった。

a c t 3 黒い球体の正体（前書き）

この話から少し書き方が変わります。
内容は、そのままなので続けて読んでも大丈夫です。

act3 黒い球体の正体

聡一が目を覚ましたのは午後七時だ。
つまり四時間、寝ていたことになる。

体が恐ろしいほど軽く、頭もスッキリしている。

「そつだ袖月……」

四時間も経っているのだから袖月も起きているはずだ。
そう思いリビングに向かう。

リビングには誰もいない。

テーブルの上には小さな紙が一枚、置いてある。

袖月の起き手紙のようだ。

「買い物に行つてきます」

とだけ書いてある。

「また待たなきゃいけないのか……」

溜め息をつこうとしたとき、玄関のドアが開く音がする。

玄関に行つてみると、ちょうど袖月が帰つて来たところだった。

「おかえり」

「ただいま」

今から夜ごはん作るから待つてね。」

袖月の両手には大きな買い物袋が持たれている。

白い袋だったため中の様子はよくわからない。

袖月はすぐにキッチンへ行き、夕食を作り始める。

「さつき使った魔法、どうなのなの？」

野菜を切っている袖月に後ろから話しかける。

「一点にかかる重力を少し変えてみたの」

「……そういえば、なんで急に「吸収して」なんて言ったの？」

「あれは……私の力じゃ、あの黒い球体を制御しきれないって思ったから……」

「じゃあ袖月が制御できなくなつて、黒い球体自体が自分の意思で動いていたから」

袖月が気絶したのに消えなかつたってこと？」

「わかんない……だから後で氷璃さんに電話してみようと思つんだけど……」

「その方法があつたか……全然思いつかなかつたよ。魔法といえば氷璃さんだもんな。」

「うん！」

袖月は笑顔になり料理を続けている。

「それで黒い球体ができるときは、どんなふうに重力をかけたの？」
「球体の中心に対して、全部の方向から重力がかかるようにしえたの。」

だから中心にはものすごい量の重力がかかつて、あんなふうになつちやつたの。」

「じゃあ、あの黒い球体は重力の塊つてこと!？」

「多分そう。」

でも、制御できなくなるなんて思わなかつたの……

小さいうちは制御できてただけ……」

「そう……じゃあ、次は制御できるように特訓しなくちゃね」

「うん！聡一君も手伝ってくれる？」

「当然だろ」

「ありがと。もうすぐ完成するから、ちょっと待っててね。」

袖月は鍋で、さっきまで切っていた野菜を煮込んでいる。

「はい。」

袖月がテーブルに並べた料理は、

むこうの世界で食べた植物が色々入っているスープによく似ている。そして、その横にはパン。

むこうの世界とほとんど変わらない食事だ。

「ねえ、早く食べてみてよ！」

「うん。いただきます。」

スープを一口、飲んでみる。

普通に美味しかった。

そして、久しぶりの地球の食べ物に少し感動する。

「どう？」

「おいしいよ」

本当においしい。

甘くて、しょっぱいような……

なにか不思議な感じだ。

「これ、氷璃さんに教えてもらったのを野菜に変えて作ってみたんだ」

「へー、すごいじゃん。本当においしいよ」

「ありがとう！」

柚月はまた笑顔になる。

この笑顔にはすごく癒される。

もしかしたら柚月に不思議な感情を抱いているからなのかもしれない。

夕食を食べ終え、柚月の持っている水晶で氷璃に電話をする。

「もしもし、氷璃さん？」

「ああ、柚月ちゃんね。」

「ちょっと魔法のことで聞きたいことがあるんですけど……」

「いいわよ。なんでも聞いてちょうだい。」

「今日、私が発動させた魔法が私が気絶しても消えなかったんですよね……」

「へー、珍しいじゃない」

「え？ありえないことじゃないんですか？」

「まあ、ほとんどありえないけど、なるときはなるわよ。」

「どついつとときに、なるんですか？」

「魔法が暴走したときかな。」

そうなったら魔法自体を消し去らないといけないから大変なんだけど、そつちには聡一君もいるから、大丈夫でしょ？」

「なんでわかるんですか……」

「だって魔法が暴走したら、ただじゃ済まないもの。」

今、電話できてるってことはそれを消し去ったとしか考えられないから

聡一君が吸収したのかなーって。」

「本当に氷璃さんは、すごいですね！」

私も氷璃さんくらい、すごい魔法使いになりたいです！」

「柚月ちゃんなら、なれるわ。」

すごい魔法使いつて皆、一度は魔法を暴走させるから。」

「じゃあ……氷璃さんも……」

「うん。一度、暴走させたわ。」

でも、何回もその魔法を使い続けて

今は、その魔法も制御できるようになっただけだね。

柚月ちゃんも、制御できるようにならばって見たら？」

「そのつもりです。」

聡一君もいるから安全ですしね。」

柚月と氷璃の笑い声は聡一にも聞こえるほどだ。

「ありがとうございます。」

「じゃあ、切りますね。」

「うん。じゃあね。」

柚月は電話を切り、水晶をポケットの中に入れる。

「氷璃さん、なんて言ってた？」

「制御できるように、がんばってみたら、だって。」

そついうわけで明日から協力よろしくー！」

「おうー！」

正直、もう一度あの球体を吸収できるか心配だった。

しかし袖月は、こんなにかんばろうとしているんだ……

そのためなら少しくらい危険でも協力しようと思う。

「ねえ、お風呂入りたいたいんだけど……」

「え？」

この一言は聡一を深く悩ませることになる。

act 4 お風呂

むこうの世界から直接、ここに来たのだから袖月の着替えがない。さらに女の子が同じ家の中でお風呂に……

……なるべく考えないようにしよう。

「ダメ？」

「いや……いいんだけど……」

着替えが……」

「聡一君の貸してよ。」

それで明日、買いに行こうよ。」

待て待て待て、今回ばかりはその笑顔に惑わされるわけにいかない。このままでは本当にヤバい。

漫画やアニメの世界なら、ありえても……

女の子に服を貸す？それも、こんなかわいい子に？

絶対に無理な話だ。

いや……貸すのはいいんだけど、そのあとが……

「ねー、なに顔赤くしてんのー」

そんなに私に服を貸すのが嫌なのー」

袖月が少しずつ近づいてくる。

それにあわせて聡一は後退していく。

「逃げてダメだよー」

汗かいたまま、寝るのなんて嫌だからねー」

ガタン……

聡一は袖月から離れるのに後ろへ下がっていくと父と母の服が入っているタンスに背中をぶつける。

聡一の父と母は、すでに死んでおり、もうこの世にいない。そのとき、ふと思いつく。

「母さんの服でもいい？」

この考えがあつた！

これなら袖月も俺の服を着なくて済むし、
なにより、俺が普通の状態を保てる。

「え？いいの？」

「そういえば……お父さんとお母さんは？」

「死んだよ……」

「ゴメン……でも、いいの？」

「うん。袖月も俺の着るよりはマシだろ？」

「うん……」

「じゃあ、適当に取ってって。」

「サイズは……合わないと思うけど」

「聡一がタンスを開け、袖月に服を見せる。」

「袖月は適当に服を取ると広げて体に合わせる。」

「やっぱり大きいよな……」

「母さん、身長高くてさー」

「聡一の母の身長は百七十七センチほどあった。」

「それに対して袖月は百五十センチほど。かなり大きい。」

「なんか、ごめん……」

「このサイズしかないんだよ……」

「ううん、ありがと。じゃあ、入ってくるから。」

「……のぞかないでね」

「のぞかないでねって……」

「そんなつもりは無い。」

「でも……」

「深く考えないことにしよう。」

「このままでは本当に大変なことになってしまいそうだ。」

「俺は、そんなことしねーよ」

「そう言っただけ誤魔化すもの……」

「説得力が全然無い。」

「この言葉を聞いた袖月は笑顔のまま風呂場へ向かう。」

サアアアア……

……一人しかいないため、柚月が風呂に入っている音が丸聞こえだ。自分でも顔が赤くなっていることがわかる。

こんなことが毎日続くのかと思うと嬉しいようになつらいような……なんだか、よくわからないが、とにかくのぞくことは絶対にしない。神に誓う。

そんなことをして柚月に嫌われでもしたら……冗談じゃない！
そんなことは絶対に嫌だ。

そして一緒に暮らすのが気まずくなってしまう。

聡一の頭の中を色々なことがグルグル回る。

ガチャ……

風呂場のドアが開く音がする。

思ったより入浴時間が短かったので時計をしてみる。

柚月が風呂に入ってから四十五分が経っている。

どうやら色々、考えているうちに時間が過ぎていたようだ。

「ああー、気持ちよかったー」

聡一君も入らないの？」

顔をほんのり赤くさせ、バスタオルで髪の毛を拭きながら、柚月がリビングに来る。

顔を直接見ることができない。

なぜか鼓動がありえないほど早くなっている。

「聡一君？どうしたの？」

「な、なんでもないよ」

じゃあ、俺も入ってこようかな……」

声が少し震えている。

さらに立ち上がって歩き始めるが動きが少し変だ。

自分でも、わかるほどに。

「本当に大丈夫？」

顔、真つ赤だし……」

お前のせいだよ！

大声で叫べたら、どんなにスッキリするだろう。

でも、そんなことする勇氣などないに決まっている。

無言のまま風呂場に向かい服を脱ぐ。

「ああ、本当にヤバかった……」

浴槽につかりながら一安心。

「聡一君ー、背中流そうかー」

ドアの外には人影が……

この声は間違いなく柚月の声だ。

「な、なに、言っただよ……」

思わず立ち上がってしまった、お湯が流れる音が聞こえる。

本当は、ぜひともお願いしたかった。

でも……な。

わかってくれる人はいるのだろうか……

今まで、こういう状況になることをどれほど願ったか……

「えへへ、冗談だよー」

そうだよな。そうじゃないとおかしいもんな。

このあとは何もなく、いつもどおり入浴を済ませる。

act 5 和彦の訪問

「やっと来ましたかー」

「一人で暇だったんだよねー」

「どうせ二人になっても、することがないじゃん」

「それが、あるんですよー」

「なにすんの？」

「私の質問に答えてもらいまーす！」

柚月のテンションがいつもより高い気がする。

「別にいいけど……簡単なのでお願いね。」

「わかってるよー」

「じゃあ、一つ目。ズバリ、彼女は？」

「なんだよ、その質問……」

「いないけど……」

「おお！じゃあ、好きな女性のタイプは？」

母親の服を着てる人と恋愛に関する話をするとか……

「普通ありえるのかな、こんな状況……」

「明るくて優しい人。」

「うーん……難しいな……」

「なんのこと？」

「え？こつちの話。」

「他は？」

「もう、ないよー」

「次は聡一君から質問して。」

「……じゃあ彼氏は？」

「いないよ」

「好きな男性のタイプは？」

「優しくて強い人。」

「って私と同じ質問じゃん！」

「別にいいじゃん……」

「……まあ、いいや

もう遅いし、寝ようか。」

「そうだな」

「明日、服買いに行くの付き合ってね。」

「うん。」

今、来ている服は半袖のはずなのだが……やっぱり袖が長い。でも、なんかかわいい……

「じゃあ、おやすみー」

大きい服を着たまま袖月は部屋に向かう。

聡一も自分の部屋にむかい、ベッドに寝転がる。

特に疲れているわけではなかったが、すぐに眠る事ができた。

「聡一君、早く起きてー!」

袖月に起こされ、目を覚ます。

目の前には昨日と同じ服装の袖月が立っている。

「おはようー!」

「おはよ……」

朝から、なぜこんなに元気なんだろう……

「朝ごはん、できてるから食べよ。」

「あ、ありがとう……」

まだ眠い。でも二度寝するわけにもいかないので無理矢理、体を持ち上げる。

リビングのテーブルに置かれたご飯からは湯気がたっている。

「ほら、早く早く」

椅子に座る。

「いただきますーす」

「いただきます……」

柚月は笑顔のまま、ご飯を口に運ぶ。
聡一も少しずつご飯を口に運ぶ。

「うちそうさま」

「うちそうさま」

朝食を食べ終えるころには聡一も、すっかり目が覚めていた。

柚月は食器を片づけ始める。

「今日、一緒に買い物行くんだから準備しておいてね」

「おう……」

そういえば今日は柚月の服を買いに行くんだ……

どうしよう、楽しみすぎるぞ……

聡一は自分の部屋に向かい、自分が持てる全てのファッションセンスを使い、服を選ぶ。

服を選ぶだけで、こんなにも悩んだのは初めてだ。

悩んだ末に選んだ、服に着替えリビングに向かう。

柚月がいない。

部屋のドアが閉まっていたため、柚月も着替えをしているのだと思う。

柚月の部屋のドアを開き、昨日と同じ服を着ている。

「あれ？その服……」

「ああ、昨日の夜、洗濯したんだ」

ちよつど乾いたから、よかつたんだ。」

「じゃあ、もう行くの？」

「うん」

ピンポン

ちよつど家から出ようとしたところに家のチャイムが鳴る。

玄関に行き、誰が来たのかを確認する。

そこに立っているのは和彦だった。

「俺の家、なんで知ってるんですか？」

「あ？美羽から聞いたんだよ」

美羽は聡一と柚月をこの家まで送り届けたのだから家の場所を知っていてもおかしくない。

「美羽さんですか？」

もしかして和彦さんも電話を貰ったんですか？」

「ああ、これのことか？」

和彦はポケットから水晶を取り出す。

柚月の持っているものと同じものだ。

「そういえば、和彦さんが来たのって、なにか用があったからじゃないんですか？」

「お？柚月…… 本当に柚月かよ！？」

「そうですよ」

柚月は笑顔で答える。

「へー、お前笑ったすげー、かわいいんだな。」

まあ、俺はロリコンじゃねーから、関係ないんだけど。

それで、俺がここに来た理由だが……

連続殺傷事件のことは知ってるか？」

「知ってます。」

「あの事件、どうやら魔法使いが狙われてるらしいんだ。」

「え？」

「被害者も自分が魔法使いだって知られたくないから記憶が無いと言ってるそうだ。」

「それ、本当ですか？」

「多分、な。」

だからお前らも気をつけろよ。

俺はもう仕事あるから帰るけどよ、うまくやっていけよ。」

「はい。ありがとうございます。」

和彦は立ち上がり、家から出ていく。

act 6 デート？（出発）

「魔法使いが狙われてるって、どういことなんだろう……」
「わかんないけど……」

「私たちは狙われる心配ないよね？ なにもしてないもん。」

「そうだよな。じゃあ、行くか。」

玄関に鍵をかけ、柚月の服を買いに行こうとする。

「あ、そうだ！」

「どうした？」

柚月の声が少し大きかったため驚く。

「私……死んだことになってるんだ……」

「そういえばそうだ。」

魔法の世界に行くときに行方不明などと騒がれたら面倒なため
どうせなら死んだ方がいいということで「自殺をした」ように見せ
たんだった……

「そういえば俺のこと全然、騒がれてないな。」

「確かにね。」

「まあ、いいか。」

「その方が楽だしな。それで、どうするの？」

「何が？」

「柚月は死んだことになってるんだろ？」

「じゃあ、見つかったら……」

「そうだね。」

「……変装するとか？」

「……本当にそれで大丈夫？」

「たぶんね。ほら鍵、開けて」

「お、おう」

言われたとおり鍵を開け、もう一度家の中に入る。

「なんか使えそうなものない？」

「うーん……サングラスとか？」

「そういうのもいいよ。」

母さんと父さんのものが入っているタンスを開け、使えそうなものを探す。

思ったより使えそうなものがたくさんある。

サングラスや伊達メガネ、大きめの帽子など色々なものがある。

「これ、かけて」

袖月から伊達メガネをわたされる。

言われたとおり、かけてみる。

袖月は聡一の顔をジツと見つめ、なにかを確認している。

「よし、大丈夫そう。」

次は私を探さなくちゃ……」

少しタンスの中を見た後、サングラスと大きめの丸い帽子を取り出す。

「本当はこういう格好したくないんだけど……」

サングラスをかけ、帽子をかぶる。

「どう？」

「似合ってるよ……」

いつもの袖月とは、なにか違う。

いつもの袖月は「かわいい」感じた。

しかしサングラスと帽子の装飾があるだけで、かなり大人っぽく見える。

「そうじゃなくて……」

私だってわかる？」

「いや、わからないと思うよ……」

「じゃあ、これでオツケー」

今度こそ出発しようか」

「うん」

さっきと同じように玄関の鍵をかけ外に出る。

「思ったより時間かかったね」

「そうだな。和彦さんも来たし変装もしくちゃいけなくなったし

……」
「だよー」

やっぱり死んだことにしない方がよかったのかな……」

「……」
なにも言うことができなかった。

どんな声をかければいいのか……それさえも。

袖月は悲しそうな表情だ。

サングラス越しに見える目も少し潤んでいるような気がする。

「はー」

後悔しても無駄だよー……

あのときはさ、もう死んでもいいと思ってたから簡単に自殺したけど……

やっぱり生きていければいいことがあるんだねー」

初めて会ったころの袖月はそこまで思っていたのか……

なんだか辛くなってくる。

「あ、ごめんね……」

もうこんな話はやめて、もっと明るい話しようか。

せっかくのデートだもんねー」

デート……

この言葉は、彼女いない歴イコール年齢の人にとってもものすごい気になる言葉だ。

「デートなどしたことない」だからこそ感動的に聞こえてしまう。

たとえ袖月が冗談で言っただとしてもかまわない。

少しでも、そう思ってくれているのなら。

「なんか聡一君、元気ないねー」

「え？そんなことないよ

せっかく袖月とのデートなんだから……」

またやってしまった。

本当に言葉は選ぶべきだ。

言った後に後悔しても遅い。恥ずかしくてたまらなくなる。

「え？聡一君もそう思ってくれてるの？
なんか嬉しいな。」

今の柚月は変装しているため、いつも見た目がまったく違う。

つまり変装していな状態の性格が今の柚月が言つと、なんか不自然だ。

見た目と正確が全然、一致しない。

「なんで聡一君、黙っちゃうの？」

「いや……緊張してるっていうか……」

「なんで？」

でも、なんか嬉しいな。」

そう言つと柚月は笑顔になり歩く速さが変わる。

「おい……ちよつと早いつて……」

「聡一君が遅いんだよー」

そんな調子のまま駅に着く。

ここからは電車に乗つて移動するらしい。

聡一は、まだ行き先を知らない。

柚月が切符を買い、その電車に乗る。

act7 デート？（袖月のファッション）

「そういえば袖月、金持ってきてんの？」

「あ……そういえば持ってない……」

「わかった。じゃあ俺の使っていいよ」

「……そんなことできないよ」

「いいじゃん、一緒に住んでるんだから」

「……でも」

「いって。もうここまで来ちゃったんだし」

「……うん」

小さくうなづく袖月。

聡一が袖月に服を買ってあげるほどお金があるのには理由がある。

聡一の母は、ただ聡一の父のことを愛していたから結婚した。

お互いに愛していた……理由は、それだけだった。

だから聡一の母は一切、贅沢をしないで聡一の父が働いている時間だけ自分も働いていた。

そして聡一の父が帰ってくるころには、ご飯を準備して待っている。これがいつもの日常だった。

聡一の両親にとって、この生活はとても幸せなものだったようだ。

聡一の母は働いているのに贅沢をしない……

つまり貯金がいつの間にか、とんでもない金額になっていた。

父と母が死んだ時、息子は聡一のみだったため全ての遺産を相続した。

電車の中は、あまり混んでいない。

平日の昼間なのだからあたりまえだ。

時間どおりに目的の駅につき、電車から降りて袖月の行きたがっている店に向かう。

「ここだよ」

袖月が立ち止ったところにあつた店は、とても大きい店だ。店の外装から男が入るような店ではないことがよくわかる。

「俺も入らないとダメなんだよな……」

「うん。あたりまえでしょ、デートなんだし」

「わかつたよ……」

袖月についていき、店の中に入る。

外装からもわかるように、とても広く綺麗な店だ。

しかし、本当にこんなところに男が足を踏み入れていいのだろうか？

いくらデートとはいえ、本当に付き合ってるわけではないのだから

……

「なにやってんの？

早く行こうよ！」

袖月は聡一の手を握り、エレベーターの前まで歩いていく。

迷わずに歩いているため、初来店というわけではないようだ。

「何階に行くの？」

「三階だよー まずは服を買わないとねー」

この元気な袖月が一番好きだ。

電車の中で、お金の話をしていたときのような表情はしてほしくない。

三階につき、エレベーターの扉が開く。

エレベーターから降りると、まわりは女の子むけの服でいっぱいだ。

「なに顔赤くしてんの？」

服選ぶの聡一君にも手伝ってもらうんだからね？」

「え？」

「え？ じゃないよ。

ほら、行こう」

袖月はまた聡一の手を握り歩き始める。

「ねえ、これどう？」

袖月は服を体に合わせるような感じで持っている。
なんというか……すごく袖月にピッタリ会う服だ。
サイズもちょうどいい。

「試着してみたら？」

「そっだね」

近くにあった試着室に入り着替え始める。

「どっ？」

やっぱり似合っている。

身長は低いもののスタイルは、とてもよいためどんな服でも似合う気がする。

「似合ってるよ」

「本当に？　じゃあ、これ買ってもいい？」

「いいよ」

「ありがとう」

袖月はもう一度試着室のカーテンを閉め、元の服に着替える。

「これだけでいいの？」

「え……まだ買ってもいいの？」

「いいよ」

買い物かごの中には今、試着した服とスカートが一枚入っているだけだった。

「でも……なんかわるいよ……」

「いいって。袖月は、もう俺の家はずっといなきゃいけないだろ？」

「そっただけど……」

「ほら、行くぞ」

今度は聡一が袖月の手を握り歩き始める。

「袖月、なんか気にいったの無いか？」

「……本当にいいの？」

「おう」

「じゃあ……あれ……」

「あれって……本当にあれでいいのか？」

「うん……」

聡一は驚きを隠せない。

袖月が指差した先にあった服は、いわゆるゴスロリだったからだ。その服に近づく。

そして、買い物かごに入れる。

「……」

「これ、一回でいいから着たかったんだよねー」

レジで会計を済ませ、次を買いたいものがある階へと向かう。

結局ゴスロリを着しているのを見るのはできなかった。

「あとでのお楽しみ」だそうだ。

もう一度、エレベーターに乗り二階に向かう。

act 8 デート？（次の目的地）

二階は下着売り場。

今度は本気で気まずい。

「この階も一緒に回らないとダメ？」

「当たり前でしょ」

袖月はかわいいい……いや恐ろしい笑顔を浮かべ聡一の腕をひっぱり歩きだす。

まわりは女性用の下着で囲まれている。

嬉しいやら恥ずかしいやら……色々な思いが頭の中でまわり続ける。袖月は聡一のことを考えて少し急ぎ目に下着を選ぶ。

しかし、その買ったものの会計をするのは聡一なのであまり意味がない。

横に袖月がいるのが救いだった。

もし一人だったら……

考えたくもない。

会計を済ませたあと、すぐに店から出る。

「ああ、緊張したー」

「なんで？私がいるんだから大丈夫でしょ？」

「でも……こんな店に入ったの、初めてだから……」

「なんか、ごめんね……」

「いいよ。腹減ったし、なんか食べるか」

店の入り口にある時計を見ると午後二時となっている。

知らない間に、昼を過ぎてしまっていたようだ。

「あそこでいいんじゃない？」

袖月が言った場所は、すぐ近くにあるファミリーレストランだ。

「そうだな」

二人は、そのファミリーレストランに向かう。

昼を過ぎているからか、店内には客があまりいなかった。

二人は適当な料理を注文する。

「このあと、なにする？」

「せっかくのデートなんだから、もう少し楽しみたいよねー」

「柚月はなにかやりたいことある？」

「うーん……ゲームセンターは？」

「ゲーセンでいいの？」

「うん。私、行ったことないから……」

「うそ？友達と行ったたりしなかったの？」

「私……友達いなかったし、学校から帰ってきたらずっと部屋にいたから……」

「……ごめん」

明るい柚月を見ていると昔は暗かったということを忘れてしまう。

「いいよ。今は聡一君がいるから昔のことなんてどうでもいいの。」

「なんか照れるな……」

「本当にありがとうね、聡一君」

やっぱり笑顔の柚月が一番いい。

何度同じことを思ったのだろう……

こう思った回数だけ柚月は笑顔ではなくなっているということだ。

これからは二度と思わなくていいようにがんばっていき……

「あ、料理できたみたいだよ」

二人とも同じものを注文していたため、同時にできあがる。

「いただきます」

こんなところでも食事をする前に「いただきます」というほど柚月は礼儀が正しい。

正直、尊敬してしまう。

「いただきます」

それを見習い聡一も言い、料理を食べ始める。

いつも思うのだがファミリーストランの料理は、なぜこんなに美

味しいのだろう。

注文してから出てくるまでの時間も、とても短い。

さらに値段も安めだ。

忙しい時でも気軽に立ち寄れるし、とても便利だと思う。

料理を食べ終えた二人は会計を済ませ、店から出る。

「そつえばゲーセン行きたいんだっけ？」

「うん！」

ユーフォーキャッチャーがやってみたいんだよねー」

どうやら柚月は本当にゲームセンターに行ったことがないらしい。

女子だからかはわからないが、普通一回くらいは行ったことがあるもんだよね……

「それで、このあたりにゲーセンあんの？」

「……わかんない」

「……じゃあ俺の家の近くにあるところでもいいか？」

「うん」

「よし、じゃあ駅まで戻るぞ」

ゲームセンターに行くため駅まで戻りもう一度、電車に乗る。

降りる駅は家の二つ手前の駅だ。

この駅の前は商店街のようになっている。

その中に一軒だけゲームセンターがあり、聡一もときどき友達などと来ることがある。

act 9 デート？（ゲームセンター）

「結構、大きいんだねー」

「うん。それに人気もあるんだよね。」

「この町で遊べるところって少ないでしょ？」

「確かにね」

聡一たちの住む町は田舎というわけではないが都会というわけでもない。

街中まで行けば結構大きなデパートなどもあるが少し街中から離れば、住宅街がある。そこには聡一の家もあり、学校も歩いて行ける距離の場所にある。

「中也広いんだねー」

「そりゃあ、いろんな種類のゲームがあるからな」

柚月の服を買った店に入った時と立場が真逆になっている。

「それでユーフォーキャッチャーがやりたいんだっけ？」

「うん。でも、あれ難しいんでしょ？」

「いや、そんなんでもないよ」

聡一はユーフォーキャッチャーが得意なので、いいところを見せるチャンスだと思った。

「なにこれー、全然取れないじゃん！」

案の定、柚月はユーフォーキャッチャーでは何も取れないようだ。

「俺が取ってやろうか？」

「……もう一回やらせて」

どうやら柚月は負けず嫌いでもあるようだ。

「やっぱりダメだ……」

「俺にやらせて」

少し強引にユーフォーキャッチャーの操作パネルの前に行く。

狙いはもちろん袖月が狙っていた小さな猫のぬいぐるみだ。失敗しないように慎重に操作をする。

見事に猫の足の部分に引っ掛かり、小さな猫のぬいぐるみを取るとに成功する。

「わー！聡一君すごいねー！」

「ほら」

聡一は猫のぬいぐるみを袖月に差し出す。

「え？」

「やるよ」

「いいの？」

「うん」

「ありがとう」

聡一から猫のぬいぐるみを受け取ると嬉しそうに抱きしめる。

「次は何する？」

「他におもしろいゲームないの？」

「たくさんあるよ。」

時間もあるし、色々まわってみる？」

「いいの？」

「うん。どうせ帰ってもすることないし」

「やったー ありがとう」

「じゃあ、あっち行ってみるか？」

「うん」

聡一が指差した方にあるゲームは対戦格闘ゲームやレースゲームなどの

一人でも遊べるゲームがあるコーナーだ。

「これ、やってみない？」

「私こついつのできないと思うよ……」

「いいから、やろう」

ゲーム機の中に百円玉を入れ、ゲームを開始する。

画面はキャラクターを選択するための画面になっている。

「どつするの？」

「うん」

指をさしながら操作説明をする。

「どつ？」

「そうそう。ほら、始まるぞ」

戦闘画面になる。

「え？これ、どつするの？」

「こうだよ」

柚月の手を動かしながら操作方法を説明する。

「え？わかんないって……」

「あとは柚月がやってみ」

「うわ……なにこれ？ユールズって……負けちゃったよ……」

「まあ、初めてだから仕方ないよな」

「じゃあ次は私のやりたいことでもいい？」

「いいよ」

「あれだよ。いい？」

柚月が指差した方向にあるのはプリクラがたくさん置かれているコ

ーナーだ。

「もしかして、あれもやったことないのか？」

「……うん」

柚月は恥ずかしそうに顔を赤らめている。

「わかった。行こうか」

聡一が歩きだし、その横を柚月が歩く。

「どれがいい？」

「うーん……これ！」

プリクラを撮るために色々な設定を決めていく。

「始まるよ」

「え？どつすんの？」

「なんでもいいよ」

「じゃあ、こう!」

そう言うと袖月は聡一の腕に静かに抱きつく。

「袖月?」

「私じゃ、嫌?」

「……」

なんだよ、それ。

そんなふうに使われたら断るわけにいかなくなる……
というか、こっちが嬉しいくらいなのだ。

袖月はこんなに笑顔なのに、なんで俺は緊張してるんだ?

まさか……袖月のことを……

……それだけはダメだ!

そんなことになってしまえば、これから一緒に暮らすのがな……
あまり考えないようにするが、自然と意識してしまう。

色々考えてる間に撮影が終わってしまったようだ。

「聡一君、顔赤いよ?」

大丈夫?」

「え?大丈夫……大丈夫……」

大丈夫なわけないよな……

まだ袖月は腕に抱きついていたままだ。

腕になにか柔らかいものがあたっている……

「完成したの取りに行こうか」

このプリクラは撮影が終わったあとに出てくる写真は
撮影する場所の外にある取りだし口から出てくる。

もう袖月は腕から離れている。

聡一は顔が真っ赤なまま取りだし口の前に行く。

「はい、聡一君」

出てきた写真をわけ、袖月が半分をわたしてくる。

聡一の腕に笑顔で抱きついている袖月と

少し顔の赤い聡一が写っている。

「また一緒に撮ろうね」

「うん……」

「そういえば、今何時？」

「え？って、もう七時半じゃん！」

「意外と長く遊んじゃったみたいだね」

「もう帰るか。ここからなら歩いて帰れるしな」

「そうだね。」

二人はゲームセンターから出て、歩いて家に向かう。

家までは歩いて十分ほどだ。

「今日は楽しかったねー」

「そうだな」

「ありがとね、聡一君」

「お、おう……」

「もしよかったら、また一緒に遊びに行こうね」

「そうだな」

カン！カン！

会話をしながら歩いていると、道路の横にある家と家の間から大きな音が聞こえてくる。

金属のようなものが擦れているような音だ。

「ねえ……なんの音？」

「……わかんない。見てみるか」

そう言っって音の聞こえる所に向かう聡一。

そこには……

act 9 デート？（帰り道の魔法使い）

金属音が聞こえた場所、そこにいたのは二人の人だ。

少し暗く、家と家の間なので街灯の明かりも届かないので顔がよく見えない。

そこにいる二人は、どちらも刀のようなものを持っている。

片方は普通の日本刀のような形のもの。

もう片方は、フェンシングで使われる剣のような形をしている。

その二人は持っている武器で攻撃しあっている。

どちらかの攻撃が当たるわけでもなく、勝負は互角といったところだ。

二人の動きはとても速く、聡一が見切れる速度ではない。

「ねえ、あの人たち何やってるの？」

袖月の声は、驚いているような動揺しているような感じだ。

「わかんない。でも絶対、魔法使いだよね？」

「多分。動きが普通じゃありえないほど速いもんね」

そのとき戦っている二人に動きがある。

細い剣を持っている方が日本刀を持っている方の隙をついて逃げ出す。

しかし「逃げる」というのが正しいのかはわからない。

正しくは「消えた」というような感じだ。

暗闇にスウー……と消えていったように見えた。

「また逃げられましたか……」

残りの一人は日本刀を近くに落ちていた鞘に入れる。

そして、聡一と袖月のいる方向へ歩いてくる。

「君たち、今の見てた？」

話しかけてきたのは女性だった。

眼鏡をかけていて頭のよさそうな感じのお姉さんの印象を受ける。

「はい」

聡一は、なぜか堂々としている。

「そのわりには驚いてないみたいね」

「あなたも魔法使いなんですか？」

「「も」っていうことは君も、そうなのかな？」

「はい」

「へー じゃあ気をつけた方がいいよ。

じゃあ、またどこかで会いましょうね」

女性は歩きだそうとする。

「待ってください！

俺が「魔法使い」だから気をつけなくちゃいけないんですか？」

「さあね。詳しいことは私も知らないから。

でも最近、起きている殺傷事件の被害者は全員魔法使いよ。」

「じゃあ犯人は、あなたと戦ってた人なんですか？」

「それもわからないわ。

でも、味方でないことは確かよ」

「そうですか……」

「じゃあ私は、まだやることがあるから」

その女性は、どこかへ行ってしまう。

「聡一君、今の人誰？」

「わかんない。でも魔法使いなのは確かみたい」

「そう……じゃあ、私たちも帰りましょうか」

「うん」

その場から離れ、聡一の家へ向かう。

「さっきの人たち、なんだっただらうね……」

「さあね。でも悪い人じゃなさそうだし、大丈夫じゃないかな？」

「でも、あの人たちが戦ってた場所、見た？」

塀とかに傷がたくさんついたりしてたんだよ？」

「そりゃあ、魔法使い同士の戦いだしな」

「武器を持ってたのに、魔法使いなの？」

「そうなんじゃないの？」

本人も「魔法使いだ」みたいなこと言ってたし」

聡一は、この話をするのが少し面倒くさかった。

正直、あの二人が誰でも関係ない。

自分たちに影響があるわけじゃないし、面倒なことには巻き込まれたくないからだ。

「もう風呂、入っちゃえよ」

「今日も私が先でいいの？」

「うん」

「わかったー じゃあお先にー」

柚月は風呂場に向かう。

一緒の家で女の子が風呂に入るのも、これで二度目。だいぶ慣れてきた。

そのおかげで、なんとなく楽な気がする。

「ふー 聡一君も、もう入っちゃえば？」

「そうだな」

次は聡一が風呂場に向かう。

いつもどおり浴槽に浸かっていると、ガラスの割れるような音がする。

一瞬、驚いたが気にせず入浴を済ませる。

風呂場から出るとリビングには柚月の姿がなかった。

「また部屋の中にいるのかな？」

そう思い、しばらく待ってみることにする。

十分経っても二十分経っても柚月は戻ってこない。

「寝てるのかな？」

さすがに心配になった聡一は柚月の部屋に行ってみることにした。

「柚月ー 入るぞー」

返事がない。仕方がないので、そのまま入る事にした。

部屋の中にも柚月の姿がなく、部屋の奥にあるカーテンが風で摩なびいていた。

そこに近づいてみると窓ガラスの破片は部屋の中に散らばっている。つまり外から割られたということだ。

「まさか……柚月……」

窓の外を見てみるが柚月の姿はない。

「誘拐……ってことか？」

くそ……風呂に入ってるときに気づけば……」

急いで玄関に向かい、外から割られた窓の様子を見に行く。

窓ガラスの割られ方は、「割られている」というよりは

「切られている」というような感じだ。

「でも、柚月は魔法を使えるからな……」

その点を考えると柚月が簡単に連れ去られるとは思えない。

しかし、窓ガラスは「切られて」いるのだから

今日会った魔法使いのように武器を持った魔法使いの仕業だとすれば納得もいく。

ふと、さつき会った女の言った言葉を思い出す。

「気をつけた方がいいよ」

もしかしたら、これはあるとき戦っていたもう片方の人のやったことなのかもしれない。

あるとき聡一たちが戦いを見ていたということに気づいていたとして、

柚月だけが相手に都合の悪いものを見ていたとしたら狙われてもおかしくない。

「とにかく、柚月を探さない……」

そうは思ってみるものの、

辺りは暗くどこに行ったのかもわからないため、どうにもならない。

「なんで、こういうときに限って俺は何もできないんだよ……」

聡一は悔しくて泣きたくなるほどだ。

そのとき何か小さなものを蹴ったような感触が足から伝わってくる。足下を見てみると袖月が美羽や氷璃と電話をするために使っていた水晶が落ちている。

「氷璃さんに電話しても、わかるわけないよな……」
ここに水晶が落ちているということは

袖月が電話をしているときになにか起きたのかもしれない。

そう考えてみると氷璃に電話をするのも無駄でもないような気がする。

「もしもし氷璃さんですか？」

「そうよ。聡一君？」

「はい」

「袖月ちゃんは大丈夫なの？」

「袖月のこと、なにか知ってるんですか？」

「それが、さつき電話してたら急に電話が切れちゃってさ……」

なんかあったのかと思って、もう一回電話しても出ないし……」

「そうですか……」

袖月は、どんなことを話していましたか？」

「え？武器を使う魔法使いについて聞いてきたけど……」

「わかりました」

「それで袖月ちゃんはどうしたの？」

「今はなんとも言えません……」

「もしかして、誘拐とか……？」

「そうかもしれません。」

では失礼します」

電話を切り、もう一度まわりの様子を見してみる。

後ろを振り向くと一人の男が立っている。

全然、気づけなかった。

いつからいたのか、それすらもわからない。

「お前は、あの女の子の仲間か？」

なんか危なそうな雰囲気だ。

「あなたはどうなんですか？」

聡一は強気で乗り切ろうとする。

「俺はどちらでもない。」

しかし女の子を連れて行ったやつらの敵だな」

「柚月の行方を知っているんですか？」

「さあな。俺はやつらの後を追っているだけだ。」

今日はここで見失ってしまったのだ。

そしてここでしばらく様子を窺っていたら君が来たというわけだ。」

「柚月を……誘拐された女の子を助けるのに協力してくれませんか？」

「駄目だな。」

なぜ名前も知らない、今会ったばかりのやつに協力しなくてはいけない？」

「すみません……」

でも……どうしても柚月を救いたいです！」

「……お前が俺に協力するというなら考えてやるが？」

「本当ですか？」

ありがとうございます！」

「ああ。その子を探す前に君と話しておきたいことがあるんだがい
いか？」

「……わかりました。」

では、ここで話しても落ち着かないので家の中に入ってもらっても
いいですか？」

「いいのか？」

「はい」

会ったばかりの人を家に入れるのは気が引けるが柚月のためなら仕
方がない。

そして聡一は男とともに家の中に入る。

「そういえばお前も魔法使いなのか？」

「はい」

「なら話は早いな。」

「多分その子を誘拐したのは魔法使いだろうな」

「俺もそう思います」

「そうだ、この人見たことないか？」

「そう言うと男はズボンのポケットから一枚の写真を取り出す。

その写真に写っている人物は袖月と一緒にゲームセンターの帰り会った女性だった。

「知ってます」

「どこで見た？」

「この家のすぐ近くです」

「そうか……」

「その人がどうかしたんですか？」

「いや、そのことはまた今度だ」

「そうですか……」

「それで袖月を見つけるにはどうすればいいんですか？」

「そうだな……ひとつだけ心当たりがある。」

「そこに行ってみるか？」

「はい！」

「かなり危険だぞ？」

「かまいません」

「本当に死んでも知らんからな」

「わかってます」

「聡一は袖月のためなら命をかけてもかまわないと思っていた。」

「それだけの覚悟ができているのなら大丈夫だな。」

「よし、行くぞ」

もう一度、外に出て男についていく。

「そついえばお前の名前、まだ聞いてなかったな」

「聡一です。森嶋聡一」

「聡一……か」

「あなたは？」

「さあな」

「どういうことですか？」

「記憶が無いんだよ。」

それで、さつき見せた写真に写ってた女に助けてもらった。

戦い方も魔法の使い方もあの女に教えてもらったんだよ」

「……」

聡一はこの男の言っていることに納得できなかった。

根拠は無いのだが、なんとなく嘘をついているような気がして仕方がない。

でも今は袖月を助けるのが最優先。

多少、信じられなくてもついていくことにした。

「ここだ」

聡一が連れてこられた場所は結構大きめの倉庫で、その倉庫の雰囲気は

ドラマなどで、不良が溜まり場としているような感じの倉庫だ。

「この中に袖月がいるんですか？」

「さあな。入るぞ」

男は倉庫の中へ入っていく。

その後を聡一が歩き、倉庫の中に入る。

倉庫の中は鉄パイプや工具などが綺麗に置かれている。

その様子から今も使用されている倉庫のようだ。

「誰もいないですね」

「そうだな」

「やっぱり、ここじゃないんでしょうか？」

「かもしれないな……」

聡一は辺りをよく見てみる。

暗くてよく見えないが、白い布がかぶせられているテーブルを見つ
ける。

その布の膨らみ方からテーブルの上には、なにか置かれているよう
だ。

テーブルに近づき、布をめくってみる。

「袖月！」

布にくるまれていたものは袖月だった。

袖月は目を閉じている。

「おい！袖月、大丈夫か！」

軽く方を揺すりながら声をかける。

「う……うん……」

目は覚まさないが、どうやら死んではいないようだ。

「うるせーな！誰だよ？」

倉庫の奥の方から女性の声が聞こえ、倉庫の明かりがつく。

「まずい！」

男は慌てて聡一の方に来て、聡一の腕を引っ張りテーブルの下に隠
れる。

「まったく……誰だよ、こんな時間に！」

さっさと出てこいよ！」

その女の声から、かなり怒っていることが分かる。

「どつするんですか……」

「さあな……とりあえず様子を窺っぞ」

男の表情はかなり冷静だ。

「そこか！」

女は右手に持っている細身の剣を聡一と男の隠れている方向に一振り。

その瞬間キィィィ……というような金属がこすれ合うような音が発生し

聡一と男が隠れているテーブルの横にある古びたロッカーが真つ二つに切れる。

「……………風の魔法!?!」

そう思ったが美羽が使っていたものと発生時の音も発生させ方も全くの別物だ。

「……………隠れてたほうが危なそうだな」

そういうと男はテーブルの下から出る。

「やっと出てきやがったか!でも、もう一人いんだろ?」

聡一も男の言うとおり隠れている方が危ないということがわかったので、

テーブルの下から出てくる。

「なんだよ!ただのガキじゃねーか!」

女の言葉づかいは、とても荒々しい。

そして、とても威圧的だ。

「どうすんですか……………」

「戦うしかねーだろ」

「そっちもその気みてーじゃねーか!

なら話は早い!二人とも殺してやるよ!」

act 12 女との戦闘

女は剣を振る。

さつきと同じように金属がこすれ合うような音がする。

これに当たれば危ないのはわかってる。

しかし、どのような軌道なのか見えないので全くわからない。

「同じ攻撃が当たると思うか？」

男の手には巨大な剣が持たれている。

いつから持っていたのか……あんな巨大な剣を持っていれば最初から気づいているはずだ。

男はその巨大な剣を盾のように使っている。

「やっぱり、あんたらも魔法使いか……」

女の声はさつきと比べて落ち着いている。

「いくぞ！」

男は攻めの体勢になる。

一気に女に近づき巨大な剣を振り上げる。

その攻撃が隙だらけなのは聡一が見てもわかる。

「そんな隙だらけの攻撃でいいのか？」

女は横に一步動くと言を横に振る。

それに合わせて男も剣を振り下ろし、お互いの剣がぶつかり合う。

剣の大きさや体型の違いから男の方が有利に感じられるが、互角のようだ。

女は素早く男がいる方向と逆に動き男の背中を切りつける。

その攻撃は男の背中に浅く当たってしまった。

「さあ、次はテメーの番だ！」

かかってこいよ！」

女は聡一の方を見ながら挑発的な態度をとる。

ここで攻めたら負け

相手の動きは、とても速い。

自分から攻めれば攻撃を避けられ逆に攻撃を受けてしまう。
女の攻撃は魔法のようだ。

ならば、それを吸収してその直後の隙に魔法を当て一撃で終わらせる！

「なんだよ！攻めてこねーのか！
なら、こつちからいくぞ！」

女の攻撃はさつきと違う。

剣を振るのではなく、猛スピードで聡一に近づいてくる。

これでは「剣」での一撃を受けてしまう。

「剣」は「魔法」ではないはずなので、吸収することができない。

つまり、この一撃を受けてしまった瞬間聡一は終わってしまうとい
うわけだ。

この攻撃をどう防ぐか……

聡一はふと氷璃が氷の壁を盾のように使っていたことをおもいだす。

「これだ！」

聡一の目の前に氷の壁が発生し、女はそれに気づき氷の壁を切りつ
ける。

氷の壁は真つ二つに切られる。

慌てて発生させたものなので強度は、あまりなかったようだ。

「氷の魔法かよ！」

その程度の魔法で勝てると思ってんのか？」

女はさつきと同じ距離まで下がる。

その様子から、この距離が一番戦いやすい間合いなのだろう。

ならば、この間合いを崩せば少しは有利になるはずだ。

聡一は走りだし、間合いを崩そうとする。

「逃げんのか？」

予想どおり女は、聡一の方へ向かって走り出す。

一番魔法の使いやすい距離まで近づいてくる。

そのとき袖月の魔法を合成し、重力を大きくする。

「なんだ……体が重くなった……」

「テメー、何しやがった！」

「魔法を使っただけだよ」

このままにしておけば相手も身動きを取れないはずだ。
この女をどうしていいのかもわからないので、そのまま少し考えてみる。

待てよ……重力で身動きが取れなくなるっていうことは、

袖月が気絶させられるわけがない……

もう一度、女のいた方向を試してみる。

女の動きを封じていた場所……そこに女はいなかった。

「くそ……」

「そんな魔法で私を止められると思った？」

背中に鈍い痛みが走る。

なにか硬いもの殴られたような……そんな感じの痛みだ。

「どうやって逃げた……」

「さあな」

女は剣を振り上げる。

終わった……

聡一は死を覚悟し、目を閉じる。

「うわーっ！」

その瞬間、女の叫び声が聞こえる。

さらに剣が地面に落ちる音……

「聡一君、その魔法は一つの方向だけに使ってもあまり効果ないんだよ……」

聞きなれたかわいい声。

少し元気がないように感じるが、これは間違いなく袖月の声だ。

「袖月！」

「ごめんね、心配かけて……」

「うん。それより……」

聡一は女の方を見る。

右手首がありえない曲がり方をしている。

これは袖月がやったようだ。

「なにしてくれてんだよ……」

女は左手で剣を持ちなおす。

「まだやる気か？」

「そうだよ……死ね！」

女は袖月のいる方向に剣を振ろうとする。

「聡一君、ごめんね」

袖月は前に発生させたものと同じ黒い球体を作り出す。

大きさは前より小さいままで保っている。

直径一センチほどだ。

女の魔法は黒い球体に当たったようだが全く効果がないようだ。

黒い球体はゆっくりと女に近づいていく。

「ハハ……もう終わりかよ……」

これが女の最後の言葉だった……

黒い球体は女に当たると協力な白い光を発する。
五秒間くらい光が出続ける。

聡一が目を開けると目の前に女が倒れている。

「ハアハア……」

柚月は肩が動くほど息が荒くなっている。

「柚月！」

慌てて柚月に近づくと、ちょうど聡一の方向に柚月が倒れてくる。
息はしているので気絶しているだけのようだ。

「無理させて、ごめんな……」

もつと俺に度胸があれば……」

ズズズズズ……

魔法の世界から地球に来るときに入ったブラックホールのようなものが

発生するときと同じような音が背後から聞こえてくる。

「まさか地球の魔法使いがここまで強いとはね……」

黒い影のような煙の中から若い男が出てくる。

「まだいるのか……」

聡一は思わず身構える。

「ああ、戦う気はないから」

男の様子は本当に戦う気はなさそうだ。

「あなたは誰ですか？」

「今度、会ったときに教えるよ。」

僕の本当の目的は、そこに倒れてる女の回収だからさ」

男は倒れている女を抱え、もう一度黒い影を発生させる。

「じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

男は黒い影とともに消える。

何者だったのか……

使う魔法もよくわからないが雰囲気はとても強そうだった。

それに「今度、会ったとき」ってもう一回会うことが決まっているみたいだった。

とにかく今は袖月の無事を確認できたのでよかった。

「袖月、大丈夫か？」

「うう……ん」

起きそうにない。

仕方がないので袖月を抱き、倉庫から出ようとする。

そのとき、ここまで案内してくれた男がいないことに気がつく。

「いつの間になくなったんだ……」

少し気になったがもう夜も遅い。

袖月を抱きかかえたまま家に向かう。

袖月はとても軽くて柔らかい。

しかし、ここで余計なことを考えてはいけない。

今、袖月は聡一の背中に背負われている。

一歩歩くたびに袖月の体は揺れ、なにか柔らかいものが聡一の背中に当たる。

その感触に耐えながら家に向かって歩き続ける。

家までの距離は結構ある。

約十五分間、これに耐え続けなくてはいけないと思うと気が遠くなりそうだ。

「くそ……余計なこと考えるな！」

自分に言い聞かせ、歩く速度を少し上げる。

十五分後、やっと家につく。

「ハアハア……やっとなつた……」

家の中に入り袖月を静かに布団に寝かせる。

時刻はもうすでに深夜二時を過ぎている。

聡一も自分の部屋に戻り眠ることにし、

今日起きたことについては明日かんがえることにする。

「ハア―疲れた―」

ベッドに倒れ込む。

そして、すぐに眠りについてしまう。

次の日、目が覚めたのは十二時過ぎだった。

リビングに行くが袖月の姿はなく、テーブルの上に一枚の紙が置かれている。

「買い物に行つてきます」

そう書かれている。

「昨日さらわれたばかりなのに、よく家から出られるな……」
関心と呆れを同時に感じる。

「そうだ昨日のこと……」

もう一度、昨日のことを思い出してみる。

窓から入り、あの剣を持っていた女が氷璃と電話していた袖月を誘拐した……

ここまでいい。

しかし「なぜ誘拐したのか」ということと「なぜ袖月なのか」ということがわからない。

もしもゲームセンターの帰り道に袖月が相手にとって都合の悪いものを見たのだとすれば、

あとから現れた若い男が袖月を殺していたはずだ。

それとも一つ。

一緒に袖月を探してくれた男の行方だ。

気絶させられた男はその場にずっといたはず。

しかし女を若い男が連れて行った後にはいなかった……

とても不思議な話だ。

疑問は、まだある。

若い男が言った言葉「今度、会った時に教えるよ」

これは、もう一度会うことになるということなのか？

考えれば考えるほど疑問が増えてくる。

「ただいまー」

袖月が帰ってきたようだ。

これで袖月がさらわれたときの様子も聞くことができる。

act 14 誘拐犯の目的

「おかえり。昨日のことについて話したいんだけどいい？」

「いいよ。ちよつと待ってて」

柚月は買物袋の中身を冷蔵庫の中に入れ、リビングにある椅子に座る。

「それで昨日のことだった？」

「うん。柚月がさらわれたとき、どんな感じだった？」

「ガラスの割れる音がした後、

すぐに背中を殴られて気絶しちゃったから、あまり覚えてないんだよね……」

不意打ちをされたのなら簡単に柚月がさらわれたことにも納得がいく。

「なんで、さらわれたのか心当たりはない？」

「なにもないよ」

「そう……」

そのときテーブルの上に置いてあった水晶が光る。どうやら氷璃から電話が来たようだ。

「もしもし」

「あ、柚月ちゃん？」

「はい」

「氷璃だけどさ、気をつけてほしいことがあるの」

「なんですか？」

「昨日、柚月ちゃんとの電話が切れたあと聡一君から電話が来てそのとき柚月ちゃんが誘拐されたことを知って、

色々、調べてみたんだよ。

それでわかったことなんだけど……

こっちで指名手配中の犯罪者が何人も地球に逃亡してるらしいんだよね。

そいつらの目的が地球に魔力の塊を送り込むことなの」

「それがどうかしたんですか？」

「魔力の塊を送り込むには、その付近の魔力がゼロの状態にしなくちゃいけないくて、

その目的のために袖月ちゃんたちが住んでいる町の魔法使いを襲っているってわけ」

「じゃあ私がさらわれたのは……」

「そう。魔力を持っている袖月ちゃんを殺すため」

「それなら私の不意をついたときに殺せばよかつたんじゃないですか？」

「私もそいつらの考えてることが全部わかるわけじゃないからなんとも言えないけど、とにかく気をつけてね。」

「わかりました……」

袖月は電話を切る。

「聡一君、昨日私たちが戦ったやつ犯罪者だつて……

それも結構、大人数のグループみたい……」

「そうか……じゃあこれからも戦わなくちゃな！」

「守ってくれる？」

「え？」

「昨日みたいに私のこと守ってくれる？」

「ああ、当然だ！」

「ありがとう。それだけで心強いよ」

「そうか。それでなにをすればいいんだ？」

「その犯罪者たちの目的は魔力の塊を地球に送りこむことなんだから。……」

「そうするには付近の魔力をゼロにしなくちゃいけないらしくて……」

「それで連続で魔法使いが襲われてたつてこと？」

「多分そうだと思う……」

「それで魔力の塊が地球に送りこまれたらどうなるの？」

「……」

「もしかして聞いてなかった？」

「今、聞いてみる」

柚月は水晶を使いもう一度氷璃に電話をする。

「氷璃さん、もし魔力の塊が地球に送り込まれたらどうなるんですか？」

「え？多分、地球の常識が全部狂うだろうね」

「そうになったら……」

「そうよ。地球に住んでいる人たちは何もできなくなって魔法に詳しい人に頼り始める。」

そいつらが魔力の塊を送り込んだ張本人だとも知らずにね」

「もしかして、それが目的なんだすか？」

「多分ね」

「わかりました……では」

柚月は電話を切る。

「聡一君、今すぐ戦いに行こう！」

「え？」

「だって、あいつらのやろうとしてること最低だよ？」

「待て、その前に説明……」

「ごめん……」

「それで、どうしたの？」

「氷璃さんから聞いたんだけど、

魔力の塊を地球に送り込んで常識を全て狂わせて、どうにもできなくなつた人たちに

魔力の塊を送り込んだ人たちが頼られ始める……魔法に詳しいからね。

そうすれば地球の人たちより上の立場になってしまうっていうこと
でしょ？」

「なるほど……」

でもさ俺たちが居る限り、この付近の魔力はゼロにならないわけ
でしょ？」

だったら俺たちが殺されなければ大丈夫なんじゃないの？」

「そうだよね……襲われたとしても聡一君が守ってくれるもんね…

…」

「ああ。だから安心しろ」

「うん」

「俺たちから動く必要なんてないんだよ。

襲いかかってきたら、それを返り討ちにしてやればいいんだから

「そうだね……」

「じゃあ、これからはなるべく一緒に行動するようにするか」

「うん！」

これで地球に魔力の塊を送り込もうとしているやつらの対処法はできた。

あとはその魔法使いの強さが問題となる。

袖月を誘拐した女程度の強さならばなんとかなるが

あまりにも強い敵が現れたとしたら……

それでもなんとかするしかない。

「袖月、また魔法の特訓しないか？」

「そうだね……強い敵が現れたら困るもんね」

「俺の魔法は強化しようにも、どうすればいいかわからないから袖月の黒い球体の魔法をもっと強化しようか」

「……また聡一君に吸収させることになっちゃっうよ？」

「俺のことは気にしなくていいよ。」

それにたくさん吸収した方が俺も強くなれるし」

「わかったよ……」

「じゃあ、さっそく始めるよ？」

「よし、こい！」

ガシャン！

また昨日と同じようにガラスの割れる音がする。

act 15 大男の襲来

「もしかして、また？」

「わかんないけど……」

聡一は少し身構えながら音のした方へ向かう。

今度は聡一の部屋の窓が割られていた。

そして部屋の中には身長が二メートル近くある大男が立っている。

「本当にお前らがあいつを倒したのか？」

「あいつって誰のことですか？」

この男が言っているやつのことなんてわかってる。

昨日、戦った女のことだ。

「細い剣を持った女だよ。うるさいやつ。覚えてないか？」

「それなら昨日、戦いましたよ」

「やつぱりお前らか。あいつも情けねーなーこんな子どもに負ける

んだからよ！」

「なにしにきたんですか？」

「あ？敵討だよ！あんな雑魚でも仲間だからな。

そういうわけでちよつと相手してもらおう！」

大男はいきなり魔法を使い始める。

よくわからない魔法だ。

確かに魔法を使っているのだが、なにも起きない。

だからこそ聡一は自分から攻めることができなかつた。

相手の魔法を知る……それが聡一の勝つために必要なことだからだ。

「え？なによこいつら！」

後ろから袖月の声が聞こえてくる。

「どつした！」

袖月のまわりには体が透けている人がたくさんいる。

「魔法が……効かない？」

袖月は必死に魔法を使おうとしている。

「どうなつてんだよ……魔法が使えないって……」

そのとき聡一に一つの考えが浮かぶ。

もしも袖月のまわりに見えている人たちが魔法で作られたものだとしたら……

それを吸収することができると。

しかしそうでなければ自分も魔法が使えなくなつて大男に殺されてしまふかもしれない。

でも袖月を救うためには、これに賭けてみるしかない！

聡一は袖月のいる方向へ行こうとする。

「君の相手は俺だよ」

さつきまで逆方向にいたはずの大男が聡一の目の前にいる。

腹部に激痛が走った。

どうやらこの大男は和彦と同じように魔法はあまり使わないようだ。

「くそ……」

吸収しておいた魔法を合成し始める。

ガッ！

もう一発、腹部を殴られる。

「君のやりたことはわかつてんだよ！」

聡一のやりたいことは全て知られている……

つまり大男はもう魔法を使わないつもりなのだろう。

そうなれば喧嘩や殴り合いとは無縁の生活を送っていた聡一は圧倒的不利になる。

袖月もまだ魔法を使えないようだ。

「ハアハア……」

このままでは簡単に殺されてしまう。

ならば何もしないよりはマシだ。

そう考え、聡一は大きく振りかぶつて大男に殴りかかる。

「そんな振りかぶつた攻撃が当たると思つか？」

大男は聡一の手首を掴み床に投げ飛ばす。

「ウツ……」

ものすごい勢いのまま床に背中から叩きつけられる。

意識も朦朧としてきた……

「どうすればいいんだよ……」

柚月も魔法を使えないまま透明な人たちに苦しめられているようだ。

「どうせここで死ぬんだから、なんで負けたのか教えてやるよ。

あらかじめ吸収しておいた魔法を合成するのに隙が大きすぎだ。

そしてもう一つ、あの女の子がいないと何もできないんだな」

「長々と語ってくれたじゃねーか……ハアハア……」

意識が朦朧としている間も勝つための方法を考えていた聡一は、

大男が話し始めたときに魔法の合成を始めていた。

どんなに朦朧とする意識の中でもあれだけの時間があれば余裕で合成を済ませられる。

「まだ、やろうつてのか？」

「俺たちの……勝ちだよ……」

聡一の右手には柚月が発生させた黒い球体ができている。

しかし大きさは柚月のものの半分にも満たない。

「この魔法なら……この大きさで十分だよな？」

黒い球体は一直線に進み大男の脇腹を貫通する。

大男はそのまわりの服が血で滲んで行くのがわかるほどの出血をしている。

「ゴホッ……ゴホッ……」

大男は咳をしながら血を吐き出す。

「終わり……だよな……」

「くそ……」

最後の力で聡一に殴りかかろうとする。

その攻撃はさつきまでのものとは全く違い、聡一でも簡単に避けることができた。

大男はそのまま床に倒れる。

そして柚月のまわりにいた透明な人も消えている。

どうやら、あれは大男の魔法だったようだ。

「聡一君！大丈夫？」

「大丈夫だよ……」

聡一は袖月の肩を借りながら起き上がる。

「やっぱり聡一君は私を守ってくれるんだね」

act 16 襲撃に備えて

ズズズズズ……

昨日、女を倒した時と同じ音が聞こえてくる。

「君たちは本当に強いね」

黒い影の中から昨日と同じ若い男が出てくる。

「なにがしたいんだ……」

「結構ボロボロだね。」

そういえば名前を教えるんだっけ……

僕の名前はルード。ついでに目的も教えてあげるよ。

僕たちの目的は地球に魔力の塊を送り込むこと……

そして新しい魔法の世界を作り出すことだよ」

「そんなことして、なにになるんだよ……」

「僕が作り出すんだ。新しい魔法の世界の王は僕ってこと」

「もっとまともなやつだと思ってたけどな……」

「僕をバカにするのかい？」

どっちにしろ僕の目的のためには死んでもらわなきゃいけないわけ

だし……

今すぐ殺してもいいんだよ？」

「勝手にしろ！」

聡一は魔法の合成を始める。

作り出すものはさつきと同じ黒い球体。

これを当てれば一撃で仕留められるはずだからだ。

黒い球体はルードに向かって一直線に飛んでいく。

当たった……

「そんな攻撃は効かないよ」

確かに当たったはずだ。

しかしルードは無傷。

「やっぱり今、殺すのはやめる。」

簡単に新しい魔法の世界の王になってもつまらないからね。

じゃあこれからもたくさん敵を送り込んであげるから、がんばって強くなつてね」

ルードはまた黒い影の中に消えていく。

「本当にあいつなんなの？」

「とにかく、これから現れる敵を全員倒せつてことだろ……」

「そうだよね……そうしないと魔力の塊を送り込まれちゃうもんね」

「うん。大変になりそうだけど……がんばるか！」

「そうだね」

「そうだ、こんなところに敵を送り込まれたら家も壊れるし、近所迷惑にもなるからひと気の無い場所に行かないか？」

「いいよ。それなら山奥のキャンプ場とかはどう？」

「うーん……今はキャンプをする家族も多そうだから……」

「じゃあ普通に山奥に行こうよ。」

それなら、あまり人に迷惑はかからないでしょ？」

「そうだな。今日はもう攻めてこないとは思うけど……」

一応、今日のうちに移動しちゃうか」

「そうだね。じゃあ私は荷物をまとめてくるね」

袖月は聡一のそばから離れていく。

「痛いな……」

聡一は服をめくり大男に殴られた場所を見ている。見ただけで殴られたのがわかるほど変色している。

「こりゃ、袖月には見せられないな……」

「聡一君ーあとなに持てばいい？」

「え？食べ物を出来る限りと着替えだけでいいんじゃない？」

「わかったー」

袖月は準備を進める。

「終わったよ」

リビングには大きな鞆が二つ置かれている。
この中にテントや食糧、着替えなど必要なものがほとんど入っている。

そう思うと柚月の荷物をまとめる能力が恐ろしく感じられる。

「どうする？」

「え？」

「いつ出発するの？」

「そうだな……もう行くか」

「うん」

柚月は鞆を持とうとする。

それを横から「俺が持つ」と言っただけで、家が持ち、家から出る。

ルードとの戦いが終わるまで、この家に帰ってくることはないだろう。

家に対して心の中で「行ってきます」と呟き、駅に向かう。

聡一の家からひと気の無い山奥まで行くとなると電車に乗り、その後はバスで移動しなくてはいけない。

移動距離はあまりないのだがバスを待つ時間などの計算をしていなかったため

相当時間がかかってしまった。

山奥とは言っても下を見れば聡一の住んでいる町や海が見渡せる。

「ああ、やっとなつたー」

柚月は遊び感覚のようだ。

「テント張るの手伝ってくれないか？」

「いいよー」

二人で協力してテントを張る。

家には一つしかテントがなかった。

聡一はこのテントには思い出がある。

まだ幼稚園児だったころ、両親とともに一度だけキャンプに行った。

そのときは海に行き、食べ物海で獲ったものだけで済ますという
予定だったのだが

結局、近くのコンビニで食べ物を買って食べることになった。
今、思い出せばとても懐かしい。

もう父も母もいないのだけれど……

「聡一君、なにポーっとしてるの？」

「ごめん、ごめん少し昔のこと思い出してさ……」

「そう……次は何をすればいいの？」

「そうだな……火をおこしておくか」

近くにあった大き目の石を円形に集め、その中心に木を置く。

そして持ってきておいたライターと着火剤で火をおこす。

「なんか戦うために来たっていうのが嘘みたいだね」

笑顔の袖月を見ていると本当にそうであってほしかった。

できれば戦うことなどしたくなかった……

「戦いが終わったらさ……また来ようか」

「そうだね。今度は普通のキャンプ場でね」

「うん。そろそろ晩飯作るか」

西の空は、もうすでに燃えるような橙色になっていた。

act 17 新しい敵と美羽

「夕日、キレイだな」

「そうだね。こんなにちゃんと夕日を見たの初めてかも」
「俺もだな」

夕日に照らされながら二人は夕食の準備をする。

「やっぱり、こういうときはカレーだよな」

「だよなー こういうところで食べるカレーは格別だよな」

「うん」

二人はカレーを食べるのに夢中になっている。

「ごちそうさま」

「ごちそうさまー まさか聡一君が料理できるとは思わなかったよ

ー」

「家に誰もいないから、いつも自分で作ってるからな」

「そうなんだー」

夕日も沈み空は暗くなっている。

そんな暗い空の中に輝くいくつもの星……

そして下を見るといつも暮らしている町の夜景が見える。

「キレイだねー 私たちの町ってあんなにキレイだったなんて知らなかったー」

「そうだな。空も見てみるよ。星なんて滅多に見ないだろ？」

「うん」

星と夜景を眺めたあと、二人はテントの中に入る。

寝袋はちょうど二つあった。

大きさも大人用のものなので問題ない。

「そういえば、この中で寝るんだよな？」

「そうだよ」

「俺、外に行こうか？」

「別にいいよ。聡一君なら」

「……」

それはどういう意味だ？

俺を信じているということか？

それとも……

いや、そんなはずはないよな……

「なに顔、赤くしてんの？早く寝ようよ」

「わ、わかったよ……」

柚月は平然と寝袋に入り、すぐに眠りにつく。

一方、聡一は無理矢理寝袋の中に潜り込むものの

どうしても柚月のほうを意識してしまう。

「ああ、もう！」

もっと深くまで潜り込み眠ろうとする……

まわりが明るく感じる。

そして鳥の鳴く声……

どうやら一睡もできないまま朝になってしまったようだ。

寝袋から出て柚月を起こさないようにテントの外に出る。

そして少しだけ山の中を歩いてみることにした。

迷わないように慎重に奥へ進んで行く。

少し進んだところで風の流れが変わったことに気がつく。

「これって……魔法だよな？」

もしかすると新しい敵なのかもしれない。

柚月がテントで寝ているので近づかせるわけにはいかない。

テントのまわりはほとんど無風状態だったのに今は葉が揺れて音をたてているほどだ。

「どこだよ……」

色々な方向を見てみるが木が多すぎてなかなか見つけることが出来

ない。

そのとき風が吹いてきている方向がずっと変わらないことに気がつく。

ならば風上に行けばこの風の発生源に辿り着けるというわけだ。

風上に向かつて歩き出す。

段々、風も強くなってくる。

そしてついに風の発生源を発見することに成功する。

「美羽さん？」

そこにいたのは美羽と三人の黒い服を着て顔を黒い布で隠している人がいる。

その様子から戦っていることは間違いない。

どうやらこの風の正体は美羽が魔法を使うときに、無意識のまま発生させてしまう風のようなようだ。

三対一なので美羽は苦戦を強いられているようだ。

「美羽さん！」

「聡一君？こいつら敵だよね？」

「多分、そうだと思います」

「いきなり襲われたんだけど……」

「俺も戦います！」

今は美羽の風がある。

柚月の魔法は大量に吸収してあるので合成に苦労はしない。

一人の敵に狙いを定めてかまいたちのような風をおこす。

その攻撃は胸にあたり敵が倒れる。

「聡一君、強くなったわね」

「ありがとうございます」

「でも、それじゃダメ。私もさつきから何回も攻撃を当てているのに何度も起きあがってくるの。傷は残ったままなのに……」

「どうしてですか？」

「わからないわ。とにかく何か見つけられるまで戦い続けなくてはいけないわね」

「わかりました」

黒服の人たちは動きが変だった。

フラフラしているような……そして何より動きが遅い。

だから攻撃を避けることは簡単なのだが無駄に魔法を使うわけには
いかない。

「聡一君、ちょっと刺激強いかもしれないから目、閉じてて」

「え？」

美羽の一言に戸惑い目を閉じることができず、そのあとに起きることを
見てしまう。

美羽が発生させた魔法は黒服の人の首を切り落とす。

そこからは、ありえない量の血が出ている。

聡一はそれを見て気持ち悪くなるが耐え続ける。

「これでも動くの？」

首を切り落とされた黒服は胴体だけで、こちらに向かってくる。

「どんな魔法使ったらこういうふうになるのよ！」

美羽は怒りと驚きを隠せないようだ。

「美羽さん、身動きができないようにすればいいんじゃないんですか？」

「どうやって？」

「俺もあまりやりたくはないんですが……体を切り刻みます」

「確かにそれなら、勝てるかもしれないわね」

「じゃあ、やりますよ……」

聡一は魔法の合成を始める。

物体を簡単に切れるだけ鋭い風を作り出し、それを黒服にむかって発生させる。

何発も発生させ、当てる位置も変えながら攻撃を繰り返す。

「ハアハア……」

一度にこんなに魔法を使ったのは初めてだった。

そして人を傷つけたのも……

黒服の体はいくつにもわかれ、身動きがとれたとしても

腕、足、胴体がバラバラなので攻撃をすることはできないだろう。

「これでももとの体に戻られたら俺、泣きますよ……」

「私もよ……」

美羽も他の二人を同じように切り刻んでいた。

黒服たちの体はバラバラにも関わらずそれぞれの部分で動いているのがわかる。

「なんで脳が繋がっていないのに動くんだよ……」

「もしかしたら、そういう類たぐいの魔法を使われているのかもね」

「そんな魔法があるんですか？」

「魔法の種類は無限だから、ありえるんじゃない？」

ズズズズズ……

この音を何度聞いたのだろうか……

音を聞いた瞬間にルードが現れたということがわかるようになってしまった。

「こいつらは、なんだったんだよ！」

「まあまあ、そんな怒らないで。怒りたいのは僕の方なんだからさ」「なんでだよ！」

「敵が増えたから。それも強そうだし」

「聡一君、もしかしてこいつが？」

「多分、敵のリーダーだと思います」

「それじゃあ今日はまだ戦ってもらうからね」

次の相手はもしかしたら君たちが一番戦いづらいかもね」

「どうということだよ？」

ズズズズズ……

またさつきと同じ音がして黒い影の中から黒い服を着た女の子が出てくる。

普通の中学生くらいの女の子なのだが、全く普通ではない。

右手に持っている、見るからに強力そうな銃器……

さらに背中には、もっと巨大な兵器のようなもの。

見える限りではこれだけが服の形状などから、まだ武器を隠し持っていると思われる。

「戦争でもする気かよ……」

「聡一君、あの子が持っている黒いもの何？」

「地球で戦争をするときに使う道具です。危険なので気をつけてください」

「気をつけるって言っても、どんな道具なのよ……」

「あの先端から、ものすごい速さで弾丸が飛んできます。それに当たったら……」

「わかったわ。とにかく先端から出てくるものに気をつけなければいいんでしょ？」

「はい」

聡一は近くにある木の陰に隠れる。

美羽も同じように聡一が隠れている木とは違う木に隠れる。

運よく女の子は聡一たちが隠れていることに気づいていないらしい。

「なんで魔法使いの戦いに地球の武器が使われるんだよ……」

女の子は銃を構えると、それを乱射し始める。

銃声が森の中に轟き、まわりの木々はどんどんボロボロになっていく。

「これが地球の道具……」

美羽は驚き、その場に立ちつくしている。

美羽の前に立っている木も、もうボロボロだ。

そして女の子は美羽が隠れていることに気がつき、その方向に銃を構えている。

「危ない！」

聡一は美羽のいる方向へ飛び込み、美羽とともに地面に倒れ込む。

「大丈夫ですか？」

「え？うん……」

「どうすればいいんだよ……そうだ！重力だ！」

弾丸の進行方向と逆に重力を使えば、こちらには弾丸が飛んでこない。

地球で作られた兵器なのだから「通常」の状態の地球では強くてあたりまえ。

しかし、その「通常」の状態を狂わせてしまえば勝ち目がある。

次の発砲……それに合わせて魔法を発生させれるように魔法の合成を始める。

もう一度、銃を構えた女の子は聡一と美羽がいる方向に発砲し始める。

女の子の指の動き……それで発砲するタイミングを把握し、重力を発生させる。

銃口から放たれた弾丸は、女の子の方向へ飛んでいく。

女の子の頬に軽く当たり銃弾はそのまま飛んでいく。

女の子は驚いた表情のまま聡一から少し離れる。

そして女の子は服の中に隠していた手榴弾を投げつける。

これを女の子の方向へ飛ばしてしまえばこの戦いは終わるだろう……

しかしそれをするのは気がひけた。

聡一は誰もいない方向へ飛んで行くように重力を発生させる。

その方向で爆発する音が聞こえた。

「聡一君、あますぎるよ。たとえ女の子でも敵なんだから……」

「わかってますよ！そんなこと……」

思わず声を荒げてしまう。

「もういいわ。あとは私がやるから」

「……」

なにも言い返すことができなかった。

美羽は女の子の方へ近づいていく。

女の子は背負っていた大きな銃を取り出す。

それに構わず美羽は女の子に近づいていく。

女の子の目は鋭く美羽を睨みつけている。

そして美羽に向けられている銃の引き金を引く……

聡一はその瞬間、目を閉じてしまう。

人が倒れる音……

美羽さんが撃たれた……

「美羽さん！」

目を開け、大声で叫ぶ。

「なに……」

腕から血を流し、その部分を押さえながら立っている。

そして、その前には女の子が倒れている。

「美羽さん！大丈夫だったんですか？」

「私が簡単に殺されると思う……？」

「そう……ですよね」

「へー 地球の武器が相手でも大丈夫なんだ」

「お前はなにがしたいんだ！」

美羽の表情や言葉の強さなどから怒っていることがわかる。

その様子を見て聡一も少し恐怖を感じる。

「君に言ってもわからないと思うけど？」

「いいから答える！」

美羽がここまで攻撃のために魔法を使ったのは初めて見た。ものすごい強さの風……その風は渦を巻くように吹き荒れルードを切り裂こうとする。

しかしルードの目の前には黒い影が発生している。

ルードが現れた時と同じものようだ。

美羽が発生させた風は黒い影に当たると段々、消えていくように弱まってくる。

「なにをした！」

「君たちじゃ、僕には勝てないみたいだね。

素直にあの女の子を僕と戦わせれば？」

ルードが言う「あの女の子」というのは柚月のことだと思われる。

「なんで柚月なんだよ！」

「わかんないの？あの子は最高の魔法使いだよ。

けっして強いわけではないけどね」

「どういう意味だよ！」

「さあね。じゃあまた会おうか」

また黒い影の中へと消えていく。

「くそ……美羽さん、大丈夫ですか？」

「まあ……なんとか……」

美羽は自分の服を破り、それを利用して出血を止めている。

「俺たちが泊まっているテントまで来てくれませんか？」

「……わかったわ」

美羽に肩を貸しながらテントに向かう。

テントにつくと柚月が朝食の準備をしていた。

「あ、おかえり。銃声みたいな音が聞こえてたけど大丈夫？

って美羽さん、どうしたんですか？」

「また、あいつに会ったんだよ。それで今度は銃を持っている女の子と戦わされた。」

その前は体をバラバラにしても動き続ける三人組」

「え？もしかして今、戦ってたの？」

「そうだよ。美羽さんも一緒に」

聡一の肩を借りながら歩いてきたはずの美羽は気絶している。

「美羽さんは大丈夫なの？」

「多分……すぐに止血したから……」

「わかった。あとは私に任せて」

美羽をテントの中に運び、柚月が手当てを開始する。

どこでこんな知識を得たのか……

銃で撃たれた傷口でも迷うことなく手当てをしていく。

柚月の表情はとても真剣だった。

その表情を見ていると話しかけることすらできない。

本当はなにか手伝いたいのだが、できそうなことも無さそうだ……

柚月が手当てをしているのを見ながら自分の無力さを感じる。

美羽を守る事ができなければ、そのあと手当てもできない。

本当に役に立たない……

「よし、これで大丈夫」

柚月の持つてきていた包帯で腕からの出血を抑えている。

どうやら銃弾は体内に残っていなかったようだ。

美羽は、まだ眠ったままだ。

「聡一君、美羽さんが起きた時のために昼ごはん作っておこうよ」

「え？うん……」

「どうしたの？元気ないよ？」

「大丈夫……じゃあ作るか……」

聡一はテントの中から出ていく。

そのあと柚月もテントから出てきて昼食の準備を始める。

「どうやら持ってきていた食糧は意外と少なかったらしく、
昼食を作る分をひくとほとんど残っていない。」

「買い物に行かなくちゃダメみたいだね」

「そうだな。米くらいは買っておかないと……」

「そんな話をしながら昼食を作っているとテントの中から美羽が出てくる。」

「もう大丈夫なんですか？」

「うん。なんとか……」

「もうすぐ、お昼ご飯できるので待っていてください」

「ありがとうございます」

「昼食を作り終えて柚月がテントの外に置いてある折り畳み式のテーブルの上に運ぶ。」

「そういえば美羽さんは、どうして地球に来たんですか？」

「ああ、氷璃に言われて来たんだけど何をしたいかわからないんだよね……」

「どういふことですか？」

「地球に魔力の塊を送り込もうとしている奴らと戦えって言ったけど……」

「それ、さっき戦った奴らですよ！」

「え？ そうなの？」

「そうですよ」

「柚月は片腕が使えないため食べづらそうに料理を食べている。」

「それで、なんで君たちが狙われてるの？」

「それが魔力の塊を送り込むにはその周辺の魔力を無くさなくては
いけないらしくて……」

「へー あと魔力の塊を送り込んでなにがしたいの？」

「多分そんなことしたら地球の常識が狂うわよ？」

「それが目的だつて言つてましたけど……」

こういつ奴らの考へつて全然、理解できませんよね」

「じゃあ、そいつらのリーダー……多分さつきいた奴だと思つけど
そいつ倒すまで私も地球にいるから」

「本当ですか？ありがとうございます」

「うん」

「じゃあ美羽さんも、ここに泊りますか？」

袖月のこの一言で聡一は昨日の夜のことを思い出す。
隣に袖月がいる……それだけで一睡もできなかった。

袖月だけでも慣れていないのに美羽さんまで増えるとなると……

「そうさせてもらつわ」

美羽さんも簡単に了承してしまつし……

これで今日の夜も眠れなさそう……

「聡一君、どうしたの？」

「え？なんでもないよ……」

その後、なぜか料理をすごい勢いで口に運ぶ。

まわりから見れば慌てていることがわかるのだと思う。

美羽も袖月も不思議そうな表情をして聡一を見ている。

「ごちそうさま」

聡一は一人だけ早く食べ終える。

そして、このあと買い物に行つたときに必要なものを確認する。

「聡一君、ごめんね。一人でやらせちゃつて」

「いいよ。必要なものは……米と水……ラップも必要かな」

「ラップ？なんで？」

「皿の上にラップをかぶせて使えば洗う必要が無くなるでしょ？」

「そっかーここだつたら水が大事だからね」

「うん。あとはなにが必要だ？」

「そうだなー……ご飯だけだつたら栄養が偏るから

他のものを適当に買うくらいでいいんじゃない？」

「二人とも、買うもの決まつた？」

「はい。ちょっと待ってください」

聡一は鞆の中から財布を取り出し、美羽の待っている森の外の道路に出る。

「そういえば美羽さんってコンビニ行ったことあるんですか？」

「あるよ。地球には、あんな便利な店があっといういな」

「はい」

久しぶりに美羽に会ったため会話が多くなる。

三人はコンビニまでの三十分ほどの道のりを歩いている間、ずっと話していた。

「やっと着いたね」

「うん。下り坂だったから楽だったけど」

帰りは荷物もあるし上り坂だから、もっと辛くなるな」

「もう……そういう話ししないでよー」

必要なものをどんどんカゴに入れていく。

このコンビニの場所が山奥なだけでもあって、客はあまりいない。

買うものは、もう決まっていたのですぐに買い物済ませることができた。

会計を済ませて、コンビニの外に出る。

そしてだれがどの荷物を持つのか決める。

「やっぱり聡一君が一番、重いやつだよな？」

「待て、柚月が魔法を使えば全部の荷物が軽くなるんじゃないか？」

「たしかにそうだね」

「柚月ちゃん、魔法を無駄遣いしちゃダメだよ？」

「……わかりました。ごめんね、聡一君」

美羽は聡一の方を向いて笑顔になっている。

「ドSかよ……」

などと言えるわけもなく一番重い荷物を持つ。

上りになって実感するが結構、急な坂道だ。

「ハア……ハア……」

まだ半分も来ていないというのに息がもう荒くなっている。

「袖月ちゃん、かわいそうだしもう魔法使ってもいいよ?。」

「わかりました」

袖月が魔法を使うと、さっきまで鉄のように重かった荷物が羽根のように軽くなる。

「おお、すげー さすが袖月の魔法だな」

「ありがとう。早く行こうよ」

「そうだな」

聡一は荷物が軽くなったのをいいことに走り始める。

「ハア……ハア……上り坂って……辛いな……」

「聡一君って、おもしろいですよね」

「そうね。こっちまで楽しくなってきたよ」

帰り道も同じように三人で話しながら歩いていく。

上り坂になったので歩く速度が遅くなりコンビニからテントまで四十分くらいかかった。

act 21 勝つための方法

「やあ、待ってたよ」

「お前！」

テントに戻ると、またルードがいた。

「今度は何しに来た？」

「もちろん戦うためだよ。」

今回は本気で決着つけるつもりだから、覚悟しておいてね」

前までのふざけた感じのルードとは少し違う。

目が真剣で殺意というのか何か恐ろしい感情で満ち溢れているように見える。

「じゃあ、いくよ」

どうやら今回は初めからルードが戦うらしい。

体には黒い影……そんな優しいものではない……その黒いものは「闇」だ。

見ているだけでわかる。

絶対に触れてはいけない、恐ろしいものだ。

「どうしたの？朝みたいに攻撃してきなよ」

ザアアア……

風の流れが変わる音がする。

美羽が魔法を発生させようとしているということだ。

そして竜巻をルードのいる位置に発生させる。

この攻撃はルードの挑発にのってしまっただから行ったものではない。風の流れが美羽は、いたって冷静であるということを伝えている。

竜巻は少しずつ大きくなりルードの姿が見えなくなっている。

竜巻は最大の大きさになると今度は少しずつ小さくなっていく。

そしてルードのまわりは「闇」に囲まれていて、ルード自身は無傷

だ。

「そんなんで大丈夫なの？」

ルードの手のひらに「闇」が集まる。

それは、なんの形になるわけでもなくただ影のように……

しかしその「闇」の範囲は確実に広がっている。

音を立てることもなく静かに移動を始めると棒のような形になった。その形は不規則でどのような攻撃が来るのか、まったく予測できない。

「なんで攻撃してこないの？ 僕から攻めるけどいいの？」

そう言いながら近づいてくる。

「闇」も一緒に……

それには絶対に触れたくない。

とても恐ろしいものを感じる。

「……っ！」

美羽は慌てて強風を発生させ、ルードを近づけないようにする。

それを見た柚月はルードの進行方向とは逆向きに重力を発生させる。

その魔法を受けているにも関わらずルードの動きは一切変わらない。

「なんで!？」

「だから無理だよ。ちゃんと「殺気」を持たないと……」

ルードの目つきが変わっている。

殺気に満ち溢れた目……

柚月は黒い球体を発生させ始める。

これが「当たれば」勝てるのだが……

その球体はものすごい勢いで飛んでいく。

しかし、それは「闇」の中に消えていく……

「だから「殺気」を持たないと攻撃は当たらないって。

僕を殺さなきゃ君たちが死ぬんだよ？」

「闇」の範囲が一気に広がり周囲を包みこむ。

まわりは薄暗くなり、体には痛み……身体的なものもあるのだが他の痛みもある。

魔法を使うこともできなくされてしまうようだ。
しかし聡一には、それを吸収することができた。
迷わずその吸収を始める。

自分のまわりのものだけではなく、柚月や美羽のまわりのも吸収する。

吸収するのは簡単だった。

しかし、その後は体内に「闇」がある状態。

見ているだけで危険だとわかるものを体内に入れてしまったということだ。

「うっ！ハア……ハア……」

たったこれだけの弱い魔法を吸収しただけで

柚月の黒い球体を吸収したときと同じほどに疲れる。

「聡一君！大丈夫！そんな魔法吸収したら……」

「大丈夫です……」

「そう……気を付けてね。あの魔法、とても恐ろしいものだから」

「わかってます……」

「へー 君も結構戦えるみたいだね」

「うるせー！」

聡一は吸収したばかりの「闇」を柚月の魔法と合成させ始める。

新しく生まれた魔法も黒い影と変わらない。

そして感じられる恐怖も変わらない。

しかしその攻撃の対象はルードになっている。

つまりルードの魔法のコントロールを得たということになる。

「僕の魔法を使えるようにするなんて……」

それに対抗してルードも「闇」を発生させる。

二つの「闇」はお互いにぶつかり合い、ほとんど同時に消えていく。

「なんで君の魔法に殺気があるの？」

この言葉を聞いた時、聡一はあることに気がつく。

ルードの「闇」に対抗するためには「殺気」が必要だということ……
そして今の聡一が発生させた「闇」には「殺気」込めていなかった。

つまり合成後の魔法にもルードが込めた「殺気」がそのまま存在するようだ。

「これなら……いける!」

「なにかわかったの?」

「はい」

聡一の表情は少し明るくなっていた。

「どうやら何かわかったみたいだね。でも僕には勝てないよ」
またルードは「闇」を発生させる。

今度のものの形状は柚月の作り出す黒い球体に似ている。
その球体はこちらに向かって直線を描きながら聡一の方へ飛んでくる。

それに対抗するように柚月も黒い球体を発生させる。

そして二つの黒い球体がぶつかり合う。

黒い球体はどちらも消えていく……

たとえ相殺することはできてもそれ以上ができない。

これしかできないのなら負けたくないが勝つこともできない。

「どうすればいいんだよ……」

そのときルードの背後に黒い影が発生する。

この影からは「闇」から出ていた嫌な雰囲気は無い。

その中からは柚月が誘拐されたときに探すのを手伝った大男が出てくる。

「こっちは終わったぞ」

「ご苦労さま。もう少しそこで待ってて」

「どういうことだよ……」

「聡一君、一人増えたから気をつけてね」

「わかってます」

「さあ続きを始めようか」

ルードの手のまわりにまた「闇」ができている。

今度はルード自信がこちらへ近づいてくる。

そして直接、攻撃を始める。

動きは普通の人と変わらないのだが手には「闇」がある。
それを吸収しようとすればルードの攻撃が当たるだろう。

「柚月ちゃん！魔法！」

美羽が袖月に指示を出す。

「はい」

袖月はその指示通り魔法を使う。

ルードの動きを封じるために重力を強くする。
少しだけルードの動きが遅くなる。

しかし聡一にとってはそれだけで十分だった。

聡一は一步後ろに下がりルードの腕を掴む。

「この距離なら大丈夫だ」

ルード「闇」を吸収する。

そしてすぐにその魔法を袖月の魔法と合成させる。

発生した「闇」はルードの体を貫き飛んでいく。

「痛いな……」

ルードは落ち着いている。

貫通した場所は肩だったため命に別状はないようだ。

その傷口のところに「闇」が集まり始める。

そして「闇」が消えると傷は無くなっていた。

「なんで？」

「治癒も可能なのかよ……」

「即死させないとダメみたいね」

美羽の一言でルードを倒すための条件が一つ増えた。

そしてルードの後ろには敵が二人増えている。

これでルードを含めると敵の数は四人。

しかし後ろにいるやつらが戦おうとしないことが唯一の救いだっただ。

「さあ、あと二人だ！二人が戻ってくるまでに僕を倒せるか？」

まだ二人、敵がいるということなのか……

もしもルードの言っていることが本当ならできるだけ早く倒さなければいけない。

「美羽さん、どうしますか？」

「どうするも……攻撃が当たらないからね」

「そうですね……」

「まっつて、一つ試したいことがあるわ」

「なんですか？」

「次にあいつが魔法を発動させたら、それを吸収してすぐに攻撃してくれない？」

その攻撃を防いでいる間に私と柚月ちゃんに攻撃するから」

「わかりました」

しかし、これを実行するにはルードが攻撃してこなくてはいけない。こういうときに限ってルードは攻撃を仕掛けてこない。

作戦がバれているというわけではないのだが……

「柚月ちゃん攻撃して」

「いいんですか？」

「うん。柚月ちゃんの魔法から身を守る時に発動した魔法を聡一君に吸収してもらって

あとはさっき言った通りにするから」

「わかりました」

柚月は黒い球体を作る。

いつもどおり落ち着いている。

その球体をルードのいる方向へ放つ。

「……」

ルードは無言のまま「闇」を発生させて身を守る。

「予定どおり！」

聡一はすぐにルードの近くに行き、「闇」を吸収する。

そして、その後の隙に柚月と美羽が攻撃を開始する。

柚月は連続して魔法を使ったので少し辛そうだ。

柚月と美羽の魔法がぶつかり合っているため様子があまり見えない

……

「もう大丈夫だよね……」

柚月は肩が上下に揺れるほど息が荒い。

美羽も少し疲れがあるようだ。

段々様子が見えるようになってくる。

そこには人が立っている影が見える。

「まだダメなの!？」

「らしいな……」

「お前が死んだら意味ねーだろ！」

立っている人影はルードではなかった。

巨大な剣を横に構え盾のように使っている大男が立っている。

そしてその後ろには驚いた表情のルード。

「ほら全員そろったぞ。遊びは終わりだ」

「わかってるよ!」

なにを話しているのかわからない。

そしてルードの後ろには敵がさらに増えてルードを含めると六人になっ

なっている。

「やっと終わりだ……」

ルードは不気味に微笑んでいる。

そしてルード以外の五人が異動する。

もう一度ルードのまわりを「闇」が覆う。

その「闇」は形を変え周囲をドーム状になって包み込む。

「さあ！これでやっと始められるよ!」

「闇」に囲まれているためまわりが薄暗く感じられる。

「なにを始めるんだ……」

「聡一君、もしかしたら魔力の塊を……」

「そんなわけですね。俺たちがここにいますから……」

「もしも、このドーム状の魔法が魔力を包み込んで

外部に影響がでないようにするためのものだとしたら？」

「……どうすればいいんですか」

「多分もう手遅れだと思うわ」

美羽は遠くを指差す。

その先には光るものがある。

とても大きくてもものすごい力を感じる。

「まさか……あれが魔力の塊……」

「多分そうね」

「さあ、これで僕の願いが叶う！」

ルードのまわりにある「闇」は確実に強力なものになっている。

「もう終わりにするよ」

どンドン「闇」は巨大化していく。

そしてドーム状の「闇」の中を埋め尽くしていく。

聡一は両手を大きく広げてできるだけ広範囲の「闇」を吸収できるようにする。

少しずつだが確実に「闇」を吸収できている。

後ろにいる袖月と美羽には絶対に「闇」を触れさせてはいけない。

そう思い必死に「闇」を吸収しつづける。

そして後ろの袖月と美羽は攻撃を始める。

美羽は今までに聡一に見せたことが無いほど強力な魔法を。

袖月は今までにやったことがないほど連続で魔法を使い続けている。

「無駄だよ！」

聡一は「闇」を吸収し続けているはずだった。

しかしどンドン「闇」の範囲は増えていく。

このままでは後ろの袖月と美羽にも被害が……

「くそーッ！」

大声を出しながら聡一は吸収と合成を同時に行う。

こんなことをしたのは初めてだ。

「闇」を吸収しながら「闇」を発生させる……

吸収した分と新たに発生させた「闇」が打ち消していく分、

これが止められる「闇」の限界だ。

それでも足りない。

「聡一君！もう少し頑張って！」

美羽の表情はとて恐ろしくしかし頼もしく見えた。

かまいたちが実体化して見えるほど巨大になっている。

それは「闇」を切り裂き、どんどんルードに近づいていく。

「私もがんばる！聡一君もがんばって！」

袖月も全ての力を使い今までで最大の大きさの黒い球体を作り出す。

黒い球体は「闇」を貫きルードに向かっていく。

「これで終わりだ！」

聡一は吸収をやめ、合成に全ての力を使い「闇」を発生させる。

聡一の作り出した「闇」はルードの「闇」をのみ込んで行く。

「まさか……僕の負け……」

聡一、袖月、美羽三人の魔法はルードに当たり全ての魔法が消えていく。

そして倒れているルードはなぜか嬉しそうな表情している……

act 24 五人の敵

「終わった……」

「まだよ……他に五人いるわ」

「やるしかないですよね……」

「待って、聡一君は魔力の塊を吸収して。あれがあれば常識が狂うから……」

「わかりました……」

聡一はフラフラのまま魔力の塊に近づいていく。

「闇」の中から解放されて体に照りつける木漏れ日はとても気持ちがいい。

「まさかルードが負けるとはな……」

しかし魔力の塊を消されるわけにはいかない。悪いが俺たちとも戦ってもらおう」

「お前らの相手は私たちよ！」

柚月と美羽は立ち上がり五人を見ている。

「ほう、ずいぶん元気な女の子たちじゃないか！」

巨大な剣を持っている大男が剣を振り上げ柚月に飛びかかる。

その瞬間、柚月は重力を発生させると大男は地面に叩きつけられる。

「聡一君……早く魔力の塊を……」

柚月の声は、とても無理をしているように聞こえる。

少しでも早く終わらせるために聡一は動かない足を無理矢理進ませる。

そして魔力の塊に右手をつける。

その瞬間にとっても強大ですごい魔力だとうことがわかった。

正直、全て吸収しきれるか不安だ。

「聡一君！なにやってるの！早く初めて！」

「わかりました」

魔力の吸収を始める。

ルードとの戦いで体内に溜まっていた魔力を全て使ったため、魔力が空の状態で吸収をすることができる。

後ろでは柚月と美羽が戦っている。
二対五のため、かなり不利だがなんとか互角の戦いに持ちこんでいる。

柚月の魔法で相手の動きを止め、そこへ美羽が攻撃をする。

これを繰り返しているだけのため攻略されてしまえば勝ち目が無くなる。

敵の一人が柚月から離れる。

その位置はちょうど柚月の魔法の範囲外だ。

近くの敵に集中しているため柚月も美羽もそのことに気が付いていない。

その敵は遠距離攻撃用の魔法を使う。

光の線が柚月に向かって放たれた。

その光の線は柚月の魔法の範囲に入っても早さが変わらず進み続ける。

しかし少しずつ進む方向が下になってくる。

柚月はそのことに気がつき足下に来ることがわかったので少し飛んでそれを避ける。

しかし離れた位置からの攻撃が可能な敵がいるということは、これから戦うのにさらに不利になる。

「柚月ちゃん、遠くの敵にも集中して！」

「わかりました」

美羽の言うとおり遠くの敵にも集中すると柚月の魔法が弱くなってしまう。

そのことに本人たちは気づいていないため敵の動きが早くなって見える。

「!?!」

美羽はかまいたちを使い襲いかかって来た敵に反撃する。

柚月ちゃんの魔法が弱くなっている!?

でも近くの敵だけに集中させたら危険だし……

なら、できる限り私が遠くの敵を攻撃して隙を作らないと……

美羽は遠距離にも届く魔法に切り替える。

そして柚月の魔法の範囲外にいる敵に対して攻撃を仕掛ける。

こんなに遠くの敵に攻撃するのは初めてだったため、うまく制御ができない。

そのせいで簡単に避けられてしまう。

しかし美羽の魔法が敵に届くまでの時間の間、敵は攻撃に集中しているはず。

その隙を利用して一気に敵に近づく。

そして遠くから使った魔法を避けた瞬間に別の魔法を使った。

この距離ならば間違いなく当たる。

隙だらけの敵にとっては美羽の魔法を避けることは不可能。

美羽の魔法は敵に直撃し、その敵はその場に倒れ込んだ。

「あと四人……」

美羽は少し安心してはいたが柚月は一人で四人の敵の相手をしている。

つまり敵の攻撃対象は柚月になっているわけだ。

これならば背後から強力な一撃を叩きこむことも可能だ。

一撃で全員を仕留める自身は無かったが、一人でも敵を減らせればいい。

美羽はもう一度、攻撃の準備をする。

「気づかないと思ったか？」

後ろから、とても低く恐ろしい声が聞こえてくる。

驚き振り返ると、そこには一人の大男が立っていた。

大男は巨大な剣を振り上げている。

その動きは遅く隙だらけだ。

楽々避けることができた。

しかし、そこから流れるように攻撃が繰り返される。

予想外だったがこの大男の弱点は「遅い」こと。

それでも避けるのがギリギリだった。

次の攻撃に備えて美羽も攻撃をする準備をし、魔法を使う。

魔法は大男の脇腹に当たり服が赤く染まっていくのがわかる。

「ウツ……」

大男は剣を地面につき、体を支えている。

これで二人目を戦闘不能にした。

残るはあと三人。

これだけ長い間戦っていて生き残る相手だ。

今までの二人ほど簡単に倒せるはずがないだろう。

柚月は残りの三人を相手に身を守ることしかできていなかった。

敵の背後から美羽はかまいたちを発生させ、攻撃する。

そんな簡単に当たるわけもなく敵に楽々避けられる。

そのとき美羽の方に一人の敵が近づいてくる。

「邪魔しないでくれないかな？」

若い男、見た目は普通なのだが恐ろしい笑みを浮かべている。

右手には長さ三十センチほどの刀……

その小さな刀から繰り出される攻撃は今までとは格が違うほど早い。

そのせいで避けることはできなかった。

しかし浅くしか当たっていないため美羽はなんとか耐えている。

攻めなかつたら負ける！

美羽はどのように戦うかを考える体力は残っていないかった。

そのため使っている魔法もとても雑で危険なものだ。

「そんな魔法の使い方しても無駄だよ」

美羽の攻撃は一切敵に当たっていない。

それでも美羽は魔法を使うことをやめなかった。

ただ魔法を使うだけ……

それでもやらないよりはマシ。

聡一君だつて魔力の塊を吸収するのをがんばっているんだから

……

そう自分に言い聞かせ、魔法を使い続ける。

その横では袖月が戦っている。

戦っているとは言っても袖月は全く攻めれていない。

自分の身を守るのが限界らしい。

そして前には巨大な魔力の塊を吸収し続けている聡一の姿。

皆、必死で戦っている。

そのとき聡一が吸収しているはずの魔力の塊が光を放つ。

この光は聡一たちにとっては希望の光……

敵にとつては絶望の光に感じられただろう。皆、目を閉じている。

いつの間にか戦いもおさまっている……
どれだけの時間、光が発生していたのだろう……
十分……二十分……もしかしたら、たったの一瞬だったかもしれない。

光が消えた後に残っていたものは、ただ立ちつくす袖月と美羽……
そして倒れている聡一。
敵の姿は、もうなかった。

袖月の瞳からは涙がこぼれている。
静かにそれは流れ続けている。

「袖月ちゃん、もう終わったんだよ……」

「はい……とても怖かったです……」

美羽は袖月を抱きしめている。

袖月は美羽の胸の中で静かに泣き続ける……

「そつだ……聡一君は……」

「袖月ちゃんは優しいね。聡一君なら大丈夫よ」

袖月と美羽は倒れている聡一の近くに行く。

気絶している聡一からはものすごい魔力が発せられている。

このことは、まだ魔法についてあまり詳しくない袖月でも感じる……
とができた。

「これは少し聡一君がんばりすぎたかもね……」

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫だと思っけど、一応むこうの世界に連れていくわ」

「私も行きます」

「わかったわ。じゃあ早速行くわよ」

聡一の横で美羽は移動するための魔法を使う。

ブラックホールのようなもの……

袖月と美羽はその中に聡一を抱えて入っていく。

「ここは……？」

聡一は重い体を無理矢理起こして、まわりを見る。

誰かの家のようだ。

この部屋には見覚えがある……

ガチャ

ドアが開き、氷璃が入ってくる。

「もう大丈夫なの？」

「はい。なんで俺はここにいるんですか？」

「魔力の塊を吸収してて気絶したんじゃないの？」

「そういえば……美羽さんと柚月は！？」

「あの二人がここまで運んできてくれたのよ。」

聡一君が無理してたみたいだって言ってる

「そうですか……」

「気分はどう？まだダメ？」

「もう大丈夫です。それで魔力の塊はどうなったんですか？」

「ああ、あれなら強力な光を放って消えていったって言ってたわよ

？」

「そうですか……じゃあ美羽さんと柚月は、あの五人を倒したんですね……」

「違うわよ。その敵は魔力の塊が放った強力な光にのみ込まれていったらしいわよ」

「さあね。聡一君の合成魔法が奇跡を起こしたんじゃないの？」

「そんなことはありませんよ……俺はなにもしてませんよ」

「そう……じゃあ柚月ちゃんと美羽が返ってきたら、魔力の塊のまわりでおきたことについて、推測だけど説明するからもう少し休んでて」

「わかりました」

氷璃は部屋から出ていく。

聡一はもう一度、布団に潜り眠りにつく。

「聡一君、起きて」

聡一は聞きなれた声で目覚める。
目を開けると袖月の姿があった。

「聡一君、早く！氷璃さんが色々説明してくれるって」

「わかった……」

聡一は起き上がり、皆が待っている部屋に向かう。

その部屋には袖月、美羽、氷璃の三人がいる。

「じゃあ全員そろったから、始めるわね。」

まず魔力の塊が最後に放った光なんだけど……」

「それは俺じゃないですよ」

「待って、これから説明するから。」

その光は多分、聡一君が無意識のうちに合成を始めちゃったからだ
と思うの」

「だから俺はなにもしてませんって……」

「ううん。美羽から聞いた話によると、あの量の魔力を吸収するの
は無理だと思うわ。」

だから聡一君の体が限界に達した時、

今までに吸収した魔力とまだ吸収していない魔力を合成して、

強力な光の魔法ができたんじゃないかな？」

「そうなんですか？」

「確信は無いけど、それしか考えられないからね。」

それで、そのとき聡一君が吸収した魔力はこっちの世界に来て全て
放散されちゃったの。」

そのときの様子は私も見ていたから間違いないわ」

「それって、なにか困るんですか？」

「うん。地球の魔力だから、もしかしたら悪影響が出るかもしれな
いわ」

「どうすればいいんですか？」

「その魔力の塊は、この世界のあちこちに散らばったからそれを回収しなくちゃいけないわね」

「どこにあるかわかりますか？」

「それは、これからやるわ。だから今はわからないわね」

「じゃあわかったら俺に回収させてください」

「いいの？それぞれの「魔力自体」と戦うことになるわよ？」

「吸収すればいいんじゃないんですか？」

「そんな簡単に回収できるようなものじゃないわ。」

「一つ一つ違った戦いを強いられるうえに、どれもかなり強力なのよ？」

「それでもいいです。俺が持ちこんだ魔力なんですから」

「そう……じゃあ私も着いていくわ。多分、相当危険だと思うから

……」

「わかりました。魔力の位置がわかったら教えてください」

「わかったわ。袖月ちゃんと美羽はどうする？」

「私にも責任があります。」

「しょうがないわね。私も行くわ」

「よし、じゃあ私はこれから魔力の位置を確認するわ。」

結構、時間がかかると思うから聡一君と袖月ちゃんは地球に戻って
もいいわよ？」

「こつちの世界にいてもいいですか？」

「いいけど……戻らなくてもだいじょうぶなの？」

「どうせ、やることないですから。袖月はどうする？」

「私も残ります」

「じゃあ前と同じ部屋を使っていいわよ……」

ああ、袖月ちゃんが使ってた部屋が今使えないから二人とも一緒に
部屋でいい？」

「え？」

「私はいいですよ」

「じゃあ、そういうことで。あとはゆっくりしてていいわよ」
「わかりました」

「……」
また柚月と同じ部屋に泊る事になるとは思わなかった……

「あ、聡一君だけちよつと待ってて」

氷璃の要望通り聡一だけが残る。

柚月と美羽は部屋に向かっっていく。

「聡一君、ちよつとお話があるんだけどいい？」

「いいですよ。でも、なんで俺だけ残したんですか？」

「話しの内容が内容だからよ。私の質問したことに全部ちゃんと答えてね」

「わかりました……」

「柚月ちゃんとは、どこまでいった？」

「は？」

何言ってるんだ、この人は。

でもそんなことを正直に言うわけにはいかない。

「だから、どこまいったの？」

呼び方も変わってみたいだから、なにかあったのかなーって

「ありませんよー！」

「なんで？柚月ちゃんのこと好きなんじゃないの？」

「それは……」

「じゃあ今日がんばってね。せっかく同じ部屋にしてあげたんだから」

「……」

「もう部屋に行っていていいわよ。なにか進展あったら教えてねー」

「いやです」

少し怒り気味に言った。

それなのに氷璃は笑顔のままだ。

楽しんでるのだろうか……

よくわからないが、なぜか氷璃の表情から悪意は感じれなかった。

純粹に聡一と柚月のことを想っているのだろう。

聡一は階段を上り部屋に戻る。

ガチャ

「あ、聡一君やっと戻って来た。なんのお話だった？」

「なんでもないよ……」

あの会話の内容をそのまま言ったら、俺が困りそうだ。

「なーんか怪しい……まあいいや。暇だから、なんかしようよ」

「なにする？」

「トランプ」

「懐かしいな。いいけど二人でやってもおもしろくないよな？」

「じゃあ美羽さんを誘おうよ」

「そういえばトランプ持ってきてるの？」

「うん。じゃあ美羽さん呼んでくるねー」

柚月が部屋から出ていく。

「トランプなんていつぶりだろう……」

ベッドの上にあるトランプをケースから出して眺めてみる。

カードはあまり傷ついておらず新品のような感じだ。

「聡一君、美羽さんつれてきたよー」

「うん」

「私ルール知らないわよ」

「大丈夫。教えるから」

そう言くと柚月はカードを配り始める。

「どうすればいいの?」

「まあ、配ったカード見て」

「すごい!キレイな絵、描いてあるんだ」

「うん。その絵が重要なんですよ」

「なんのゲームやんの?」

「大富豪に決まってるじゃん!」

「いきなり難しくないか?普通、初めはババ抜きとか……」

「じゃあ、そうする?」

「そうだろ」

「えーと……ババ抜きってなに?」

「ジョーカーを最後に持っている人が負けっていうルールです」

「ジョーカーって、なに?」

「これですよ」

聡一は自分の持っていたジョーカーを見せる。

「これ?なんか他のと比べて派手じゃない?」

「そうです。で、これを最後に持っていた人が負けです。」

「じゃあ。やってみましょうか。聡一君からスタートで……」

「ちょっと待って。美羽さん、まだ出してないから」

「なにすればいいの?」

「同じ数字のカードを出せばいいんです」

「どういうこと?」

美羽は二枚のカードを出す。

「そうです」

「これとこれと同じ?」

美羽はクイーンのカード二枚を見せている。

「はい。これは似てるやつがあるので気をつけてくださいね。」

上の端のところに記号が同じやつが同じ数字です」

「大体わかったわ。このあとはどうするの？」

「相手に手札を見せないようにして、お互いにひきあいます。

今は聡一君の番なので一枚ひかせてください」

「わかったわ」

美羽は手札を聡一の方へ近づける。

そして、その中から一枚選んでカードをひく。

「こつやってひいて、

手札の中に同じ数字のカードがあったら最初と同じように出してください」

「結構、簡単なルールね。次は？」

「私の手札から一枚ひいてください」

「……」

美羽は無言のまま袖月の手札を一枚ひく。

何度も繰り返し返しているが袖月の手札しか減っていない。

「やった！あがり！」

袖月が最後の二枚を出す。

「ちよつと待て。始めてから俺の手札、一枚も減ってないぞ？」

「私も……」

「え？どういうこと？」

「知らないけど、お前なんかしたよな？」

「なにもしてないけど？」

「まあ、いいわ。続けましょう。袖月ちゃんがそんなことするとは思えないしね」

「そうですね」

ババ抜きは二人になれば一回ひくことに手札が減っていく。

ジョーカーをひかなければ……

美羽は覚えたばかりだというのに聡一とまともに戦えている。

とはいっても、ただの運……

「どう？二人になったときの心理戦は？」

袖月が言うには運ではないらしい。

心理戦……もしかすると最初から聡一と美羽の手札が減らなかったのは

柚月の圧倒的な心理戦の強さのせいなのかもしれない。

「そんなものねーよ。ただの運だろ？」

聡一は美羽の手札から一枚ひく。

「あ！」

ジョーカーをひいてしまった。

美羽が少し笑っているように見える。

「もしかして、これも心理？」

「そうよ。私の番ね」

美羽が聡一の手札をひく。

これでジョーカーではないほうをひかれると聡一の負けだ。

「やったー！」

美羽が最後の一枚を出す。

「聡一君、初めてトランプやった人に負けるってどういうこと？」

「いや……運だろ……」

「実力だよ？じゃあ次のゲームで美羽さんに勝ってね」

「わかったよ……やるゲームは？」

「七並べは？」

「美羽さん、ルールわからないだろ……」

「教えながらも大丈夫だよ」

「私なら大丈夫よ」

「じゃ、始めますか」

柚月はカードの中から七を集め縦に並べる。

「私からでいい？」

「いいよ」

柚月はスペードの六を出す。

そして聡一がダイヤの八を出す。

「どうすればいいの？」

「続いている数字のカードを同じ絵のところに出せばいいんですよ。」

ジョーカーは自分の持っているカードが出る場所に置いたらダメですよ」

「わかったわ」

美羽はスペードの五を出した。

この後は順調に進んで行く。

「クローバーの十、止めてるの誰だよ」

クローバーの十の位置にはジョーカーが置かれている。

手札の枚数は聡一が二枚、柚月が一枚、美羽が一枚だ。

「私だよ」

柚月がジョーカーを取り、クローバーの十を置く。

そして聡一がクローバーの十一、美羽が十二と置く。

「はい、これで聡一君最下位だね」

最後の一枚……クローバーの十三の位置にジョーカーを置き、手札がなくなる。

「柚月……俺が負けるようになってないか？」

「うん」

「……」

ここでもなにも言い返せないのが情けない。

「でもイカサマはしてないよ」

「イカサマしなくても俺を最下位にできるのかよ……」

「うん。聡一君のやりたいことなんて、まるわかりだよ」

「……………」
なんか嬉しい気がする……のは聡一が意識し過ぎているだけなのかもしれない。

「聡一君、顔赤いよ」

「なってますんよ……」

美羽に言われたが柚月はなにも気にしていないらしい。

いつもどおりの笑顔のままだ。

「次はなににする？今度は真剣勝負で」

「わかった」

「今度は聡一君が決めてよ」

「うーん……」

「ねえ、二人とも今度はこっちの世界の遊びをしない？」

「やってみたいです！」

「私も！」

魔法使いがする遊びというだけで、なんとなく楽しそうだ。

「じゃあ、持ってくるからちょっと待ってて」

美羽は部屋から出ていく。

「どんな遊びなのかな？」

「わかんないけど、楽しそうだよな」

「うん。魔法が使える人がする遊びってことは、もっとすごいことだよ」

ガチャ

「おまたせ」

部屋に入って来た美羽は一枚の板を持っている。

「これですか？」

「うん。準備するから、ちょっと待ってて」

そう言つと美羽は板を床に置き、準備を始める。

「始まるよ」

板の真ん中に白い水晶がある。

その水晶が光るとともに、その中に吸い込まれていく。

「ここは？」

「さっきの板の上よ」

「え？小さくなったってことですか？」

「そう。これはそういう遊びだから。はい、これ持って」

美羽は聡一と袖月に刀を差し出している。

「どうするんですか？」

「戦うのよ。死んだらもとの大きさに戻るから。痛みも感じないし」

「もしかして、これってそういう遊びですか？」

「そうよ。魔法で戦うことはあっても武器を使って戦うことはめつてにないからね。」

戦う練習にもなるし、楽しめるしいんじゃない？」

「これって遊びじゃないよな……」

「いいんじゃない？楽しそうだし。それで誰と戦えばいいんですか？」

「ああ、このゲームは日本の合戦を見本にしてるから今から敵がたくさん攻めてくるわよ。」

だから、その敵を倒していけばいいの」

「わかりました。武器はこれ以外にないんですか？」

「あるけど、多分これが一番使いやすいと思うよ」

「わかりました」

「……」

「聡一君、もしかして怖いの？」

痛みも感じないし死んでも大丈夫なんだよ？」

「いや、楽しそうだなーって思ってる」

そのとき前のほうが騒がしくなってくる。

そして、たくさんの武器を持った人たちがこっちに向かって走ってくるのがわかる。

「本当に合戦みたいだ……」

「そうよ。じゃあ戦うわよ。魔法は使えないからね」

美羽さんは慣れているようだ。

相手の攻撃を最低限の動きで避けて攻撃を正確に当てている。

敵に攻撃があたっても血が出ないようだ。

しかし攻撃を受けた敵は倒れていく。

「美羽さん、すごいね」

柚月も剣を使って攻撃を始める。

攻撃を避ける動きに少し無駄があるように見えるがちゃんと避けられている。

「魔法つかえるようになっただけで動体視力も上がるのかよ……」
これが正しいかどうかはわからないが柚月を見れば、なんとなくそんな気がする。

聡一は遊びなのだから楽しもうと思いい、剣を握る。
敵の攻撃を見て気付いたが本当に動体視力が上がっている。
どういいう原理なのかはわからないが、とにかく相手の動きがよくわかる。

そのおかげで避ける、攻撃をするを何度も繰り返すことができる。
魔法が使えないのにここまで戦えたのは予想外だった。

敵を全員無傷で倒すまでに三十分ほどかかったと思うが実際はもっとかかっていただろう。

「二人とも強いのね」

「魔法が使えるようになると身体能力があがるんですか？」

「そんなことないわよ」

「でも……すごく戦いやすかったんですけど……」

「それは聡一君が強くなつたからじゃないの？」

「本当にそれだけですか？」

「まあ地球から来たんだから例外はあるかもね。柚月ちゃんは？」

「私もです」

「そう……もう終わりだし戻るわよ？」

「わかりました」

また水晶が光る。

そして気がつく、もとの部屋に戻っていた。

「そろそろ魔力の位置の分析も終わったと思うし氷璃のところに行きましようか」

美羽が部屋から出る。

そのあとをついていくように聡一と柚月も部屋から出る。

「どう？場所わかった？」

「大体の位置はわかったわ。明日から回収を始めましょうか」
「わかりました」

「じゃあ今日は、もうご飯食べて寝ましょう」
氷璃はキッチンに向かい夕食の準備を始める。
それを見た柚月と美羽もキッチンへ。

「あのー俺もなにか手伝えませんか？」

「聡一君は、ゆっくりしてて」

「……」

料理ができないというわけではないのだが……
というか結構、得意だが言葉に甘えることにした。
一人で椅子に座って夕食が完成するのを待つ。

「お待たせ」

柚月、美羽、氷璃の三人がテーブルに料理を並べる。

「いただきます」

テーブルに並べてある料理を食べていく。

「魔力の塊って、この近くにあるんですか？」

「一つだけね。歩いて十分くらいのところよ」

「それ以外に何個あるんですか？」

「正確な数はわからないけど、多分十個くらいあるわ」

「そんなにあるんですか……」

「うん。それも全部、どうすればいいかわからない状態で回収しなくちゃいけないからね」

「結構、大変そうだね」

「でも俺たちが持ちこんだものなんだからなんとかしないとね」

「うん」

袖月がとても真剣な顔をしている。
聡一たちは夕食を食べ終えて入浴を済ませた後、それぞれの部屋に戻り寝ることにした。

「そういえば、この部屋ベッド一つしかないね」

「俺は寝袋で寝るから袖月が使っていていいよ」

部屋の端には山奥に泊っていた時の道具が置かれている。

「でも、それじゃ聡一君に悪いよ……」

「そうは言っても一緒に寝るわけにはいかないだろ？」

「私は……いいよ……？」

袖月は顔を赤くしている。

ここで断れないようだったダメだ！

自分に言い聞かせ、答える。

「わかった。そうしよう」

「え？いいの？」

「え？」

なにを言ってるんだ……

断るはずじゃなかったのか……

「じゃあ私、もう寝るから。聡一君も早く寝なよ？」

「う、うん……」

確かに早く寝なくては明日、困る。

しかし袖月と同じベッドで寝るのは少し……

あー、もう！

迷っていても仕方ない。

覚悟を決め、袖月の隣に寝る。

「やっと来てくれた」

袖月がとても嬉しそうにしている……

天使のようなかわいさだが今は悪魔の笑顔でしかない……

袖月の体は聡一の方を向いている。

ベッドが意外と大きかったため、体はそこまで近いわけではない。

耳元でスー、スーと袖月が息をする音が聞こえている。

袖月の顔を見ると、もうすでに目を閉じている。

「もう寝たのか。寝顔もかわいいな……」

そう思つて袖月の頭を撫でる。

「くすぐつたいよー」

「え？起きてたの？」

「うん」

これはヤバい……

寝ているからといって、調子に乗つた聡一が悪かつた。

絶対にひかれたら……

明日から袖月といるのが気まづくなりそうだ。

それも近くにいるのは男が聡一一人だけ。

このことが美羽と氷璃が知れば、その二人にも嫌われるだろう。

「また顔赤くしてる。聡一君、かわいいね」

なんで暗いのに顔の色が見えるんだよ……

まあ、事実なのだが。

「正直俺のこと、ひいたろ？」

「ぜーんぜん。嬉しかったし」

「え？」

「本当だよ。私、聡一君のこと好きだから……」

「それって……」

「……私と付き合つてくれる？」

「うん……」

「やったー 私、聡一君が初恋の相手だったんだよ？」

「俺も袖月が初めてかな……」

「お互い様だね」

袖月は布団の中で聡一の手を握る。

「今日は眠れなさそうだなー。すごく嬉しいもん……

でも寝なくちゃいけないよね。明日、大変だし」

「そうだな……袖月、おやすみ……」

「おやすみなさい」

聡一と袖月はお互いの手を握ったまま眠りについた……

このとき聡一と袖月の部屋の外に一人の人がいた。

「作戦、成功！ 袖月ちゃんおめでとう」

「氷璃、盗み聞きとかやめなよ」

「いいじゃない。私がこうなるように手助けしたんだから」

「そうだけど……」

「それにしても地球の魔法使ってすごいね」

「なにが？」

「戦いも強いし……」

「他になにかあった？」

「「恋の魔法」よ」

「氷璃もそういうこと言うんだ……」

「なに？おかしかった？」

「だって、絶対に恋とか無縁の生活してるでしょ？」

「まあね。でも……」

「でも、なによ？」

「なんでもないわ。じゃあ私たちも寝ましようか」

「そうね」

「明日からよろしくね、最高の地球の魔法使いの聡一君と袖月ちゃん」

「最高の……ね……私もそう思うわ」

「じゃあ、行きますか」

act 1 一つ目の魔力

「……………」
聡一は次の日の朝、起きると左腕になにか重いものが乗っているように気がした。

そこを見てみると柚月が聡一の腕に腕を絡ませるように寝ていた。起きあげたいのだが柚月を起こすわけにもいかないし……………」
「ううん……………」

柚月はまだ起きそうにない。

コンコン

「聡一君ー」

ドアをノックする音と美羽の声が聞こえてくる。

「すいません。今、起きます」

「わかったわ。朝ごはん、できてるから早く来てね」

「わかりました」

美羽が階段を下りていく音が聞こえた。

「柚月、起きろ」

柚月の肩を揺する。

「うーん……………もう少し……………」

「ダメ。もう起きろって……………」

「ほえ！？……………あ、聡一君……………」

「やっと起きた……………おはよう」

「おはよう……………」

「ほら、もう行くぞ」

「うん……………あっ！ごめん……………」

柚月は聡一の腕を放す。

「早く。美羽さんと氷璃さんが待ってるから」

「うん」

聡一がベッドから出て、柚月もベッドから出る。

そして一階へと下りる。

「やっと起きてきた。すぐ出発するからご飯食べちゃって」

「はい」

椅子に座りテーブルの上に並んでいる料理を食べる。

「ごちそうさま」

聡一と柚月は十分ほどで食べ終えて出発する準備をする。

……準備とは言ってもなにもすることはない。

「もう出発するけど準備いい？」

「はい」

「じゃあ、行くわよ」

氷璃についていき皆外へ出る。

「場所はわかかってるから、私についてきてね」

「わかりました」

氷璃が歩き始め、その後を美羽、柚月、聡一の順で歩いていく。

氷璃は街から出て森の中に入っていく。

「この置くだと思うから、すぐね」

迷いなくどんどん進んで行く。

この森は魔法を使えるようになったばかりのころ何度も魔法の特訓をしていた。

「なんか、この森が懐かしく感じるな」

「そうだね」

「もう、つくわよ」

「本当に近いですね」

正面の方には少し開けた場所があるようだ。

木々の生え方からそのことがわかる。

そして開けた場所に出ると、前に見たものより小さいが魔力の塊があった。

「これが例のものらしいわね……」

「俺が吸収します」

「待つて。なにが起きるかわからないわよ」

「わかってます」

聡一は魔力の塊に近づいていき吸収を始めようとする。

「お前は地球の魔法使いか」

どこからか声が聞こえてくる。

「なによ、この声……」

「私は魔力だ。この世界で最も必要とされるもの……」

しかし、今は違う。私がこのままここに残り続けたらこの世界に悪影響を及ぼすだろう」

「だから吸収しに来たんだよ」

聡一は魔力の塊に手をかざす。

「そんなことでは無駄だ。地球の魔法使いよ、お前に試練を与えよう……」

魔力の塊は光始める。

そして聡一と袖月だけが光の中へ吸い込まれていく。

「ここは……」

「聡一君、大丈夫？」

「うん。それより、なにをすればこの魔力の塊を吸収できるんだ？」

「お前たちに私を吸収できるはずがない。」

私は「魔力」だ。「魔力」は魔法の源。さあ、どのように戦う！」

目の前に置かれていた巨大な黒い人間の石像が動き始める。

「これと戦うのか……」

「さあ、かかってこい！」

「やるしかないのか」

聡一は魔法の合成を始める。

黒い球体を作り出し石像に向かって放つ。

「魔法では私は倒せない」

今まで跳ね返されたことのなかった黒い球体が簡単に跳ね返される。

それも敵は腕を軽く振っただけだ。

「どうなってんだ？」

「わからいわ。でも戦わないと……」

袖月も魔法を使い石像の動きを止めようとする。

「無駄だ！」

……早い！

敵はただ腕を振り下ろしただけのようだがその巨体から繰り出される攻撃は、

とても早く威力もある。

その攻撃をかるうじて避けるものの、敵はただ腕を振り下ろしただけの攻撃。

ここで苦戦しているようでは勝つなど不可能なことだ。

act 2 武器

「柚月、なにか武器になるようなものないか？」

「ないよ……」

「どうすればいいんだよ……」

「これなら、あるけど……」

柚月がポケットから取り出したものはトランプだった。

「武器には……ならないよな……」

「そうだよね……」

「悪いがお前らに勝ち目はない。

魔法の効果が無いということは、武器が壊れているのと同じ。

そして私の体は石だ。素手では壊せるわけがないだろう」

「どうすればいいんだよ……」

石像は、また腕を振り下ろそうとする。

今度の狙いは柚月のようだ。

美羽と一緒にゲームをやったときと同じように身軽な動きで避ける。

あのゲームは実戦同様の経験ができるらしい。

「避けても無駄だ。攻撃の意味がないのだからお前らに勝ち目は無い。」

素直に負けを認める。」

「そんなわけにはいかないんだよ！柚月、トランプ貸してくれ」

「いいけど、どうするの？」

「もしかしたら、なにかできるかもしれないだろ」

聡一は柚月からトランプのケースを受け取る。

「そんな紙きれでなにができるというのだ？」

今度の攻撃は石像も本気だ。

肩の位置に構えられた拳が一気に聡一に向かって飛んでいく。

その攻撃をギリギリの所で避けたが、地面に当たったときに飛んだ瓦礫に当たってしまう。

「ほら、もう終わりだろ？」

そのまま石像は腕を横に振る。

その攻撃は聡一に直撃する。

聡一は結構な距離を飛んでいき地面に叩きつけられる。

「聡一君！大丈夫！」

柚月は聡一のほうへ駆け寄ろうとする。

「あいつはもう駄目だよ。さあ、次はお前の番だ！」

石像の攻撃はとても強力なものだったが、柚月は全てギリギリで避けている。

こんな攻撃を受けてしまったら、一発で……

聡一君は大丈夫だったのかな……

柚月は聡一の方を見る。

聡一は少し無理しているような動きで立ちあがろうとする。

よかった。大丈夫みたい。でも今は集中しないと……

柚月は、もう一度石像の攻撃に集中して動き続ける。

「動きだけは早いようだな。しかし無駄だ！」

疲れが溜まってくればいずれ動けなくなる！そうならば私の勝ちだ」

確かに石像の言うとおりだ。

しかし柚月は聡一になにか作戦があると信じている。

だから、できるだけ聡一が立ちあがったことが気づかれないように

……

そして時間を稼ぐために柚月は動き続ける。

「柚月！よく耐えてくれた。もう終わりだ！」

聡一は魔法を合成し重力を発生させ二枚のトラップで石像の腕を挟む。

二枚のトラップは、どんどん石像の腕にめり込んで行く。

「なにをした？」

「お前には魔法が効かないんだろ？」

なら魔法の力を利用してトラップでお前の腕を砕こうと思ったんだ
よ」

「なるほど……直接、魔法で攻撃をしていない……よく考えたものだ」

「関心してる場合じゃねーぞ？腕が砕かれそうなんだからな？」

「わかっている」

トランプはさらに腕にめり込んで行き、ついに腕を砕いた。

「聡一君、すごい！」

「いや、でも無駄らしいな……」

砕けた腕の部分の破片は地面に落ちると浮いていき、もう一度腕になる。

「さあ、簡単に私は倒せないぞ！どうするー！」

「一気に決着をつけるだけだ！」

聡一はもう一度、魔法を合成させる。

今度は二枚のトランプなどではない。

五十四枚、全てのトランプを使い石像の体中を包み込む。

「これで終わりだ！」

そして腕を砕いた時と同じように全身が砕け散った……

石像がいた場所に残ったのは破片のみ。

跡形もなく砕けたようだ。

「これが地球の魔法使いか……私の負けだ……」

石像の破片は光初め一か所に集まる。

「聡一君、吸収できるんじゃない？」

「そうだな」

光に手をかざすと簡単に吸収することができた。

「これで、この魔力の塊は終わり？」

「そうみたいだな。どうやら、もとに戻るみたいだぞ」

魔力の塊の中に吸い込まれたときと同じように、まわりが光る。

そして気がつくとも森の中に戻っていた。

「聡一君、大丈夫だった？」

「はい。黒い石像と戦わされました」

「それが魔力の本当の姿だったってことね……」

「そうなんですか？」

「多分そうよ」

「そういえば聡一君、なんでトランプだけであの石像に勝てると思っただの？」

「ああ、あれは石像が地面を殴ったときに石像の手に傷がついたんだよ。」

俺が使った魔法を弾いたときは無傷だったのにね。

それで物理的な攻撃だったら通用するかなって思ってた……」

「よくトランプで挟んだだけで壊せたわね……」

「なんか、あの石像すごく物理攻撃に弱いみたいだったからさ。

トランプとはいっても、押す力が大きければ物をつぶすことくらいできるでしょ」

「まあ、あれだけ薄かったら簡単には折れないしね」

「そういうこと」

「えーと……なにがあったかわからない私たちには全然わからないんですけど……」

「すいません。そういえば俺たちが魔力の塊の中にいた間、なにがありましたか？」

「それが、なにもなかったのよね」

「そうですね……まだ時間もあるみたいですし、次の魔力の場所に行きませんか？」

「そうね。回収するのは早い方がいいからね」

氷璃は次の魔力の塊の位置も把握しているらしく、歩き始める。

「次の魔力の位置までは結構あるけどいい？」

「大丈夫です」

「じゃあ、このまま進んで行くわよ」

聡一、柚月、美羽の三人は氷璃についていき次の魔力の場所へと向かう。

act 3 昼食

「あの氷璃さん……」

「なに？」

「次からどんな戦いになるかわからないので武器があったほうがいいと思うんですけど」

「確かにそうね。じゃあ一回戻る？」

「えーここまで来たのに？」

「私は構いませんよ」

「じゃあ三対一だから一回戻りましょうか」

「わかったわよ……」

美羽はあまり乗り気ではないみたいだが来た道を引き返していく。

そしてさっき吸収した魔力があつた場所を通る。

その場所は普通の状態に戻っている。

一度吸収してしまえば、もう戻る事はないのだろう。

「聡一君、心配しなくても大丈夫よ。」

一度吸収した魔力は、もう聡一君だけのものなんだから

「はい」

そのまま来た道を引き返していき、美羽の家につく。

「時間もちようどお昼だし、ご飯も食べていきましようか」

「そうですね」

「じゃあ私、買い物に行つてくるから」

氷璃はそう言うと店がある方向へ歩いていく。

「あーあれだけ歩いたら疲れたなーもう家の中入ろうよ」

そう言つて美羽は玄関の鍵を開け家の中に入っていく。

「ふう」

家の中に入ると美羽はすぐに椅子に座る。

「二人とも元気ねー」

「そんなことありませんよ。俺だって疲れました」

「私事です」

「じゃあ氷璃が返ってくるまでゆっくりしてましょ」

「はい」

聡一と柚月も椅子に座り氷璃の帰りを待つ。

「ただいまー」

氷璃が帰って来た。

右手にだけ買ったものが入っている袋を持っている。

「今すぐ作るから。美羽、手伝って」

「えー 疲れてるし……」

「俺がやります」

「え？聡一君が？」

「はい。地球では一人暮らしなので料理くらいできます」

「うーん……じゃあ手伝ってもらおうかな……」

「はい」

「私もやります」

「柚月は休んでていいよ」

「でも……」

「大丈夫だつて。氷璃さん、始めましょ」

「そうね。じゃあ二人とも少し待っててね」

聡一と氷璃はキッチンに向かう。

「聡一君、本当に料理できるの？」

「できますよ。なに作るんですか？」

「うーん……こっちの世界の料理なんだけど、私が考えたものだから名前はないわ」

「そうですか……なにをすればいいですか？」

「この野菜を切って」

「どんなふうにですか？」

「任せるわ」

「は？」

「は？」

「この料理はどんな野菜の切り方でも成り立つから、聡一君の好き

な切り方をしているわ」

「わかりました」

聡一は包丁を握り野菜を切り始める。

「そういえば昨日の夜どうだった？」

「え？」

「せっかく一緒に一緒に部屋にしてあげたんだから、なんかあったでしょう？」

「なにもありませんよ！」

「そう……」

私は全部、知ってるんだけどね

「なにか言いましたか？」

「うん？なんでもないよ」

「切り終わりましたよ」

「ありがとう」

「次はなにをすればいいですか？」

「うーん……あとは、なにもないわね。聡一君もむこうに行っていいわよ」

「そうですね……わかりました」

聡一は袖月と美羽のいるリビングへ戻る。

「あれ？もう終わったの？」

「氷璃さんに、もうやることないから戻ってって言われました」

「じゃあ、もうできるんだ」

「多分そうですね」

「氷璃さん、なに作るって言ってた？」

「オリジナル料理を作るとは言ってたけど、どんな料理かはわからない」

「へー どんな料理だろうね」

「聡一君ー 運ぶの手伝ってー」

「はい。今行きます」

もう一度キッチンに向かう。

act 4 滝の魔力

「氷璃さん……これって……」

「そうよ。聡一君もよく知っている野菜炒めよ」

「そうならそうって言うてくさいよ」

「聡一君がどんな切り方するのかなーって思ってたさ」

「なんですか……それ……」

「別にいいじゃない。ちゃんとした形になったんだから」

「そうですけど……」

「ほら、袖月ちゃんも美羽も待つてるんだから早く運んで」

「わかりました……」

聡一は四人分の野菜炒めを運ぶ。

そして氷璃はパンをテーブルの上に出す。

「なんか不思議な組み合わせですね」

「そう？こつちの世界では普通よ。じゃあ、食べましょうか」

「いただきます」

野菜炒めの味は地球のものとあまり変わらない。

使っている野菜は違うのに不思議なものだ。

「そういえば、どんな武器があるんですか？」

「ああ、ちよつと待つてて」

美羽は食事の途中にもかかわらず武器を取りに行く。

「こつちのしかないわよ」

美羽が持つて来たものは短剣、刀、弓矢……

「あのー今さらですけど、なんでこんなものがあるんですか？」

「護身用だけど？」

「魔法使えるんだから大丈夫なんじゃないですか？」

「そうだけど……一応ね。いつ魔法が使えなくなるかもわからない

し」

「そんなことがあるんですか？」

「あるわよ。魔法使いのスランプみたいなものかな」

「そうなんですか……」

「で、どの武器持っていく？」

「うーん……俺はなんでもいいや。柚月は？」

「私は、この短剣がいいかな」

「じゃあ、弓矢も持っていけば？」

「なんで？」

「攻撃範囲が狭いから。俺は、刀だけでいいや」

「じゃあ、これでオーケーね」

「美羽さんと氷璃さんは持たないんですか？」

「私たちがいいわ。使い慣れてないし。ほら、早く食べちゃって」

「あ、すいません」

聡一と柚月はテーブルの上に並んでいるパンと野菜炒めを少し急いで食べる。

そして食器を片づけて、もう一度魔力を回収するために出発する。

「あー 疲れたー」

「美羽、うるさい」

「氷璃に言われたくないわよ」

「運動不足なんだから少しくらい耐えなさいよ」

「はいはい。氷璃は厳しいねー」

「聡一君と柚月ちゃんは大丈夫？」

「大丈夫です」

「はー 若いつていいわねー」

「あんただって言うほど歳とって無いでしょ」

「そうだけどさー」

「まあ、いいわ。もう少しでつくから我慢して」

「わかりましたよー」

この森はとても広い。
そしてあたりは木々に覆われているため、まわりの様子がよくわからない。

足下も植物が生い茂り、歩きづらい。

「おかしいわね。私の予想だと、このあたりなんだけど……」

「なにもないですね」

「もしかして近くに滝があるんですか？」

「なんで？」

「水が勢いよく流れる音が聞こえませんか？」

「……確かに」

「本当だ」

耳をすませると、聞こえてくる音からはとても大きい滝……

もしくは流れの速い川があることがわかる。

「もしかしたら、そこに魔力の塊があるかもしれないわね。行ってみましょう」

聡一たちは音の聞こえる方へ進んで行く。

音の発生源に近づくにつれて音の大きさは増していく。

それは予想以上で他の人が話していることが聞こえなくなるほどだ。

「すごい音ね」

「なにか言いましたか？」

「えー？ なにー？」

話しても、なかなか聞こえない。

もう少しで音の発生源につくはずだと思った時、前が明るく見える。

「あれ？ もう森終わり？」

明るく見えたのは一部、木が生えていない場所があったからだ。

そして、木のない場所に行くとも目の前には巨大な滝がある。

この滝が音を発していたようだ。

しかし、なにか様子がおかしい。

崖の上から滝が流れているのだが、

真ん中に一か所だけ岩もないのに水が流れていない場所がある。

「あれ、どうなってるの？」

「え？なに？」

ここまで近くに来ると喋っていることはわかってても、
どんなことを言っているのかもわからない。

そのとき滝の流れが止まる。

「……………！どういうことだよ」

水の流れが止まったおかげで声は聞こえるようになった。

「もしかして、ここに魔力の塊があるの？」

「わからないわ。でも……………」

確かににもないのに流れが止まるなどおかしなことだ。

それも今まで流れていた水は空中に止まったままだ。

そして滝の中心が光始める。

「やっぱり、ここに魔力の塊があったのね……………」

その光は少しずつ聡一たちのいる方へ近づいてくる。

「これが二つ目の魔力の塊……………」

「どうやら、あなたたちが私たち魔力を回収しているようね」

「この魔力も喋るのかよ……………」

今回の魔力の塊の声は女性のものだ。

「あなたたちは……………悪そうな人じゃないわね」

「私たちはあなたを回収しなくてはいけないんです」

「わかっているわ。私たちがみたいに外部から持ち込まれた魔力をその
ままにしておいたら、

この世界にどんな悪影響が起きるかわからないものね」

「そうです。だから……………」

「私は別にかまわないわ。」

「じゃあ……………」

「ただし！私を吸収した人には私自身……………つまり、この魔力自体の
力を持つてもらおうわ」

「どういうことですか？」

「さあ、どういうことだろうね」

「教えてください」

「私と戦って勝ったらいいわよ」

「わかりました」

「じゃあ、ここで戦うわけにもいかないしちょっと来てもらおうわ」
魔力の塊が光る。

そして聡一たち全員が魔力の中に吸い込まれる。

act 5 時の魔法

「あの、氷璃さん一ついいですか？」

「なに？」

「魔力の塊と戦うつてことは、その魔力の中に入って戦うつてことですか？」

「多分そういうことね。一つ目もそうだったし今回もそうだからね」

「さあて、やっと始められるわね」

「なにをすればいいんですか？」

「私は時を操る魔力よ。さっき言った私自身を持つってというのは、所持者自身の時間を狂わせるということ。

もし、あなたたちが私を回収しに来なかつたらこの世界の時間は狂い始めて

酷いことになっていたでしょうね。

だからあなたたちには時……つまり私自身と戦ってもらわ

「どんな戦いになるんだ……」

「聡一君、気をつけてね。今までとは格が違うわ」

「わかつてます。時を操る魔法……なにをされるんだ……」

「まずは私が行ってくるわ。相手のことがわからないと戦えないからな」

魔力の塊の姿は白い球体のままだ。

その球体にむかつて氷璃は氷の塊を飛ばす。

「氷の魔法か……おもしろいわね。でも無駄よ」

魔力の言うとおりらしい。

氷璃の作り出した氷は水になって地面に落ちていく。

「！？なによ、あの魔法……あんなの見たことないわ」

「次は私が……」

袖月は黒い球体の魔法を使う。

黒い球体は魔力に向かって飛んでいく。

しかし途中で消えてしまう。

「今度は魔法が消された!？」

「あなたたちに私の魔法をどうすれば突破できるかわかる?」

「風なら、どうなるのよ!」

美羽は風を発生させる。

「それも無駄だよ」

まっすぐに吹いていた風の向きが一気に変わり魔力がある方向とは全く違う方向に行く。

「聡一君!あとは君しかいないわ。直接、吸収してみて」

「わかりました」

聡一は走って魔力に近づいていく。

「今度は直接来たか!でも無駄なんだよね」

聡一の動きは一気に遅くなり魔力が高い位置に上がっていく。

「浮いてたら攻撃も当たらない……」

「ダメだ……どうしていいか全然わからないわ……」

「時を操る相手に簡単に勝てると思った?」

「……そうだ!聡一君、さっき吸収した魔力使える?」

「使えますけど……それがどうかしたんですか?」

「あの魔力が使っている魔法が時を操る魔法だとして、

さっき吸収した魔力が魔法を受けないんだとしたら……」

「そういうことですね!わかりました」

「なにか気づいたみたいね」

「はい。次は絶対に止められませんかよ」

聡一はもう一度さつきと同じように魔力に向かって走っていく。

「なるほどね……でも君を止める以外にも避ける方法ならあるんだよ」

魔力が動く速度がとても速くなり聡一の攻撃を避ける。

「あの魔法……自分にも使えるのか……」

どうすればいいんだよ!攻撃が当たらないんじゃない……」

攻撃が当たらないって……前にもあったよな……」

「聡一君も思い出した？あいつの戦ったときのこと」

「うん。魔法同士で相殺させたんだっけ？」

「そうよ。今回もあれが使えるのかな？」

「ためしてみる？」

「うん」

「でも相手の魔法が「時間を操る」だから……」

進められるときは戻す魔法、戻されるときは巢める魔法じゃないと……」

「……やっぱり無理そう？」

「多分、無理だと思う。まず時間を操る魔法を使えないと……」

「そっか……」

「聡一君、柚月ちゃん気をつけて！」

「どうかしたんですか？」

「あいつは今まで攻めてこなかった……でも、ついにやる気になったみたいね」

魔力の方を見ると空中で左右に動いている。

そして通った場所には白い線ができ、通るたびに太くなっている。

「どんな攻撃が来るのよ……」

柚月は迷わず黒い球体を作り魔力の方へ放つ。

しかし今度は時間を操られたのではない。

白い線の中へ吸い込まれていく。

「また違う魔法に変わった！？」

「これは違う魔法なんかじゃないわよ。でも詳しいことを教えるわけにはいかない。

それを見破るのがあなたたちのするべきこと……」

できなければ次に戦うことになる魔力に勝つことなんて不可能よ」

「っていうことは……もしか、全ての魔力を回収するために

必要なことが一つ一つの魔力との戦いに隠されているとしたら

石像との戦いの中にヒントがあるってこと？」

「かもしれないけど……今は、まだわからない」

「じゃあ、どうすればいいのよ……」

「お悩みのようですねー 単純に考えてみなよ。すぐわかるから」
「くそ……」

「まあ、いいわ。とりあえず戦いを続けましょう」

魔力のまわりにある白い線が急激に太くなる。

そしてその中から白く光る鋭く尖ったものが見える。

「私も本気で殺しに行くわよ！」

魔力がそう言った瞬間、三個の鋭く尖った光が聡一たちに向かって放たれる。

それに素早く反応して氷璃が氷の盾を作る。

act 6 種明かし

「やっぱり戦いは、こうでなくちゃね」

氷璃の表情は楽しんでるように見える。

「私も本気でやろうかな」

あたりの気温が一気に下がる。

「ヤバ……聡一君、袖月ちゃん、氷璃から離れて!」

「え?」

「いいから!早く!」

「わ、わかりました」

聡一、袖月、美羽の三人は氷璃から離れる。

「なんで離れなくちゃいけないかったんですか?」

「氷璃が本気を出すって言ったら近くにいてるだけで凍え死ぬわよ」

「そんなに寒いんですか?」

「うん。氷璃は魔力の無駄をなくするよりも、

一度にたくさん魔力を使うからね。まわりにも影響が大きいのよ」

「そうなんですか……」

氷璃は氷の塊をいくつも作り出し、それを魔力に向かって放っている。

それに対して魔力は白い塊を……

二つの魔法は見事に相殺しているように見えるが氷璃のほうには、まだ余裕がある。

「あなた一人で本当に大丈夫?」

「あなたこそ魔力とはいえ、相当つらいんじゃない?」

「へー あなたには、そう見えるんだ……」

「なんで?」

氷璃の作り出した氷は次々と水になっていき地面を濡らしていく。

「忘れたの?私の魔法がなんだったか」

「そうだった……」「時を操る魔法」すごい魔法よね……」

「どうしたの？もう終わり？」

魔力はもう一度、白い塊を氷璃に向かって放つ。

「でも攻撃が私に当たるとは限らないわよ」

氷璃は攻撃が効かないのならば身を守る事に集中する。

「だから氷じゃダメだって」

氷璃の作り出した盾も水に変えられ地面を濡らしていく。

「時間を操るのと攻撃……同時にできるの……」

少し厳しそっだがなんとか攻撃を避ける。

「聡一君、柚月ちゃん、私たちも戦うわよ」

「はい」

「柚月ちゃん一気に攻めて！」

「わかりました」

柚月は離れた位置から魔力を狙って黒い球体を放つ。

「三対一に戻っても、あなたたちは勝ち方に気づけないと勝てないわよ？」

黒い球体は白い線の中へと吸い込まれていく。

「普通に攻めてもダメなら俺がやります！」

聡一は魔力の方へ走っていく。

「聡一君、魔力は浮いているのよ？どうするの」

「美羽さん！俺の体を風で浮かせてください！」

「そうということね。いくわよ」

美羽が発生させた強風が聡一の体を持ち上げる。

しかし美羽の魔法は風だ。

持ちあげられる重さには限界がある。

「氷璃！手伝って！」

「はいはい」

氷璃は美羽の魔法で浮いている聡一の足下に氷で足場を作る。

そこから聡一は魔力に向かって跳ぶ。

「私も手伝います！」

柚月の魔法も加わり聡一の体は魔力に向かって一直線に飛んでいく。

「そう来たかー でも無駄。私も動けるんだからね」
「させません！」

袖月は重力の発生地点を聡一と魔力の間にする。
これで同じ場所に聡一と魔力が引かれていく。

「あれ？これは、さすがにヤバいかも……」

「終わりですよ！全部、吸収しますから！」

魔力に触れる寸前で魔力の姿が消える。

「あれ？」

「でも、そんな簡単に吸収されるわけにはいかないんだよね」

「なんで!？」

「なんか、もう戦いにも飽きてきたし種明かししてあげるわ」

「なんだよ、それ……」

「私の魔法は時間を操る魔法なんかじゃないわ」

「は？」

「だから、私の魔法は時間を操ったんじゃないくて「魔力の状態」を変えたのよ」

「それで氷璃さんの氷の魔法は水になったって……」

「でも……私の風の魔法は……」

「それは気圧を変えただけよ。あと重力も簡単に弱めることが可能だし」

「なんていう最強魔法……」

「それがそうでもないのよね。使ったらすぐ疲れるし。」

それに私自身が魔力だから自分を強くできても、

自分が魔力じゃなかったら、なんの意味もないんだよ」

「それって、あなたが使ったら最強ですよね……」

「だから魔法を使ったら私は疲れるし、

自身の状態を変えるっていうことは体にも相当な負担がかかるのよね」

「そつえば、あなたの言っていた「勝つ方法」ってなんですか」

「え？私に魔法を使わせ続ければいいだけ。」

いずれ私は疲れて魔法を使えなくなる。

それに気付けなかった君たちは、あまり攻めてこなかったから……」
「それでつまらくなって、自分から戦いを終わりにしたっていうことですか？」

「終わってなんかいないわよ。まだ戦いを続けてもらうわ。」

私の魔法がなにかわかっただけで私に勝てると思ってるの？」

「私たちも、ずいぶんあまく見られたものね」

氷璃は、また氷の魔法を使う。

しかしそれも水に変えられしまう。

「そうそう。そうやって魔法を使って私が疲れるのを待てばいいのよ」

「聡一君、私たちが攻撃を続けるからあいつが疲れたらすぐに吸収してね」

「わかりました」

聡一にそう言うのと袖月、美羽、氷璃の三人が魔力に対して攻撃魔法を使い続ける。

やっぱり使った魔法の状態は変化させられ全ての攻撃が魔力に当たっていない。

聡一も後ろから少しずつ攻撃魔法を使っている。

しかし、その攻撃も魔力には当たっていない。

「なんで？全然、疲れてないじゃん……」

act 7 状態変化魔法

魔力の動きは全く変わっていない。

疲れが溜まり、動きが遅くなった所を聡一が吸収する予定だったが、魔力が疲れる前に、こちらが疲れてしまいそうだ。

「袖月ちゃん、もうつらそうだから休んでいいわよ」

「大丈夫です……」

「あれ？もしかしてあなたたちのほうが先に疲れちゃうの？」

「そんなわけではないですよ……」

美羽はつらそうな表情をしているが魔法を使い続けている。

「二人とも、少し休んで」

「まだ大丈夫だって……」

「いいから休んで！三人同時に魔法を使えなくなったら終わりだから！」

「わ、わかったよ……」

氷璃がこんなに声を荒げたところを見たのは初めてだ。

その姿はとても恐ろしいものだ。

秘めている魔法の力……それを感じさせられる。

袖月と美羽は言われたとおり魔力から離れていく。

「あなた一人で大丈夫なの？」

「大丈夫なわけではないですよ……でも、こうしないと……」

「へー あなた結構、魔法に詳しいのね」

氷璃の魔法は、さっきより強力なものになっている。

一気に魔力の体力を奪うつもりなのだろう。

氷璃の使っている強力な魔法ですら魔力は簡単に水に変えていってしまう。

「氷璃があんなに苦戦するなんて……」

「あの魔力には疲れが無いんじゃないんですか？」

「それはないと思う。あの魔力が嘘をつくとは思えないからな」

「そうだけど……」

「氷璃さん……一人で大丈夫かな……」

「多分、一人であいつの体力を全部奪うのは厳しいと思うわ」

「確かにそうですね……」

「三人で同時に攻めても、全然平気みたいだったし……」

「あれ？魔力の動き、少し遅くなってない？」

「気のせいだろ」

「絶対、遅くなってるとして」

聡一は魔力と直接戦っていないので気づけていないのかもしれないが魔力の動きが遅くなっているのは事実だ。

氷璃の魔法が強力になったということは魔力が水にしたものをもう一度、氷にして攻撃をしていたのでそのぶん氷璃のほうが有利になった。

「確かに遅くなってるな……」

「そろそろ私たちも戻ろうか」

「はい」

柚月と美羽は氷璃に近づいていく。

「氷璃、次は氷璃が休んで」

「もう大丈夫なの？」

「人の心配するより自分の心配をしなよ」

「わかったわよ……頼んだわよ……」

美羽の言うとおり次は氷璃が聡一の近くに来る。

「氷璃さん！大丈夫ですか？」

「うん……」

氷璃の歩き方はとてもつらそうだ。

フラフラと、いつ倒れてもおかしくない様子だ。

「肩、貸しましょうか？」

「大丈夫よ……」

そのとき氷璃は聡一の方に倒れる。

「やっぱりダメじゃないですか……」

「ごめんね……聡一君に迷惑かけたら最後に困るから……」

「俺は全然戦ってないから大丈夫ですよ」

「そう……あとは頼んだわよ……」

氷璃は聡一におさえられたまま気絶した。

「無理すぎですよ……」

氷璃が気絶した理由は魔力を一気に使いすぎたためだ。

そのせいで体に負担がかかり、さらには脳も疲れさせてしまう。

「魔力の動き……相当遅くなってる？」

柚月と美羽が連続で攻撃をしているので、そろそろ魔力にも限界がきているようだ。

「聡一君！手伝って！」

「わかりました」

聡一は氷璃を地面に寝かせて柚月と美羽が魔力と戦っている方に行く。

「柚月ちゃんも限界みたい……そして私も……」

聡一君、あとは頼んだわよ……」

「美羽さん！」

美羽も倒れてしまった……

氷璃と同じように気絶をしているようだ。

バタン！

横でなにかが倒れたような音……

「柚月！」

お前も相当、無理してたのか……」

「あれ？三人がかりでも私に勝てないの？」

「うるさい……お前は絶対に俺が吸収してやるよ！」

「無理だよ……」

「黙れ！」

「だから無理なんだって！」

「黙れ！！！」

聡一は魔法を一気に合成させ魔力に向かって攻撃を始める。

「本当に頭、悪いのね！少し黙ってて！」

魔力は聡一の動きを止めるために手足に光の輪をつける。

「なんだ……これ……吸収できない」

「そうよ。それは「私の」魔法じゃないからね」

「どういことだよ……」

「そのうちわかるかな……」

まあ、いいや。私はもう戦う気ないから攻撃しないでくれない？」

「嘘つくな！」

「本当だから……まあ、その状態じゃ攻撃できないか」

「……」

「じゃ、私の話聞いてくれる？」

「わかったよ……」

act 8 宇宙初の魔力

「あなたたちが回収しようとしている魔力は全部で十個。

一個回収してて、私も回収すると考えるとあと八個か……」

「それが、なんだよ」

「その魔力十個が結構、重要なものでね。」

「この世界……宇宙で初めて魔法を作り出した人が作りだしたものの
の」

「でも俺たちは地球に送り込まれた魔力の塊を回収するつもり……」

「なんでかわからないけど」

地球に送り込まれた魔力自体が私が言ったものと同じだったのよ」

「じゃあ俺が一つ目の魔力を吸収したってことは……」

「そう。あなたの体の中に、その魔力があるってこと」

「その魔力があつたら、なにかあるのか？」

「あるわよ。いいことでも悪いことでもない、」

ただあなたが大変になるっていうだけの影響がね」

「それって……」

「これから教えるわ。」

とりあえずあなたのやるべきことは十個の魔力全部を回収すること。

そして、その後宇宙で初めて魔法を使った人……

簡単に言う魔法の神様ね。その人にあつてもらっわ」

「それだけ？」

「そうだけど、神様が初めて作り出した魔力を体内に十個も持つて
いるってことは

神様も期待してるってわけ。だからなにを頼まれるかわからないわ

よ」

「そういうことね……」

「これで私の話は終わり。そして私の役目も……」

「役目って？」

「あなたにこのことを伝えること。」

そして、次から戦う魔力が私と同じように記憶を持っているとは限らないわ。

「一個目の魔力のように……」

「これから、お前はどうするんだよ？」

「あなたに吸収してもらおうわ。これからは私の魔力を使ってもいいから。」

「じゃあ、よろしくね」

「……わかった」

魔力は地面に近づいてくる。

そして聡一は魔力に手をかざし、吸収を始める。

「これから、あなたの運命がどんなふうに変わるかわからないわでも、こんなに頼もしい仲間がいるんだったら心配はないわね。」

そして私もついてる。がんばってね」

吸収しているときに聡一の頭の中に魔力の音が流れ込んできた。

気がつくと、元の滝の場所へ戻っていた。

そして滝の流れも普通になっている。

「宇宙で初めて作られた魔力か……」

柚月も美羽も氷璃も気絶したままだ。

男とはいえ、三人の人を同時に運ぶことは不可能だ。なので、ここで皆が目を覚ますのを待つことにした。

「なんもすることないな……」

まわりには自然が溢れているが何もすることがない。

近くを見ても、あるのは三人が眠っている姿があるだけ。自然があるとはいっても動物がいるわけでもない。

「本当にやることないな……」

「うう……」

氷璃が少し苦しそうな声を出す。

「氷璃さん！大丈夫ですか？」

「うん……」

氷璃は目を覚ましたようだ。

「まだ起きない方がいいですよ……」

「大丈夫よ。魔法の使いすぎなんて、すぐに治るんだから……」

「そうなんですか？」

「そうよ。少なくとも私はそうだから」

「じゃあ美羽さんと袖月は……」

「どれだけ時間かかるかわからないけど、絶対起きるから大丈夫よ」

「そうですか……」

「そういえば、どうやってあの魔力を倒したの？」

「それは、ですね……魔力が魔力自身についての説明をしてくれたんです」

「どういうこと？」

「俺たちが回収しようとしている魔力は全部で十個あって、その魔力は全て宇宙で初めて作られた魔力らしくて……」

「でも私たちが回収しようとしている魔力って、

地球に送り込まれた魔力がこの世界に散らばったものよね？」

「地球に送り込まれた魔力自体が宇宙で最初の魔力そのものだったそうです」

「なんで、そんなものが……」

「それは魔力にもわからないと言っていました……」

「そういえば今日だけで二個の魔力を回収しているわよね？」

「はい」

「じゃあ、あと八個ってこと？」

それと聡一君の体の中には、その魔力があるの？」

「はい」

「その魔力、使えない？」

「わかりません……でも無理だと思えますよ」

「そんなふうには言っちゃダメよ。さっそく、試してみましょ」

「ここですか？」

「うん。あ、でも今戦ったばかりだもんね……」

「大丈夫ですよ」

「そう？じゃあ始めましょう」

「でも……」

聡一は袖月と美羽が寝ている方を見る。

「あ、確かにここで試したらどんな魔法かわからないから危険かもしれないわね」

「少し、離れましょう」

「そうね。でも袖月ちゃんか美羽が目覚めたときに

私たちがいなかったら困ると思うから、あまり遠くにはいかないようにしないかね」

「はい」

聡一と美羽は木が少なく袖月と美羽のいる位置から見えるギリギリの位置まで離れる。

「やってみて」

「はい」

聡一は合成を始める。

act 9 新しい合成方法

この方法で本当に正しいのかはわからないが、なんとなくという感覚に任せて魔法を合成する。

しかし、発生したものは「氷」。

これでは今までとにも変わらない。

「やっぱり無理なのかな？」

「でも……今のいつもとは少し違う感覚でした」

「もう一回やってみる？」

「はい」

さっきのなんとなく感じたもの……さっきはそれに忠実に従ったわけではない。

次は完璧に感じたとおりに合成をする。

「え？これって……」

今度は「氷」は発生しなかった。

そのかわりに白い煙のようなものが発生する。

それはとても冷たく、凍えるようなもの……「冷氣」だ。

「うーん……これでも、いつもと同じよね……」

「はい……もう一回やってみます」

次は少し自分の考えも交えて合成のしかたを変える。

二つの魔法を合わせるのではなく、状態を変化させる魔法を

氷の魔法に使うような感覚……

そんなふうには合成をする。

「もしかして……」

「今度はできましたよ！」

魔法の姿を見なくても成功したことが自分でわかった。

そして発生したものは「氷」の魔法ではなく「水」の魔法になっていた。

「すごい……」

「これで使える攻撃が増えましたね」
「でも、ただ水を発生させるだけだったら……」
「大丈夫です。袖月の魔法もあれば形を変えることも可能だと思うので」
「そう？じゃあ……あの滝に向かって思いっきり水を放って」
「わかりました」
もう一度、滝の前に戻る。
さっきの感覚どおりに「氷」の魔力を「水」にする。
さらに「重力」の魔法で水の形を変える。
とても難しいと思うがやってみなくてはいけない。
「これで、いいはず……」
三つの魔法を同時に合成する。
いつもは二つしか合成していないため少し感覚が違う。
しかし体に負担がかかるとかつらいとかそういったものではない。
そして完成させたものを滝に向かって放つ。
水は鋭い刃のような形になり滝を切り裂いていく。
その衝撃で水しぶきが飛び散る。
「すごいわね！」
「ありがとうございます」
「これなら次の戦いも大丈夫そうね」
「俺、一人じゃ無理ですよ」
「大丈夫。無理でもやってみらわないと困るからね」
「ううん……冷たいな」
「美羽！？やつと起きたかー」
「うん。っていつか今のなに？なんか冷たいものが……」
「聡一君が新しい魔力を手に入れたのよ」
「へー どんな魔法？」
「さっき戦った魔力と同じ魔法」
「え？あれ？もう無敵じゃん」
「そんなことありませんよ。次の魔力はもっと強いと思いますし……」

……
確かにそうだ。

今回の魔力も相手が最後に戦う気がなかったから勝てたようなものだ。

もしも、あのまま戦っていたら……

「そういえば柚月ちゃんは大丈夫なの？」

「あんたより魔法を使った経験ないんだから起きるわけないでしょ

……」

「そうだよね……」

「聡一君、一回家に戻ろうと思うんだけどいい？」

「はい。柚月は俺が運びます」

「じゃあ、もう行きましよう。魔力の位置をもう一回確認したいし

……」

「えー 私、今起きたばかりよ？」

「元気そうだから大丈夫よね」

「……わかったわよ」

「じゃあ行きましようか」

「はい」

聡一は柚月を背中に抱える。

「聡一君、結構力持ちなのね」

「柚月が軽いからですよ」

「でも、すごいと思うわよ。人を抱えたまま歩くのって」

「そうですか？」

「うん。じゃあゆっくり歩くから無理しないでね」

「大丈夫です」

「聡一君だけじゃなくて、私の心配もしてよ……」

「聡一君に運んでもらえば？」

「なんで、そうなるのよ……」

「俺は構いませんよ」

「ほら、聡一君もいって」

「いいわよ。歩くから……」

「じゃあ私が運ぼうか？」

「もう……わかったわよ……歩くから」

「それでいいのよ」

美羽は元気そうだ。普通に歩いている。

act9 新しい合成方法（後書き）

「CLEAR」という小説を投稿しました。

現在、六話まで書いています。

よければ、「CLEAR」も読んでみて下さい。
ジャンルは恋愛です。

「そういえば、あの魔力どうやって倒したの？」

「えーとですね……」

「待って。柚月ちゃんが起きてから説明したほうがいいわ。

もう一回、説明することになるから」

「わかりました」

「もしかして、なんか新しいことわかったの？」

「はい」

「それで氷璃が家に帰りたいつて言ったの？」

「そうよ。これからしばらく忙しくなるわよ」

「まさか、また戦うの？」

「そうなるわね」

「次は本当にヤバいんじゃない……」

「聡一君と同じこと言ってるわね。確かに魔力も強力なものになると思うわ」

「じゃあ、絶対勝てないじゃん……」

「だから戦術を考えるんじゃない？そのために一回帰るのよ」

「それでも……」

「それし聡一君もいるしね。絶対大丈夫だよ」

「俺ですか……」

「そうよ。聡一君には新しい魔法があるでしょ」

「……ここは……」

「お、柚月ちゃんも起きたみたいね」

「あれ？私、魔力と戦って……」

「気絶したのよ」

「じゃあ、魔力は……」

「それは家についてから説明するわ」

「そうですか……って聡一君！？自分で歩けるから、もう大丈夫……」

…」

「ダメ。起きたばかりなんだから、そのままにしてろ」

「でも……」

「無理はダメよ。いつもの元気がないもの」

「そうだ。ちゃんと掴まってるよ」

「うん……」

袖月は聡一の胸の前で腕を交差させて聡一に掴まっている。すぐ疲れている様子だ。

袖月を背負ったまま歩き続けていると、すぐに掴まっている手の力が弱くなる。

そして顔が聡一の顔のすぐ横に来る。

スースーと静かに袖月が呼吸する音が聞こえている。

袖月はもう一度寝みってしまったようだ。

「袖月ちゃん、そうとう疲れてたんだね」

「そうですね。最初から俺が戦っていれば……」

「それだったら今頃、全員あの滝の前で気絶してたわね」

「なんでですか？」

「聡一君が一つ目の魔力を吸収してあるのに一番最初に気絶したら、あんなふうに分分から吸収させてくれなかったと思うよ」

「そういうことですか……」

「うん。でも次からは戦ってもらうから」

「はい！」

聡一は力強く返事をする。

「いい返事ね」

「ありがとうございます」

帰り道は来た時よりも長く感じる。

三人とも疲れていたため歩く速度が遅くなっているようだ。

「やっと一つ目の魔力があった場所まで来たわね」

「ちょっと休憩しようよ……」

「そうね」

「あー やつと座れる」

美羽は近くにあった丸い岩に座る。

そして氷璃も同じように丸い岩に座る。

聡一は袖月を背負っていたため座らずに立っている。

「……聡一君、ごめん……」

「え？」

「私、もう大丈夫だから……」

袖月の声が聞こえ手の力も元に戻っている。

「本当に大丈夫か？」

「うん」

聡一は袖月をゆっくりと下ろす。

「袖月ちゃん、本当にもう大丈夫なの？」

「はい……」

「まだ元気なさそうね」

「大丈夫です……」

氷璃の言うとおり、声にはまったく元気がない。

聡一は、まだ倒れそうな袖月の手をひき岩に座る。

「袖月も座れよ」

「うん……」

袖月は聡一の横に座る。

「もう、しばらく休んでから行きましょう」

「はい」

四人が岩の上に座っている間はほとんど会話がなかった。

全員、話す気力がないようだ。

特に袖月は顔色も悪く、真っ白だ。

「そろそろ行きましょうか」

「はい。袖月、もう一回……」

「歩けるから大丈夫……」

「じゃあ、手だけでも……」

「ありがとう」

聡一が差し出した手を柚月は軽く握る。

「無理そうだったら、すぐ言えよ」

「うん……」

「じゃあ、行くわよ」

氷璃が歩き始めるが柚月にあわせて皆、ゆっくり歩いている。

この速度で歩いていくと、ここからでも相当時間がかかりそうだ。会話もまったくないまま歩き続ける。

何度か柚月が倒れそうになったが無事、家につくことができた。

家についてすぐに柚月を部屋のベッドに寝かせる。

「今日は、ゆっくり休んで明日また詳しいことを話しましょうか」

「じゃあ、私も寝るね」

「氷璃さん……布団もらっていいですか？」

「いいわよ。ちょっとついてきて」

言われた通りついていくと氷璃の部屋につれていかれた。

そこにある押入れのような場所から布団を取り出して二階の聡一が寝る部屋に運ぶ。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。ゆっくり休んでね。明日から、また大変になるから」

「はい」

氷璃も部屋から出ていき聡一は布団を敷いて横になる。

自分では、あまり気づいていなかったが聡一も疲れていたようで布団に入っただけで眠りについた。

どれだけ深い眠りについているのだろう……

夢をみることもできない。

そんな深い眠りから起きた時の体は、とても重く起きあがることも難しい。

目は開いているが体だけ、まだ眠っている。そんな感じだ。

「聡一君、大丈夫？」

「柚月……」

「美羽さんも氷璃さんも、まだ起きてないみたいだし寝てた方がいい

いよ」

「そう言われてもな……」

「でも起きあがれないんでしょ？」

「そんなことないよ……」

聡一は無理矢理、体を起き上がらせようとするが力が入らない。

「ほら、やつぱりダメじゃん。無理しないほうがいいよ」

「お前は大丈夫なのかよ？」

「私はずっと寝てたからね」

「そういえば俺、どれくらい寝てた？」

「私もさつき起きたばかりだからわかんない」

「そうか……」

「聡一君……」

「どうした？」

「今、動けないんだよね？」

「うん。それがどうかした？」

「横に寝てあげようか？」

「なに言ってるんだよ……」

「いいじゃん。昨日だって、こうして寝たでしょ？」

「そうだけど……」

「嫌？」

「……いいよ」

「やったー」

柚月は聡一の横に寝転がる。

そして聡一の腕に抱きつく。

「聡一君が私をここまで運んできてくれたんでしょ？」

「まあな……」

「ありがとう」

「お……おっ……」

「なーに照れてんの？かわいいからいいけど」

「それ、バカにしてる？」

「ゼーんぜん」

「絶対してるよな……」

「そんなことないよ。それより早く体、治してよ」

「そうだな。このまま動けないっていうのは流石に……」

「明日も戦わなくちゃいけないわけだし……」

「コンコン」

「聡一くん 起きたー？入るわよ」

「ちょ……袖月、離れろ」

「袖月は慌てて聡一から離れてベッドに座る。」

「あら、もう二人とも起きてたんだ。じゃあ一階におりてきて」

「聡一君が体、動かないみたいなんですけど……」

「え？聡一君も情けないわねー」

「すいません……」

「冗談よ。あれだけの魔力を吸収して動けなくなるなんて当たり前だよ」

「そうなんですか？」

「うん。でもこのままじゃ困るわね……なんとか起きれない」

「そろそろ大丈夫かもしれません」

「聡一はもう一度、体に力を入れるように試みる。」

「今度はちゃんと力が入り立ちあがることができた。」

「しかしフラフラする。」

「うーん……なんとか大丈夫そうね」

「はい」

「じゃあ行くわよ」

「聡一君、肩かす？」

「大丈夫。流石に女の子の肩をかりるのはな……」

「遠慮しなくていいって」

「袖月は聡一の背中に手を回し体を抑える。」

「ありがとう……」

「いいのよ。聡一君だって運んでくれたでしょ」

リビングに行く和美羽も、もう起きていた。

「さあ、明日からのことについて話すわね」

「はい」

「さつき、確認してみたら確かにあと八個の魔力があったわ」

「場所はどこですか？」

「ここからは結構、離れているわ。だから聡一君が地球から来た時に持ってた荷物……」

「テントですか？」

「そうそう。それを使ったりほかの町に泊ったりしなくちゃいけなくなるわね」

「移動する魔法はないんですか？」

「残念ながら、それはないわね」

「わかりました」

「話はそれだけ。明日からの移動距離とかも考えると、もう休んでの方がいいわね」

「俺、さつき起きたばかりですよ……」

「そうよね……まあ、いいわ。できる限り体を休めておいてね」

「はい」

「じゃあ、部屋に戻っていいわよ」

氷璃の話が終わり聡一と柚月は部屋に戻る。

「次はどんな敵なのかな？」

「さあな。でも今日より強いのは勘弁……」

「そうだよな。そういえば今日の魔力はどうやって倒したの？」

「うーん……実際、俺はあまり戦ってないんだよね……」

「そうなの？」

「うん。魔力のほうも、あまり戦おうとしてなかったし……」

「じゃあ吸収できたってこと？」

「そうだな。そのおかげで新しい合成方法も見つかったし」

「そうなんだ。どんな魔法？」

「うーん……簡単に言うとおの魔力と同じような魔法かな……」

「すごいじゃん！それだったら次からの戦いも余裕なんじゃない？」

「そうであればいいけどな……」

「そういうふうには考えちゃダメだよ。絶対、勝つって考えてないと」

「そうだよな。明日もがんばろうか」

「うん！」

「じゃ俺一応、横になってるから」

聡一は床に敷いてある布団に入る。

やっぱり寝れない。

さつきまで、ずっと寝ていたのだから当然のことだ。

そのとき体の上になにかが乗った。

「どうせ眠くないんでしょ？」

「ちよ……おりろ……」

「やだよ」

袖月は聡一の背中に手を回して、顔を近づける。

「袖月……」

「ねえ……もういいよね……」

「うん……」

聡一と袖月の距離はどんどん小さくなっていく。

聡一は唇に柔らかい感触を感じた。

「聡一君……大好き……」

「俺も好きだよ……」

今度は聡一が袖月を抱きしめる。

「私……こんな気持ち初めてだよ……」

「袖月……これからもずっと一緒にいような」

「うん」

聡一と袖月が二人きりの部屋には、窓から星の光が差し込んでいた。

act 12 危険な森

コンコン

「聡一君、袖月ちゃん、もう起きてー」

「……………はい……………」

美羽が階段を下りていく足音が聞こえる。

「聡一君、起きて……………」

「……………もう朝か……………」

「うん。着替えて早く下に行こう」

「そうだな……………」

そう言っていると袖月は服を脱ぎ始める。

「ちよ……………むこう向いて着替えるよ……………」

「聡一君なら見られても平気だよ？」

「そういう問題じゃ……………」

「早く着替えなよ」

「むこう向いてるよ……………」

「聡一君のなら見ても平気だよ？」

「いや……………俺が恥ずかしいから……………」

「そう？」

袖月は聡一がいる方向と逆をむく。

「じゃあ行こうか」

「うん」

聡一と袖月は部屋から出て一階へ行く。

「二人ともおはよう。今日はもう魔力の場所がわかってるけど

その場所まで行くのに時間かかるから朝ごはん食べたらすぐに出発するけどいい？」

「はい」

テーブルの上には、聡一と袖月のぶんだけ朝食が置いてある。

「いただきます」

椅子に座り朝食を食べる。

できるだけ早く食べるように心がけたが十分ほどかった。

「ごちそうさま」

「食べ終わった？じゃあ、もう出発したいんだけどいい？」

「はい」

「しばらく家に戻って来れないと思うからテント……だっけ？

それも一応、持っていきましょうか」

「持ってきます」

聡一はもう一度、部屋に戻り地球から持ってきたキャンプ道具を持つ。

「よし。あとは忘れ物ない？」

「大丈夫です」

「じゃあ出発するわよ」

家から出ると昨日通った森とは別の方向に進んで行く。

「昨日とは違って今日、通るばしょは危険な猛獣とかいるから気をつけてね」

「わかりました」

街中を五分くらい歩いていくと大きな門のようなものがあつた。

氷璃はその近くにいた武器を持っている男に近づいていく。

「なに話してるんですか？」

「通してもらうための交渉をしてるのよ。」

まあ氷璃だつたら余裕で通してもらえらと思うけどね」

そんな話をしている間に氷璃が戻ってくる。

「さあ、行きましよう」

氷璃がそう言った瞬間、門はゆっくりと開き始める。

そして聡一たちは門を通り国の外へ出る。

「なんか生えてる木の種類が違いますね」

「うん。でもむやみに触ったらダメだからね」

「なんでですか？」

「町から出るとき門があつたの覚えてる？」

「はい」

「あれは危険な生物や植物があるから町の人が入らないようにしてるの」

「そうなんですか」

ガサガサ……

横の草の中から、なにか動く音が聞こえる。

「気をつけてね。小さくても危険なのがいるから」

「わかりました」

この森の中も歩きやすいようにあまり草が生えていない道があるが、それは、まわりに比べて草が少ないというだけでかなり歩きづらい。ミシミシ……バキ！！

歩いている横の木が突然倒れてくる。

「危ない！」

真っ先に気づいた柚月は重力の向きを変えることにより木を別の向きに倒す。

「なんで急に木が……」

「気をつけて……もしかしたら……」

「グルルル……」

倒れてきた木の方向から狼のような鳴き声が聞こえてくる。

「これは、ちょっとヤバいかも……」

美羽は少し焦っているようだ。

「危険な動物なんですか？」

「相当危険よ。好戦的で気性も荒いし……」

「どうするんですか……」

「殺すわけにはいかないから、気絶させましょう」

「どうやってですか？」

「気温を下げれば眠るわ」

「狼って冬眠しないんじゃない？」

聡一の言葉を聞かずに氷璃はまわりの気温を下げていく。

すると、さっきまで唸っていた狼は静かになり動かなくなっている。

「なんでですか？」

「こつちの世界には気温の変化があまりないのよ。」

だから体温調節をすることが難しいの。

私も地球に言ったとき体温調節ができなくて風邪ひいたし」

「そうなんですか……」

「うん。だからこの森の大体の動物は簡単に戦闘不能にできるわ。」

じゃあ進みましょうか」

倒れている大きな木の上を通り先に進もうとする。

「柚月、登れるか？」

聡一は柚月に対して手を差し出す。

「ありがとう」

その手を引き柚月も木の上に登らせる。

その木の直径は一メートル七十センチといったところで

聡一の身長と同じくらいある。

「あの狼……どうやってこの木を倒したんだろう……」

木の根元のほうを見てみると狼が噛んだ跡がある。

どうやら、なんども噛みつかれてもろくなった木が

ちょうど聡一たちが通った時に倒れたようだ。

「おられるか？」

木の上からおりようとする柚月の足を震わせている。

「ちゃんと支えるから飛べよ」

「……うん」

柚月は目を閉じてゆっくり聡一の方へ飛んでいく。

ちょうどいい位置に来たため聡一が柚月をキャッチするのは簡単なことだった。

「もしかして、このくらいの高さでも怖いのか？」

「うん……」

柚月は恥ずかしそうに頬を赤らめている。

どうやら柚月の高所恐怖症は相当重症らしい。

「今みたいにく、いつどこからああいう動物が出てくるかわからないから気をつけてね」

「はい」

「あと植物にも……」

そのとき氷璃に木のツルがむかってくる。

「なんて言ったそばから来るのよ……」

氷璃はそのツルを氷を使って切り落とす。

「この辺の植物は動くから気をつけてね」

「動くんですか……」

「そうよ。地球じゃ考えられないでしょ」

「はい……」

さすがは魔法の世界だ。植物も動くというのだから。しかもそれは木が意識的に動けるといふことらしい。

「あと、どれくらいで着きますか？」

「今日は多分、着かないわね」

「そんなに遠いんですか？」

「うん。地形の影響もあるしね」

ガサガサ……

「またですか？」

「わからないわ」

音の聞こえたほうからは小さなヤマアラシのような動物が出てくる。

「かわいいですね」

「待って。その動物は別に影響ないけど触ったら毒針で刺されるわ

よ

「そうなんですか？」

「うん。こんな環境だもん。それくらいしないと身を守れないでし

よ

「そうですね」

ヤマアラシには近づかず、もう一度歩き始める。

まわりの景色がほとんど変わらないので本当に正しい方向に進んで

いるのかわからない。

しかし氷璃には全く迷っている様子がない。

少し進むたびに草むらから音が聞こえてくる。

なんだか森に住んでいる動物たちに観察されているような感じだ。

さらに視線も感じるということは、やはり動物は聡一たちの方を見

ているということだ。

「あの……なんか見られてませんか？」

「動物たちが私たちがなにをにきたのか見てるんじゃない？」

「そうですね……」

「だから、なんか余計なことしたらすぐに襲われるかもね」

「あまり怖がらせないでください……」

「でも、本当よ。ここに人が来ることなんて滅多にないからね」

そのとき遠くからドンドンと大きな足音が聞こえてくる。

「あの……これヤバくないですか？」

「うん……ちよつとまずいかもね……」

「どうするんですか？」

「できるだけ足音の聞こえる方から離れましょう……」

氷璃は少し歩くルートを変えて足音が聞こえる方と逆に向かって歩く。

「そつち行つても大丈夫なんですか？」

「うん。少し遠回りになるけどね……あと……」

目の前に木の棒が落ちてくる。

それも先端が尖っていて、あたつたら確実に死ぬだろう。

「……こういう危険な植物が多いから気をつけてね」

「危険すぎませんか……」

「でもあの足音を出してる動物にあつよりはマシだと思っけど？」

「確かにそうですけど……」

「まあ、いいわ。私かどの植物がなんなのかわかつてるから」

「そうですね……」

歩く速度はさらに遅くなる。

氷璃がまわりの植物を警戒しているからだ。

「あれ……もしかして……」

目の前に巨大な影が見える。

「足音から離れるように歩きましたよね……」

「うん……」

確かに足音とは逆の方向へ歩いていたはずだ。

それなのに目の前に巨大な影……

「あの……どうするんですか？」

「なにもしてこなければいいんだけどね……」

そういうわけにもいかなそうだ。

この正体不明の巨大な動物は威嚇するような声を出している。

「やっぱり、やらなくちゃいけないんですか？」

「だろうね……怒ってるみたいだし」

巨大な動物はゾウのような姿をしているが大きさは全然違う。

そして前足で聡一たちを踏みつぶそうとする。

足の大きさも相当なものだが後ろに下がれば簡単に避けられる。

「ちょ……どうするんですか」

「私がやります」

袖月が一步前に出て重力を強くする。

巨大な動物は動けずに苦しそうな声を出している。

「袖月ちゃん、すごい！」

「ありがとうございます。私の魔法はこういうときしか役に立たないので……」

「今のうちに眠らせちゃおうか」

氷璃は気温をどんどん下げていく。

さっきの狼と同じように冬眠状態にさせるようだ。

気温は相当下がっているはずだ。

しかし巨大な動物はまだ眠っていない。

「もしかして……寒さを感じてない？」

どうやらこの大きな動物は厚い皮膚に覆われているため寒さを感じないらしい。

「あまりやりたくありませんが俺がやります」

聡一は前の魔力を吸収したことにより使えるようになった魔法を使い、

巨大な動物の鼻の部分に水の塊を作り出す。

さらに苦しそうな声を出す巨大な動物……

「聡一君！もうやめて！」

「え？」

袖月に言われて聡一は初めて気づく。

この魔法を続けて使えばこの巨大な動物は死んでしまう。

巨大な動物を殺させないために袖月は聡一に「やめて」と言ったのだ。

「じゃあ、どうすればいいんだよ……」

「もう大丈夫。この動物はもう戦う気がないみたいだから」

袖月の言うとおり、もう巨大な動物は威嚇するような声は出していない。

そして少しずつ森の中へと入っていく。

「なんであの動物は俺たちを襲おうとしたんだよ……」

「さあね。縄張りだったんじゃない？」

「氷璃さんは、あの動物を知ってるんですか？」

「全然知らないわ。でも、もう動物には襲われないでしょうね」

「なんでですか？」

「あの巨大な動物がこの森のボスみたいな存在だと思うから」

「そうですね……」

「うん。でも植物には気をつけてね」

「はい……」

また森の中を黙々と進んで行く。

ただでさえ歩きづらいうのに、さっきの巨大な動物の足跡がある。

地面がデコボコしていてさらに歩きづらい。

植物にも警戒しなくてはいけないので足下だけ見てはいけな

ただ歩くだけで、こんなにもまわりに注意するのは初めてだ。

これだけ危険なのだから森の入り口に門があることにも納得できる。

「やっと、ここまで来たか……」

前の方に町のようなものが見える。

どうやら今日はちゃんとした場所で寝れそうだ。

「これは、どこの国ですか？」

「国じゃなくて、ただの町よ」

「え？」

「だから出発したところと同じってこと」

「こんなに広いんですか？」

「結構、歩いたように感じたけど実際は昨日より歩いてないわよ？」

「そうですね……」

「うん。とにかく同じ国だから安心して」

「はい」

この町も入り口のところには門がある。

しかし警備の人がいるわけでもなく、簡単に町に入ることができる。

「ここに来るのも久しぶりねー」

「私は初めてなんだけど……」

「あれ？美羽が小さい頃に一回だけ来なかったっけ？」

「うーん……覚えてないな……」

「そっか」

町の中は、店などが多く美羽の家がある町より賑わっている。

「やっぱり都会はいいわねー」

「うん。これだけ食べ物売ってれば色々な料理が作れるわね」

「確かに色々な物が売っていますね」

「この町は他の国と近いから、色々な物が集まるのよ」

「そうなんですかー」

「そんなことより、今日泊るところを……」

「そうだった。それが一番重要よね」

街中をまわりを見ながら歩き続ける。

本当に色々な物が売っている。

食べ物だけではなく、聡一や袖月の見たことがない道具まで……

さらには魔法関係の道具だと思われるものも売っている。

「なんか、おもしろいですね」

「聡一君たちに見れば珍しいもんね」

「はい」

「うーん…… やっぱり、このへんに泊れそうな場所はないわね……」

あっちの方に行ってみましようか」

氷璃が一番広い道から少し細い道のほうに入っていく。

その方向には民家がたくさんあるように見える。

「ここって家しかないんじゃないですか？」

「確かにそうね……戻りましよう」

もう一度、広い道に戻る。

さらにまっすぐ進み続けて、やっとそれらしいものを見つける。
一応、宿泊可能という看板が店の前に出ているが普通の民家にしか
見えない。

「本当にここなんですか？」

「うん。意外とこういう宿って多いのよ」

氷璃は宿の玄関のドアを開ける。

「ほら、ただの家じゃなかったでしょ」

玄関はとても広く、靴がたくさん置けるようになっていいる。

「いらっしやい。四人かい？」

入ってすぐに五十歳くらいの女性が置くから出てきた。

「はい」

「じゃあ、このノートに泊る人の名前書いておいて。部屋はいくつ
用意する？」

「どうする？」

「私は一つでいいと思いますよ」

「私も別にいいわよ」

「じゃあ一部屋で」

「あの……俺は？」

「別にいいじゃん」

「……」

柚月はいいとして、なぜこっちの世界の女性陣はそういうことを気
にしないのだろう……

「聡一君、行くわよ」

「はい……」

柚月と美羽、氷璃はカウンターの横にある階段を上っていく。
その後を聡一もついていく。

二階にある今夜、泊るための部屋の中に入る。
普通の宿の部屋にしては大きい。

外から見たときは、そこらへんの民家と変わらない大きさだったが
中に入って見ると

違いは明らかなものだった。

「結構、広いですね」

「うん。ゆつくりできそうね」

聡一は今まで背負っていたキャンプの道具を部屋の隅に置く。

「あの、ここってお風呂はあるんでしょうか？」

柚月が氷璃に小声で聞いている。

「さあ。一階にいる人に聞けばわかるかもね。」

私もお風呂、入りたいし行きましようか」

「はい」

柚月と氷璃は聡一が置いた荷物の中から着替えを取り出して部屋を
出ていく。

「美羽さんは行かないんですか？」

「私はご飯を食べてから行くわ」

「そうですか」

「はい 今日も一日歩いて疲れた」

美羽はベッドに倒れ込む。

「あー このベッド柔らかくて気持ちいいー 聡一君も寝てみたら
？」

「俺はいいですよ」

「なんかのど乾いたなー」

「なんか飲み物、買ってきましようか？」

「うーん…… じゃあ一緒に行こ」

「はい」

美羽は荷物の中から財布を取り出す。

結構、厚みがある財布だ。

美羽がなにをして働いているのかはわからないがお金持ちのようだ。
「行きましょう」

部屋のドアを開けて美羽が外に出る。

そのあとを追うように聡一も部屋から出る。

一回、宿の外に出て飲み物を買っている店を探す。

「せっかくだから、こっちの世界で有名な飲ませてあげようか？」

「いいんですか？」

「うん。ちょうど私もそれが飲みたかったし」

「どこに売ってるんですか？」

「すぐそこよ。来る時に見て飲みたいなーって思ってたの」

美羽が指差した方向には屋台のようなものと「炭酸水」と書かれた看板がある。

「あれですか？」

「うん。この炭酸水がおいしいんだよねー」

美羽は少し早歩きで屋台に近づいていく。

美羽が注文している間に聡一も美羽の横に行く。

「はい、これ持って」

美羽に渡されたのは四本のビンに入った水色の液体……

例えるならばサイダーといったところだ。

「じゃあ戻るわよ」

「はい」

屋台は宿のすぐ斜め前にあったため、すぐに宿に戻る。

キンキンに冷えているビンを持っていたせいで聡一の腕は冷たくなっている。

「冷蔵庫もあるし、柚月ちゃんと氷璃が戻ってきたら飲みましょう」

「はい」

冷蔵庫の形も地球とあまり変わらない。

そして飲み物が入っているビンも普通にガラスでできているものだ。

魔法の世界といっても使う道具が同じなことに驚く。

「あの……これ、どうやって開けるんですか？」

「あー そっか冷蔵庫の使い方知らないのか」

「はい……」

「ここ開いて」

美羽に言われたとおり横についていたボタンのようなものを押すと正面の部分が開く。

「こういうふうに開けるんですか」

「うん。すごいでしょ」

冷蔵庫の中を見ると奥に青い光を放つ水晶が見えた。

「なんですか、これ？」

「それには魔力が込められていて、そのおかげで冷蔵庫の中が冷やされているの」

「そうなんですか……すごいですね」

「やっぱり地球から来たら魔法って便利を感じる？」

「うーん……地球の道具とあまり変わらないですね」

「やっぱりそうよね。ただ使うエネルギーが魔力か科学的なものかの違いだし」

「そうなんですか？」

「そうよ。こつちの世界の道具は地球のものほとんど同じよ」

聡一は少し意外に感じた。

魔法があるのならば、もっと便利な道具を作れると思っていたからだ。

「ふー 気持ちよかったー」

部屋のドアが開き、風呂上りの柚月と氷璃が入ってくる。

「お、ちようどいい。今、美羽さんと飲み物買ってきたから一緒に飲まない？」

「本当に？お風呂から出たばかりだから喉、乾いてたんだよねー」

聡一はもう一度、冷蔵庫を開けて炭酸水を取り出す。

「美羽さんと氷璃さんも飲みますか？」

「うん」

「私も」

四本のビンを持って部屋の真ん中にあるテーブルに置く。

「飲みましょうか」

美羽はビンの栓を抜いて、少しずつ飲む。

「やっぱり、これおいしいわね」

「これ飲むの久しぶりだわ」

氷璃もビンの栓を抜いて飲み始める。

聡一と柚月は栓を抜くのに苦戦している。

「開け方わからない？」

「はい……」

「かして」

美羽にビンを渡すと簡単に栓を抜いた。

「どうやったんですか？」

「うーん……力加減かな？」

「難しいんですか？」

「慣れだね。私も最初は地球の缶ジュース開けられなかったもん」

「開け方、教えてくれませんか？」

柚月は氷璃にビンを渡そうとする。

「両側から同じくらい力で押して、上にあげればいいんだよ」

「こうですか？」

柚月が氷璃の言うとおりにすると簡単に栓が抜けた。

「そうそう」

聡一と柚月はほとんど同じくらいのタイミングで炭酸水を飲み始める。

「おいしい……」

そして同時に同じ感想を言う。

「普通、炭酸水って味しないよね？」

「うん……でもなんか甘くておいしい……」

「そりゃあね。色々な果物の果汁が入ってるもん」

「この青い色果汁の色ですか？」

「うん。こつちの世界には青い果物が多いからね」

「そうなんですか……」

「うん」

四人とも炭酸水を飲み終える。

act 16 宿の夜

「じゃ、俺は風呂行ってきます」

「わかった。ご飯までには戻ってきてね」

「はい」

部屋からでて一回に行く。

そして、すぐに宿の人に風呂場の場所を教えてもらう。

その方向に進んで行くと、風呂場の入口がある。

脱衣場から風呂の中を見ると結構、広いようだ。

中に人は誰もいない。

「思ったより、広いな……」

聡一はこんなにも広い風呂に入るのが久しぶりだった。

そのため、思わず浴槽の中へ飛び込む。

誰もいないからといって少し騒ぎすぎたと思い、浴槽の壁に寄り掛かかる。

「なんか、すごく落ち着くなー」

そのまま体を温めたあと、浴槽から出て体を洗う。

シャワーなどは地球にあるものほとんど変わらないため、

いつもどおりに使うことができる。

体と髪を洗った後、もう一度浴槽につきり風呂から出る。

体を拭いて着替えを済ませて部屋に戻る。

「お、ちょうどいいじゃん。もうご飯だから」

「わかりました」

聡一が部屋に戻ると氷璃が言う。

「もう少ししたら部屋に料理を運んでくれるって」

テーブルのまわりには座布団が置いてあり、柚月と美羽が座っている。

聡一が柚月の隣に座ると、氷璃は美羽の隣に座った。

「失礼します」

そのとき、ちょうど宿の人が料理を運んでくる。

テーブルの上に料理を並べると、また部屋から出ていく。

「なんか豪華ですね」

「うん。まだあるみたいだし」

「失礼します」

また宿の人が料理を持ってくる。

そして、さつきと同じようにテーブルに並べる。

「まだありますので少々お待ち下さい」

部屋を出ていき、すぐに戻ってくる。

そして料理をテーブルに並べる。

「これで全部です。ごゆっくりどうぞ」

宿の人は一礼すると部屋から静かに出ていく。

「たくさんありますね」

「うん。知らない食べ物ばかりでしょ？」

「はい」

「じゃあ、食べましょうか。いただきます」

「いただきます」

テーブルの上に並んでいる様々な料理を食べていく。

「これ、なんですか？」

「青リンゴよ」

「えーと……青リンゴって緑じゃないですか？」

聡一が指差したリンゴについている皮の色は青だ。

「しょうがないじゃない。こっちの世界のものと地球のものの色が

違うのは」

「そうですね」

聡一が青いリンゴを一口食べる。

「甘いですね」

「うん。さつき飲んだ炭酸水にも入ってるのよ」

「そうなんですか」

「私も食べてみます」

柚月も青いリンゴを一口食べる。

「これ、地球のやつより美味しいですね」

他にも、よくわからない料理がたくさんあったが全部美味しいものだった。

「ごちそうさまー」

「おいしかったですね」

「そうねー」

「じゃあ私、お風呂入ってくるね」

美羽が立ちあがり着替えを持って風呂場に向かう。

「私はもう寝るわ」

そう言つと氷璃はベッドに寝転がる。

「おやすみー」

「おやすみなさい」

「氷璃さん、寝ちゃったね」

「うん。俺も寝ようかなー」

「私は美羽さん来るまで寝ないよ?」

「わかった。じゃ、おやすみ」

「おやすみー」

聡一は倒れ込むようにベッドに寝る。

「ふー 明日になったら魔力と戦うのかなー」

「聡一君、寝た?」

「起きてるよ」

「美羽さん来るまで起きててくれない?」

「いいよ」

「私の魔法ってさ……」

「どうした?」

「なんかいい使い方ないのかな?」

「普通に使うだけで十分強力な魔法だと思うけど?」

「でも、氷璃さんの魔法も美羽さんの魔法も色々な形があるじゃん」

「そうだけど、柚月の魔法は重力を操るっていうだけで十分だよ」

コンコン

「失礼します。食器をさげてもよろしいでしょうか？」

「はい」

宿の人は食器を重ねてまとめてさげていく。

料理を運ぶ時は三度にわけていたが今は一度にまとめてさげている。

「あれ、氷璃もつ寝ちゃったの？」

「はい」

「じゃあ私たちも寝ましょうか」

美羽は髪を乾かしながら言っている。

「俺はもう寝ますよ」

「じゃあ私も寝ます」

「電気、消していい？」

「はい」

美羽はバスタオルを置くと部屋の電気を消してベッドに入る。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

電気を消すと、三人ともすぐに眠りについてしまった。

「……………」

次の日の朝、一番最初に起きたのは聡一だった。

コンコン

「失礼します。朝食をお持ちしました」

宿の人が入ってくる。

「起きてるのは聡一だけだ。」

「あ、ありがとうございます」

宿の人は料理をテーブルの上に並べて、もう一度部屋から出ていく。

「氷璃さん、美羽さん、柚月、起きてよ」

「うーん……………おはよう……………」

最初に起きたのは美羽だった。

「もうご飯ですよ」

「そうだ……………昨日、早めに朝食の準備してって頼んだんだ……………」

もう一度、宿の人が入ってきて料理を並べる。

「これで全部です。ごゆっくりどうぞ」

宿の人が部屋から出ていくと、柚月と氷璃も起きる。

「ご飯、早くない？」

「早めに行った方がいいでしょ？」

「それもそうか……………」

氷璃は起きあがると、すぐに座布団に座り料理を食べ始める。

「聡一君……………もう朝……………」

柚月も少し寝ぼけているが起きあがる。

「私たちも食べましょう」

美羽も座布団に座る。

「柚月、食べるぞ」

「うん……………」

柚月の手を引っ張り座布団の上に座らせる。

「いただきます」

「いただきます……」

柚月は眠そうな顔のまま料理を食べている。

「今日で魔力の場所につきますか？」

「多分つくわ」

「また森の中を歩くんですか？」

「そうね。昨日よりも危険だから気をつけて」

「そうですか……」

「じゃ、私もう食べたから。ごちそうさま」

氷璃は席を立ち荷物をまとめている。

「私も。ごちそうさま」

美羽も立ち上がり荷物をまとめている。

「ごちそうさま……」

柚月も、もう食べ終わったようだ。

聡一は少し急いで食べる。

「ごちそうさま」

「あんまり急がなくてもよかったのに」

「急いでませんよ……」

「まあいいわ。早く行った方がいいものね。そろそろ出発しましょ

う」

「はい」

聡一は荷物を背負い氷璃についていく。

一階で氷璃が宿の人に料金を支払い、宿から出る。

「じゃあ、行きましようか」

来た方向とは逆の方向に歩き、町の外へ向かう。

街中は朝だからなのか、とても静かだ。

「ここからは、どれくらい歩くんですか？」

「昨日より歩くわよ」

「そうですか……」

「それにここから先の道は、はっきりしてないし……」

「迷わないんですか……」

「さあね。運次第よ」

「……」

氷璃がこんなことを言うとは思っていなかったなので聡一は少し驚いた。

しかし美羽はそんなに気にしていなさそうだ。

袖月は、少し驚いているようだが何も言わない。

氷璃の妹である美羽が気にしていないのだから、いつものことなのだろう。

「あの……美羽さん……」

「氷璃のことなら心配しなくて大丈夫よ。こっちの森の中に知り合
いがいて、

その人に魔力について聞くみたいだから」

「そうですか……」

氷璃は一切迷うことなく、町はずれの門まで進んで行く。

こっちの門はとても簡単なつくりで警備員もいない。

昨日の森よりも危険だというのに、不思議だ。

その門を開いて氷璃は、森の中へと進んで行く。

まだ朝早く天気も少し曇っているので森の中は薄暗い。

「なんか不気味だね……」

袖月は聡一の着ている服を掴む。

「そうだな」

昨日通った森とは生えている木や草なども違い、苔むしている。

足下も滑りやすくなっており、少し危険だ。

頭上からは不気味な鳥の鳴き声も聞こえている。

「あの……ここ本当に大丈夫なんですか？」

「私も初めて来たからわからないわ」

氷璃は一度、来たことがあるのか迷わずに進んで行く。

「そつえば氷璃さんの知り合いがいるんですっけ？」

「うん。鍛冶師のおじいさんらしいわよ」

「鍛冶師ですか……」
「鍛冶師って包丁とか刀とか作る人のことよ？」
「はい。わかってます……」
そのとき横からサアアという音が聞こえてくる。
「なんですか……今の……」
「ちょっと危なそうね……」
音の聞こえた方向を見てみると黒い長い影が見える。
「なんですか……これ……」
「ちょっとヤバいわね……氷璃、どうすればいいの？」
「やっぱり気絶させるしかないんじゃない？」
黒い長い影の正体は巨大な蛇の群れだった。
しかも目だけが黄色く光り、それ以外の部分は影そのものだ。
「私がやります！」
そう言っただけで袖月は魔法を使う。
重力を強くして蛇の動きを封じようとする。
しかし蛇の動きは変わらない。
「なに？この蛇……私にも種類がわからないわ……」
「氷璃がわからないんだったら、どうすればいいのよ！」
そう言いながらも美羽は風で蛇を切り裂こうとする。
確実に当たっているはずなのだが蛇の体をすり抜けていく。
「やっぱり影相手じゃダメなの……」
氷璃は蛇の増したから氷の棘を作り出して攻撃する。
この攻撃も蛇の体をすり抜け、蛇はどんどんこちらへ近づいてくる。
「そうだ！水の魔法……」
聡一は、ふと新しく使えるようになった魔法の事を思い出す。
そして、その魔法を使うことにする。
ものすごい勢いで水が蛇に向かって飛んでいく。
水の勢いはとても強く、まわりの岩をも切り裂いていく。
しかし、それでも蛇には全く傷がついていない。
「本当にどうなってるんですか……」

そのとき蛇がいた場所で爆発音とともに煙が発生する。

「今度はなに……」

煙が少しずつ消えていき、そこに人影が見える。

「また、この蛇が出たのか……」

「誰？こんなところに人がいるとは思えないけど……」

「大丈夫。私の知り合いだから」

どうやら、この無数の刀を背負っている男が氷璃の知り合いのようだ。

それなら敵ではないということなので安心できる。

「久しぶりね、リュウ！」

「おお、その声は……」

「まさか私のこと忘れてたってことはないわよね？」

「忘れてねえよ。あの氷の魔法使いだろ？たしか名前は……」

「やっぱり覚えてないんだ？」

「ちょっと待て！今、思い出す。でも俺のことをリュウって呼ぶってことは

絶対に名前を知っているはずなんだが……」

「もういいわ。氷璃よ。思い出した？」

「ああ！あいつか！俺が刀作るのに冷たい水が必要になったときに氷を作って、その代用してくれた……」

「やっと思い出したわね。じゃあ今すぐ、リュウの住んでいる小屋まで案内して」

「なんだよ、急に……」

「事情は歩きながら説明するから、お願い」

「わかったよ……ちゃんとついてこいよ。それでなにがあったんだ？」

「宇宙で初めて作られた魔力がこの世界中に散らばっているわ。数は全部で十個」

「ほう……そりゃ、すげー話だな。それと俺に会いに来たことには関係あるのか？」

「私の調べによると、このあたりに魔力があるはずなのよ」

「そうか？俺は全然気付かなかったぞ？」

「魔力自体についてじゃなくて、森の中で変わったことはないの？」

「うーん……あるとすれば、さっきの影みたいな蛇が出るのかな」

「あの蛇はなんなの？」

「俺にもよくわかんねーけど、刀を使えば簡単に始末できるぞ」

「じゃあ、魔法が効かなかったのは……」

「物理攻撃しか効かないからじゃねーの？」

「それって、前に聡一君が戦った石像と同じ……」

「まあ、いい。ほらここが俺の住んでいる小屋だぞ」

小さな木製の小屋がある。

壁などには苔が生えていて、形もあまりよくない。

そしてまわりに生えている木々には無数の刃物がつきささっている。

「それで魔力について俺が知ってることは全部話したわけだけど……」

…

「もうひとつお願いがあるわ」

「なんだよ？」

「聡一君と袖月ちゃんに武器を作ってあげて」

「お？久しぶりに依頼が来たな！任せとけ！」

「先に言っておくけど二人とも少し特殊な魔法使いだからね」

「そうか……まあいい。それにあつた武器を作ればいいんだろ？」

「そういうこと」

「よし、じゃあその少年少女ついてこい」

「はい」

リュウは小屋の中へと入っていく。

小屋の中には小さなベッドと刀を作るための道具と材料が置かれているだけだ。

「あの……」

「言い忘れてた。俺は龍虎だ。この名前で呼ぶなよ？」
「え？」

「女っばいだろ。だからリュウって呼べよ」

「はい……」

「それでお前らは？」

「聡一です」

「袖月です……」

「じゃあ聡一、使う魔法を説明しろ」

「はい。二つ以上の魔法を合成する魔法です」

「それはつまり二つ以上の魔法を合わせて新しい魔法を作るっていうことでいいんだな？」

「はい」

「じゃあ、ちよっと待ってる。前から使いたかった素材がやっと使える……」

リュウは少し笑っているように見える。

小屋の隅にある小さな石でできた階段を下りていったリュウはすぐに戻ってくるが、手には黒く輝く石が持たれている。

「それは、なんですか？」

「ちよっと前に拾った常に魔力を発し続けてる石ころだよ」

「それって……」

「正体はわからなねーけど、お前なら上手く使えるんじゃない？」

「そうですか？」

「まあ試してみる。ダメだったらすぐに作り直すから」

「わかりました」

リュウが黒い石をハンマーで叩くと黒い粉が取れていく。

「これで、この石ころの正体がわかるぞ」

黒い粉が取れるにつれて、石は白い光を放ち始める。

「この輝き……」

その光には見覚えがある。

前に戦った魔力と同じ輝きをしている。

「もしかして……」

急に魔力の光が強くなる。

「なんだ……」

その光を見た瞬間、柚月と聡一が倒れる。

「君……もう二つも魔力を集めたんだ……」

「まさか……」

「そう。僕が三つめの魔力」

「どうする気だ……」

「おっと、僕は戦う気はないからね」

「じゃあ、どうするんだよ」

「君の武器になる」

「武器……」

「そう。リュウさんに武器にしてもらうの。そうすれば君には魔法だけじゃない

強力な武器が手に入るでしょ？」

「確かに……」

「じゃあ、そういうわけでよろしく」

光の強さが元に戻る。

そして柚月とリュウが立ちあがる。

「なんだよ……今の光……」

「聡一君……もしかして今の……」

「うん……魔力だった……」

「大丈夫なの？」

「大丈夫。俺の武器になってくれるってさ」

「そう……」

ここまで簡単に三つ目の魔力が手に入るとは思っていなかった。

しかし戦わずに済んだことは、とてもよかった。

あと七つもあるのだから、できる限り戦闘は避けたかったからだ。

「よし、じゃあ気を取り直して……」

リュウはもう一度ハンマーを握り、魔力を叩き始める。

「こんなもんか……」

ハンマーを置くと、今度は金属の塊を持ってくる。

「それ、なんですか？」

「これは剣の刃の部分になるものだ。」

今から、形を変えていくからなんか要望があればそのとおりにするぞ」

「任せます」

「そうか。じゃあ、刀のような形状と剣のような形状どっちがいい？
これだけは決めてくれ」

「なにが違うんですか？」

「刀は刃になっっているのが片面だけ。剣は両方とも刃になっている」

「剣でお願いします」

「了解。ついでにそっちを選んだ理由は？」

「両方とも切れる方が得した気分になるじゃないですか」

「お前、おもしろいやつだな」

リュウが少し笑っているように見える。

「よし、じゃあ今から作るから待ってる」

リュウは小屋の置くにある暖炉のような物の中に金属の塊を入れる。十秒程してから、熱された金属の塊を巨大なハサミのような道具で取り出し、

それを横にあつた台の上に乗せる。

金属の塊に素手で触れると、形を変えていく。

「熱くないんですか？」

「熱いよ。でもこうしないと俺の魔法は役に立たないからな」

「どんな魔法なんですか？」

「金属の形を変えられるんだよ。でも少し熱さないとダメだから戦闘には使えない」

これでリュウが鍛冶師をやっている理由も納得できる。

金属の塊はどんどん形が変わっていき、少し剣の形に近づいてきた。そのとき真ん中に穴を開ける。

そしてリュウは立ち上がり、もう一度地下室に入る。

次は別の金属を持つてくる。

それも同じように暖炉で暖めて形を変える。

魔力を金属を塗るようにして包み込み、一つの球体を作る。

剣の真ん中に開けておいた穴に金属を塗った魔力をはめる。

「よし、これで中心部は完成だ」

金属の形を変えられる魔法のおかげなのか、ここまでの作業がとても速く終わった。

「あ、一つ忘れ物」

リュウはまた地下室に入っていく。

戻ってくると、また金属と丸みを帯びた石を持つてくる。

「あとは、この金属で刃を作ってくつつけて砥げば完成だ」
持つてきた金属は暖炉に入れずにそのまま形を変えていく。

そして剣の中心になる部分のまわりにくっつけていく。

「金属同士をくっつけうことも可能なんですか？」

「まあな」

そして丸みを帯びた石で刃を砥いでいく。

「よし。完成だ。とりあえず持ってみろ」

「はい」

剣の形は少し厚く、重い。

真ん中には魔力の塊が包まれた球体も埋め込まれている。

「重いですね……」

「そのくらい耐える。っていうか慣れる」

「私の魔法を使ってみたら？」

「そのてがあつたか」

剣から常に魔力が発し続けられているということは、

その魔力と袖月の魔力を合成して剣自体にかかる重力をなくすればいいということだ。

「すげー これならなにも持っていないのと同じだ……」

「どうだ？ 気に入ったか？」

「はい。ありがとうございます」

「次は、そっちの少女の番だ。なんの魔法を使うんだ？」

「私は……重力を操る魔法です」

「また、おもしろい魔法だな。じゃあ重さは考えなくていいか？」

「はい」

「よし。待ってる。いいのが思いついた」

リュウは地下室に行こうとする。

「……物運ぶの手伝ってくれないか？」

「はい」

聡一と袖月もリュウについていき地下室に入る。

地下室は意外と狭く壁にある棚にたくさん金属が収納されている。

「今から出すやつ全部、持ってたてくれ」

「はい」

リュウは地下室を一周するようにまわり必要な金属を出していく。その種類は、とても多く数十種類はある。

「こんなに使うんですか？」

「おう。でもたくさん使ったことは、とても重くなる。

でも、その分さまざまな金属の性質をあわせ持つ強力な剣になるんだぜ」

「そうなんですか……」

「あと、組み合わせ方も難しいし量の調整も難しいから、さっきのように、すぐには完成しないぞ。これで全部だ。持ってけ」

「はい」

聡一は金属を持つ。

一つ一つが小さいため、一度に持てるのは五つほどだ。

「意外と重いですね」

「えーと……少女の方、魔法を使ってこれを運んでみてくれないか？」

「はい」

柚月が魔法を使うと金属はとても軽くなる。

「おお！すごいな。これなら大丈夫だ」

三人で使う金属を一階に運び、わかりやすいように並べる。

「サンキュ。じゃあ作り始めるぞ。まず少女、どんな形状の武器がいい？」

「私は……なんでもいいです……」

「じゃあ大量の武器をまとめて持ち運びできるようにするから。重量はどんなにあっても関係ないんだろ？」

「はい」

リュウは一つの金属を手に持ち、暖炉に入れる。

act20 武器の完成

「そういえば少年の魔法は他人の魔法をパクれるっていう解釈でいいの？」

「そういえば一度吸収した魔力はずっと使えます」

「すごいな。じゃあ、また別の武器が欲しくなったら俺のところに来いよ」

「はい」

金属を暖炉から取り出して形を変えていく。

その形は一枚の刃のようだ。

「なんの武器を作ってるんですか？」

「槍だよ。軽くできるんだったら飛び道具にも使えるだろ」

魔法を使っている袖月や、それと同じ魔法を使えるようになった聡一も気付けなかったことにリュウはすぐに気づいている。

このまま色々なことを教われれば様々な戦い方ができるようになるだろう。

「こんな感じでいいか？」

リュウは槍の先端部分を持って袖月に見せている。

「あの……私、武器のことあまり知らないです……」

「そうか……じゃあ誰にでも使いやすい形のものにしておくれ」

「ありがとうございます」

槍の先端部分はかなり大きなものだった。

それをさらに砥ぎ、もう一度地下室に入っていく。

地下から持って来たものは鉄パイプのようなものだ。

それに、さっきまで砥いでいた先端部分をつける。

見た目はとてもシンプルな感じだ。

「ちよつと持ってみ」

リュウは袖月に槍を渡す。

「重いですけど、魔法使えば大丈夫です」

「そうか。持ちづらくないか？」

「大丈夫です」

「じゃあ、これでオツケーっと」

そう言うところリュウは先端部分はずす。

「なんではずすんですか？」

「これに他の金属を混ぜて、さらに鋭いものにするんだよ」

「あのー ちよっといいですか……」

「おう。なんでも言ってくれ」

「もう少し見た目をかわいくできませんか？」

「かわいく？任せとけ。そのかわり他の注文は受け付けないぞ？」

「はい」

リュウは鉄パイプを置き、地下室から持ってきておいた金属を

暖炉に入れて熱したあと素手で金属を混ぜていく。

「言い忘れてた。かわいいデザインにするんだったら一本しか作れないけどいいか？」

「大丈夫です」

リュウの表情が少し変わり、混ぜ合わせた金属の形を変えていく。

どうやらデザインには、かなりこだわりがあるようだ。

そう考えると、聡一の剣もかなり考えられたデザインになっている。槍の先端部分はどんどん形が変わっていく。

もう普通の槍の先端とは思えないほどだ。

そして今の形は魔法の杖の先端のような形だ。

袖月がかわいいと思うかは別として、女の子ならば一度は憧れるであろう

魔法少女が持っている杖と大差ない。

次は鉄パイプだ。

その部分にも様々な装飾を施し、見た目をよくしていく。

十分ほどの間、小屋の中は金属がこすれ合う音しか聞こえていなかった。

「よし、完成だ！こんなにデザイン考えるの苦労したのいつぶりだ

よ……」

完成したものは最初に見た鉄パイプに刃をくつつけただけの槍と全く違う。

「とうか物理攻撃に使えるとは思えないような形状をしている。

「すごく、かわいいですね」

「そうか。喜んでもらえて嬉しいよ」

「あの……これ、本当に武器になるんですか？」

「なるよ。先端はちゃんと斬れるようになってるから」

「そうですか……」

「そういえば美羽さんと氷璃さんは？」

「あれ？魔力探しに行くって言ってなかったっけ？」

「そうだっけ？リュウさんについてきて、この小屋についたときにはもういなかったよ……」

「そう言われれば……とりあえず小屋から出るか」

「お？もう帰るのか？」

「はい。ありがとうございます」

「おう。また来いよ」

小屋から出たが美羽と氷璃の姿は見当たらない。

「どこ行っただら……」

「近くだけ探してみようか」

「うん」

聡一と柚月はリュウの小屋が見える範囲で美羽と氷璃を探す。

地面を見てみるがわかりやすく足跡が残っているわけでもないのを探しようがない。

「あれ？もう完成したの？」

背後から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「美羽さん！」

「結構、早く終わったのね」

「はい。どこ行ってたんですか？」

「氷璃と魔力を探しに行ってたんだけど、結局見つからなかったわ」

「それなら大丈夫です。ここにありますが」

リュウに作ってもらった剣を指差し美羽に言う。

「どういうこと？」

「魔力を持っていたのはリュウさんだったんです」

「えーと……でもあの人は魔力のことを知らないって言ってたけど

……」

「本人も気づいていなかったただけです。偶然拾った石ころが魔力の塊だったんです」

「そんなことがありますの？」

「でも実際、魔力はこの剣に込められているので……」

それに石が喋るわけじゃないですか」

「それなら、それが魔力で間違いないということね？」

「はい。氷璃さんはどこですか？」

「もうすぐ来ると思うけど……」

「あれ？もう終わったの？リュウの鍛冶も早くなったわね」

氷璃は美羽がいる方向とは逆の方向から、聡一たちのほうに来る。

「魔力は、もう見つけましたよ」

「そう。よかったわ。この調子なら次の魔力まで行けるわね」

「まだ、この近くにあるんですか？」

「今日中につくかどうかはわからないけど、この森の奥にもう一つあるわ」

「わかりました」

「それにしても袖月ちゃんの持つてるの、かわいいわね。」

それ、リュウがデザインしたの？」

「私がかわいくしてくださいって言ったたら、こうしてくれました」

「そう……リュウにそんな才能があったのね」

「聡一君の剣も見た目いいし、使いやすそうだね」

「はい。でも凄く重いですよね……」

「本当に戦いで使えるの？」

「この剣からは常に魔力が発せられているので、袖月の魔力と合成

すれば

剣の重さを変えることができます」

「これで魔法も物理攻撃もできるようになったってわけね」

「はい」

「よし。じゃあ次の魔力に向かいますか」

氷璃は森の奥に向かって歩き始める。

まわりは木ばかりなので本当に進んでいるのかわからない。

そして、いつ何に襲われるかもわからない。

サアア……

さっき蛇が現れたときと同じ音が聞こえてくる。

act 21 蛇の再来

「もしかして……」

音の聞こえたほうを見ると案の定、影の蛇がいる。

今回の蛇は大きさが普通ではない。

長さはどれだけあるか、見えないのでわからないが

地面から頭までは三メートル以上ある。

「なんで、こんな大きい蛇がいるんですか……」

「どつちにしろ戦わないとダメね……」

これだけ大きな蛇が近くにいることに今まで気付かなかったというのが少し不思議だ。

しかし今は、この蛇との戦闘に集中しなくてはいけない。

聡一は背負っていたリュウが作った剣を抜き、蛇に向ける。

それでも蛇は全く動揺していない。

口を大きく開けると、そのまま聡一に噛みつこうとする。

噛みつくとはいつても、この大きさならばのみ込まれてしまう。

剣の攻撃範囲に蛇の頭が入るタイミングに合わせて、思いっきり剣を振り下ろす。

蛇の頭からは大量の血が流れ出している。

姿は真っ黒な影だが流れ出している血は赤。

それも、とても綺麗な赤だ。

それでも蛇は聡一をのみ込もうとしている。

ザンッ！

なにかが風を切るような音を出し、飛んでいく。

その瞬間、蛇の頭部は少しずれて聡一は攻撃を受けずにすんだ。

蛇の頭部を見るとかわい装飾が施された棒のようなものが見えている。

「聡一君、大丈夫！」

袖月は真剣な表情で聡一に叫んでいる。

「な……なんとか……」

「動きは私が封じるわ!」

氷璃が言うと蛇の上に無数の氷でできた杭ができる。

その杭は蛇に向かって一気に落ちていく。

これで蛇の動きはほとんど封じた。

あとは聡一が剣を使ってとどめをさすだけだ。

剣を振り上げる。

そのとき蛇の体の横から何体もの蛇が出てくる。

その蛇は巨大な蛇にくっついたまま触手のようだ。

触手の先端も蛇の顔になっており、噛まれれば危険だろう。

そう判断した聡一は攻撃の対象を触手に移す。

横に剣を振ると触手を簡単に切り落とすことができたが、すぐに再生してしまう。

「これは厳しいかも……」

聡一がつらく感じているとき、柚月は黒い球体で、氷璃は氷で剣を作り

美羽はかまいたちを発生させ、蛇に攻撃している。

そのおかげで無数の触手をどんどん切り落としていく。

柚月、氷璃、美羽の三人が隙を作ってくれている間に

聡一は本体の巨大な蛇めがけて剣を振り下ろす。

確かに当たった。

そして大量の血も流れている。

それでも触手は再生を続け、蛇の頭は動き続けている。

「どうなってるんだよ……もしかして死なないのか……」

ふと思いついたことだが、その可能性がゼロというわけではない。

もしもこの蛇が死なないというのなら、この場所から逃げるか

永遠に戦い続けなければいけない。

しかし前者の逃げるといふ選択はとても危険だ。

巨大な蛇にあったときに気配を感じなかったということは

不意をつかれるか、追いつかれてしまう可能性がある。

「だんだん触手の再生が遅くなってませんか？」

「なってる！もう少しだ！」

触手と戦っている袖月と氷璃が言うのだから間違いない。

たとえ死なないとしても疲れがあるのなら、なんとかなる。

できる限り触手の数が減ったとき一気に切り刻む！

聡一はそう決めた。

再生能力が弱まっているときに体を切り刻めば、再生されずに済むかもしれない。

触手の再生速度から再生能力が半分くらいになっているのがわかる。これくらいは量ならば攻められる。

聡一は蛇の側面に走り込み、胴体に猛スピードで切りこむ。

深く当たったため手に不思議な感触を感じる。

完全に切り落とした。

蛇の胴体は大量の血とともに真つ二つに裂けていく。

地面に叩きつけられた蛇の体は、まだ動き続けている。

完全にとどめを刺さなくては……

聡一は、もう一度蛇に向かって切りかかる。

今度は一発ではなく連続して。

氷の杭が蛇の動きを止めていたおかげか全ての攻撃が当たったいる。

蛇の体は切り裂かれ、肉塊と化している。

「もう……大丈夫だよな……」

それから蛇が動くような様子はなかった。

しかし影である姿はどんどんぼやけていく。

ほとんど形がわからなくなったとき、液体のようになってあたりに散らばった。

「どうなってるんですか？」

「私にもわからないわ。こんなふうになるなんて……」

「もしかして生物じゃないとか？」

「ありえるかもね。生命力も再生能力もあいえないほどだったし……」

……」

「でも血は出てましたよね」

「うーん もしかしたら、もう一つの魔力がなにか影響を与えているのかもしれないわね」

「なら早く見つけないと、この森に悪影響が出ますね」

「そうね。急ぎましょう」

氷璃は奥に向かって歩いていく。

その後を聡一、袖月、美羽の順でついていく。

まわりの様子を見ながら歩いていく。

さっきのように気配に気づけないまま危険な生物にあっわけにはいかない。

植物や動物が動く音が聞こえるたびに、その方向に注意するためなかなか進めない。

act 22 怪鳥

キイイイ……

空から不気味な鳥の鳴き声が聞こえている。

その鳴き声は、どンドン聡一たちの方へ近づいてくる。

「あれ、なんですか？」

空には巨大な鳥の影がある。

「もしかして、私たちを狙ってる……」

氷璃の予想は的中した。

鳥は一気に聡一たちの方へ近づいてくる。

さっき戦った蛇と同じように体は影でできている。

キイイイ！

鳥は奇声を発しながら爪を振り下ろす。

「今度はこいつと戦うの……」

爪の攻撃範囲は狭かったため避けることはできたが、相手は空を飛べる。

その点では、とても不利だ。

また爪で攻撃をしてくる。

「やっぱり、やらなきゃダメね……」

氷璃は氷の盾を作る。

鳥の爪は鋭く、氷の盾は簡単に切り裂かれてしまった。

「どうすればいいんですか？」

「袖月ちゃん！武器！」

「はい！」

袖月は蛇に槍を投げた時と同じように鳥に向かって槍を投げる。

投げる瞬間は極限まで軽く、投げた後は対象に向けて一気に加速させる。

その速度は目にもとまらないという表現がふさわしいほどだ。

しかし、その速さも鳥の動体視力には敵わず爪で弾かれる。

「なんで当たらないのよ……なら私が！」

美羽はかまいたちを発生させ、鳥の体を切り裂こうとする。

鳥は大きく羽ばたき、強風を発生させながら上昇していく。

「飛ぶか……そうだ柚月ちゃんの魔法なら……」

「試してみます！」

柚月は上空の鳥にかかる重力を大きくする。

それでも鳥の動きは変わらず空を飛び続けている。

「どうします？」

「静かに。相手に集中しないと、いつ攻撃されるかわからないわよ」

氷璃は飛んでいる鳥をジッと見つめている。

キィィィ！

鳥は、また奇声をあげて一気に降下してくる。

その体制から一気に聡一たちを仕留めようとしていることがわかる。

鳥は翼を閉じ一つの矛となつて聡一たちに襲いかかる。

聡一はその攻撃にあわせて攻撃をするために剣を構える。

「聡一君！ダメ！」

氷璃が大声で叫び、聡一の前に巨大な氷の壁ができる。

氷璃は鳥の突進がどれくらい威力なのか、見ただけでわかった。

それに対して聡一が攻撃をすれば、たとえ当たつたとしても聡一の

身が危険なことも。

鳥は速度を落とすことなく氷の壁に突っ込んでくる。

氷の壁はかなりの厚さなのだが鳥の突進には耐えられず、すぐに砕

ける。

しかし鳥は氷の壁にあたつたため速度が一気に落ちた。

この速度ならば楽々攻撃することができる。

聡一は剣を振り、鳥の爪を切り落とそうとする。

鳥はその攻撃に素早く反応して爪でおさえる。

聡一の剣と鳥の爪がこすれ合つて火花が散っている。

その隙に柚月が槍を鳥の翼の部分にむけて投げつけた。

槍は翼に命中し、鳥の羽根が飛び散る。

影とはいえ、その羽根が飛び散る姿はとても美しく見える。
キィィィー!!

鳥の悲鳴からは、かなりの苦しみを感じられる。
蛇のときは弱点がわからないまま戦いが終わったが、この鳥の場合
は翼が弱点のようだ。

ダメージも大きいうえに飛べないようにできる。

「今のうちに終わらせるよ!」

氷璃が使った魔法は大量に氷の針を作り出すものだ。

その氷は鳥の体中に突き刺さっていく。

鳥からは、もう奇声すら聞こえない。

ゆっくりと地面に倒れていき、液体状になって消えていく。

「意外と楽に終わったわね」

「柚月のおかげだな」

「私はなにもしてないよ……」

柚月は地面に落ちている槍を拾う。

「この調子だと、まだ襲ってきそうね」

「そうですね」

聡一たちは、さらにまわりを警戒しながら森の奥へ進んで行く。

「さっきの蛇もそうだけど今の影でできた鳥、絶対に誰かが操って
るわ」

「なんでわかるんですか?」

「攻撃が普通じゃなかった。」

普通の鳥なら空中からの攻撃は、もっと反動がないようにするわ」

「そうですね?」

「まあ、あの鳥は普通の鳥じゃなかったから関係ないかもしれない
んだけどね」

「蛇のほうは、なにがおかしかったんですか?」

「噛みつき方よ。あんな地面に当たるような噛みつき方は絶対しな
いわ」

「もしかして動物に詳しいんですか?」

「そりゃあね。ずっと動物と暮らしてたから」

「そうなんですか……もつと色々な話を聞かせてくれませんか？」

柚月は、こっちの世界の動物に興味を持ったらしく氷璃から色々な話を聞いている。

森の中は相変わらず不気味なままだが柚月と氷璃はとても楽しそうに話している。

とても、いつ敵に襲われかわからない状態とは思えない。

「来たわね……」

氷璃の目つきが変わった。

影の鳥と戦ってから、まだ五分も経っていないというのに次の敵が現れたようだ。

「まだ少し遠くにいるので、はっきりとした姿は見えない。」

「今度は、なんですか？」

「わからないわ。でも蛇とか鳥みたいなあまいものじゃないわ。少しずつ影が近づいてくるにつれて姿が見えてくる。」

猛々しい鬣に鋭く光る目、太い四本の脚。

その姿は、まさにライオンそのものだ。

「今回は本当にヤバいですよ……」

「なにビビってんのよ」

氷璃は氷の杭を作り出し、ライオンにむけて放っていく。

しかしライオンは当然のように避けて、

瞬間移動とほとんど変わらない速度で聡一に飛びかかる。

聡一は全く気づけていなかったが剣を構えていたおかげで、直撃はせずにすんだ。

「くそ！」

目の前にいるライオンにむけて剣を横に振る。

キンッ！

ものすごい金属音が鳴り響いく。

ライオンの爪は鋼鉄とやら変わらないようだ。

その隙に氷璃が氷の杭を放つがライオンはそれにもすぐに反応し、爪で切り裂く。

こんな状態ならば絶対に勝てるはずがない。

「こいつは俺に任せてください……」

「なに言ってるの……無理に決まってるでしょ！」

「大丈夫です……」

聡一は剣を構えなおしてライオンに斬りかかる。

ライオンは、それを爪でおさえて逆の爪を使い聡一を切り裂こうとする。

聡一は剣の長さを利用して、うまくライオンの攻撃を防ぐ。ライオンが怯んでいる隙に柚月の魔法を合成しライオンの顔の位置まで飛ぶ。

剣を頭の上に構えて剣にかかる重力を一気に上げる。

そうすることにより剣は地面に向かって一気に落ちていく。

それに掴まっている聡一も同時に落ちる。

その攻撃をライオンは爪でおさえたものの、

剣の威力はとても強く、爪を切り落としさらに額にも浅い傷をつけた。

「聡一君、その戦い方って今見つけたの」

「はい」

「すごいわね……」

爪を切り落としたからなのかライオンからは戦意を感じられない。

「悪いけど、もう終わりだ……」

聡一は死を覚悟したライオンに対し、頭に一撃を与えとどめをさす。

「早くしないと、もっと危険な敵が現れるかもしれません。急ぎましょう」

「そうね」

ライオンは分裂して消えていく。

「お前ら強いんだな」

「誰だ！」

正面から聞こえてきた声からは聡一たちを挑発しているかのように感じられる。

「俺が魔法で作ったやつら、倒しただろ？」

「もしかして今、戦ってたライオンも……」

「そうだよ！そいつも俺の魔法だ！」

「なんで私たちを襲わせたのかしら？」

氷璃の表情はとても怖い。ものすごい殺気まで感じられる。

「邪魔だからだよ！勝手に人の森に入ってきて来てんじゃないぞ！」
「ここは、あんたの森じゃないわよ！」

氷璃は男のもとへ走り込んで行く。
その速さと同時に使っている魔法の量や種類は、凄まじいもので本気でこの男を殺そうとしていることがわかる。

ここまで何度も動物に襲われたことに対する怒りがあつたからだろう。

氷で作られた剣で男の体を横に斬り払う。

完全に腹部に当たった。男の上半身が少し浮く。

「さすが氷璃！これくらいの相手だったら楽勝だね」

「まだ……」

「え？」

「まだ終わってないわ……」

「その通り。俺の魔法は「自然融合」だからな！」

「自然融合？」

「私にもわからないわ。でも殺せないんじゃない……」

「大丈夫。ちゃんと決着はつくから。お前らが死んでな！」

黒い液体が男の足下に集まっていく。

その液体は蛇や鳥を殺した時に発生したものと同じだ。

形がどんどん変わっていき、少しずつ姿がわかってくる。

ライオンの体に巨大な翼、そして龍のように巨大な尻尾……

今までに戦った蛇と鳥とライオンが混ざったかのようだ。

「まさか自然融合って……」

「今わかってもおせーよ。それに今使ったのが自然融合の全てでもねーし」

巨大な三匹の動物が融合した影は、腕を振り上げ襲いかかってくる。

「こんなのと戦うのは、もう慣れてるよ！」

キンツ！と金属音が鳴り響き、聡一の剣が擦れ合い火花が散っている。

「さっきのと同じ強さだと思ったのか？無駄だよ。バカが！」

まわりの木の影が動き始め、浮き出る。

「一人に一体ずつ相手を用意してやるよ」

浮き出た木の影は二つに分裂して、それぞれ柚月と美羽に襲いかかる。

それに反応して柚月と美羽も魔法や武器を使い応戦している。

「氷の魔法使い、これでやっと集中して戦えるな」

「あなた、なにが目的なのよ」

「特にねーよ。ただ魔法が使えるようになったら戦いたいもんだろ？」

「使えるようになった……」

「そんなことどうでもいいだろ！いくぞ！」

男の足下から影の塊が飛んでくる。氷璃はそれを氷で突き刺して相殺する。

攻撃後の隙に氷璃は男の足下に氷の棘を発生させる。

「うわー！」

「まさか私が魔法を使ったことに気づかなかった？」

「うるせー！」

男は氷璃にむかって殴りかかろうとする。

「今度は素手？」

氷璃は男の拳を軽く避け、腹部を膝で蹴りあげる。

しかし、その蹴りは男の体をすり抜けていく。

「え？」

男は一瞬、不気味な笑みを浮かべて蹴りがすり抜けて隙だらけの氷璃の背中を殴る。

「うっ……」

「所詮、女だったらその程度だよな！」

「黙れ……」

氷璃が静かに呟くと男の左胸には氷の棘が突き刺さっている。

聡一、柚月、美羽に襲いかかっていた影も消えている。

「氷璃……落ち着いて！」

「うるさい……」

氷璃は地面に膝をついている。

そして苦しそうにハアハアと息を荒げている。

「なんとか大丈夫そうね……」

「どうしたんですか？」

「氷璃にも色々あるのよ……」

「そうですか……」

「……一応、説明するわ。これからのためにも……」

「はい」

「氷璃が本気になれば相手が魔法を使えなくすることくらい簡単なのよ。」

それで今は魔法を使えなくしないと殺せないって確信したから使ったんだと思う」

「それで氷璃さんは、こんなにつらそうなんですか？」

「多分ね。私もそこまで詳しいことはわからないから」

「ごめん……迷惑かけたわね……進みましょう……」

氷璃はフラフラしながらも森の奥へと進んで行く。

そのあとを聡一たちもついていき、魔力がある場所を目指す。

「さっきの私の魔法どうだった？」

「魔法って……」

「相手が魔法を使えなくしたやつよ」

「あれ、魔法なんですか？」

「うん。私が使える魔法の中でも相当、強力なものよ」

「どういう魔法なんですか？」

「相手が魔法を使うのに一番集中するところを凍結させて魔法を使えなくしてるの。」

「それで、さっきのは上手くいった？」

「……多分、成功してたと思います」

「そう……ならいいんだけど、まだ完璧じゃなくて……」

「すごいですね」

「そんなことないわよ。相手が集中している場所を把握しないといけないし……」

「それでもすごいですよ」

「そうかしら？ありがとうございます」

「あの……次の魔力までどれくらいですか？」

「もしかして、さっきの戦いで疲れた？休もうか？」

「大丈夫です」

「そう……あまり無理しなでね。あと魔力の場所まで今日中につくのは無理だと思うわ」

「そうですか……」

「柚月は少し怖がっているようだ。」

「無理もない。何度も猛獣に襲われたのだから。」

「大丈夫よ。もう襲われることはないと思うし……」

「ありがとうございます……」

「まわりの様子も一切変わることなく、どこまでも不気味な森が続い

ているようだ。

一応、地面は道のようになっているがそれでも歩きづらい。

「なんか、さつきから同じ場所を歩いてるような気がしない？」

「そうですか？森なんだからまわりの景色が変わらないのは普通なんじゃないですか？」

「それでもおかしいわよ。ほら、あの木さつきも見たでしょ？」

氷璃が指差した先には、他の木とあまり変わらない木が生えている。

「わかりませんよ……」

「じゃあ、仕方ないわね。こうしましょう」

氷璃は氷の杭を道の真ん中に打ち付けた。

「これで、もう一回ここを通ればわかるでしょ？」

「はい」

氷の杭を残して、もう一度森の奥へと進んで行く。

「あの…… やつぱり普通に進んでるんじゃないですか？」

「うーん…… 私が勘違いしてただけかも……」

氷の杭を打った場所から、もう五分以上歩き続けている。

それでも氷の杭がある場所にはつかない。

「やつぱり同じ場所を歩いてみたみたいね」

「なんでですか？氷の杭はありませんよ？」

「あるわよ」

「どこですか？」

「ほら」

氷璃は地面に落ちているなにかを拾い、聡一に見せる。

「これって……」

「私を作った氷の杭の中心部よ」

「溶けたってことですか？」

「うん。でも完全に溶けないように中心だけ強力な魔力で作っておいたの」

「でも、この気温だったら溶けるのにもっと時間かかりませんか？」

「もしも誰かが私たちをこの森を永遠に歩かせようとしていたら？」

「そいつが氷を溶かそうとした……」

「そういうこと。道もずつとまっすぐだったし、こんなことは魔法でしかできない」

「っていうことは、この近くに魔法使いがいる……」

「そういうこと。動いても無駄だから、ここで様子をみましょう」
「はい」

聡一たちは道の端に腰をおろし少し様子をみると同時に休憩するこ
とにした。

「袖月……どうした？」

「な……なんでもない……」

袖月はなにかに怯えているかのように震えている。

「怖いのか？」

「うん……」

「大丈夫。約束しただろう？俺が守るって……」

「ありがとう……」

聡一は袖月の手を握り、袖月を落ち着かせる。

「まだ姿をみせないか……」

「どこにいるのかわかるんですか？」

「全然わからないわ。でも絶対いる……」

「……！」

袖月？氷璃さん？美羽さん？」

不思議なことに今まで話していた氷璃もいなければ、手を握っていた袖月の姿もない。

act 25 元の場所

「なんで急に……」

さらにまわりにあるものは全て今まで見ていたものと全く違う色になっっている。

「場所が変わった……」

ヒュッ！

なにかが風を切る音が聞こえる。

その音は聡一に近づいていく。

カン！

飛んできたものに気づいた聡一は剣を横むきに出し盾のように構え飛んできたものを弾く。

「葉っぱ？」

地面に落ちたものは確かに近くの木の葉だった。

しかし先端は鋭く尖っており、さらに木の葉というような硬さではない。

なぜこんなものが飛んできたのか全く理解できない。

それに今まで見ていた葉は緑色のごく普通のものだった。

飛んできた葉の色は赤。

それも血に染まっているかのような恐ろしい雰囲気醸し出している赤だ。

ヒュッ！

また同じ音が聞こえる。

すぐにその方向を向き剣を構えるが、少し様子が違う。

聞こえてくる音の数がどんどん増えていく。

カン！カン！カン！カン！

全ての葉を弾き返しているが数は、さらに増えていく。

雨のように限りなく、突き刺さるように降り続けている。

今は全てを防ぎ続けなくてはいけない。

しかし必ずいつかやむときが来るはずだ。

そのときにまわりの木々を斬り倒し、葉が降ってくるのを止めればいい。

葉は止むことなく降り続けている。

聡一の腕には相当の疲労が溜まっていく。

もう剣を構えるのですら辛い。

もともととても重い剣だ。いくら重力の魔法を使っているが、それは自分の魔法ではない。そのせいで減らせる重さにも限界がある。

「くそ……」

どんなに聡一がつらいとしても、そんなに止めと願っても止むことなく降り続ける。

まるで木々が聡一を殺すために葉を降り続かせているかのような。木々が敵ということは、この森自体が敵ということ。

「どうすればいい……」

守りながら勝つ方法を考える。

「あなた、なんのためにここまで来たのかわかってる？」

「誰だ！」

誰もいないのに話しかけられたことに驚くより先に集中しているときに話しかけられた怒りで思わず大声で叫ぶ。

「そんなに怒らなくても……」

「……」

どこから聞こえているのかわからない声を相手にしている暇などない。

もう一度、降り続けている葉に集中し身を守る。

「そんな使い方しても無駄だよ」

剣の中心にある魔力を埋め込んだ場所が白い光に包まれている。

「なんだ……これ」

その光はどんどん大きくなっていき聡一の体を包み込む。

「せっかく魔力が込められてるんだから普通の剣と同じように使ってたって駄目なんだよ」

今でも葉が降り続けているがそれが剣に当たることはなくなっている。

「突然なんだよ……それにこの光……」

「自分で使ってて気付けなかった？」

「お前は誰だよ」

「手に持つてるのに気づけない？」

「まさか、あのときの魔力……」

「そうだよ」

「この光は……」

「別空間を作ったんだ」

「別空間？」

「そう。君が今いた場所は魔力によって作られた別空間。

その中にもう一つ別空間を作って一時的に外の空間から干渉受けないようにしてる」

「どうすればここから出られるんだよ？」

「この空間はとても強力な魔力で作られてる。

だから簡単に壊すことはできない。そして外側の様子を見ればわかるように、とても危険。

今、君を包み込んでいる空間もすぐに壊されちゃうだろうね」

「だったら、どうすれば……」

「壊す「方法」は簡単。君の合成魔法があればね。

でも「壊す」のは無理。今の君の魔力の量が少なすぎる」

「じゃあ、このまま死ねって言うのか？」

「いや、そういうわけでもないよ。君の魔力が増えればいいんだから」

「どうやって増やす？」

「さあ。それは自分で考えな」

「おい、ちよっと待て！」

「……」

返事が返ってくることはなかった。

「どうすればいいんだよ……」

別空間？魔力が足りない？魔力が足りないのなんてどうしようもないだろう……」

魔力……もしかして……」

剣の中心を見る。ここには魔力の塊が込められている。

「もしかして……」

その部分に触れると大量の魔力が体の中に流れこむようだ。これならば魔力は十分に足りるはずだ。

しかし、この空間を「壊す」方法がわからない。

「魔力を壊す……この空間を壊す……違う！もつといい方法が……」
今まで見てきた色々な魔法のことを思い出す。

どの魔法を使えばいいのか、どうすれば効果的なのか……

「そうだ……さつき氷璃さんは……」

影の動物を作り出していた人物と戦ったとき、氷璃は相手の魔力を凍結させていた。

しかしこの魔法は相手がどのように魔法を使っているのかを知ることが必要だ。

「できるかわからねーけど……やってみるか！」

剣から吸収した魔力を合成し、もう一度剣の中に戻す。

そして空間を壊すために剣を振り上げ、一気に斬りおろす。

斬れた……少しずつ硝子のようにまわりの風景が割れていく。

ただ今まで自分のまわりに壁があっただけのように感じさせられる。

「戻った……？」

確かにまわりの風景と色は戻っている。

しかし袖月の姿も氷璃の姿も美羽の姿もない。

さらに森の中は気味が悪いほどの静寂に支配されている。

さつきまで聞こえていた鳥の鳴き声も木々が揺れる音も聞こえない。

「皆も別の空間に飛ばされたのか？」

もしもそうだとしたら、とても危険だ。

さつき聡一がいた空間と同じようなものだったら……

一刻も早く見つけ出さなくてはいけない。
聡一はまわりを見まわしなにかヒントがないか探してみることにした。

さっきまで座っていた場所の背後に生えている木に氷の結晶がついている。

「氷璃さん……?」

この近くにいるかもしれない。

そんな期待をするが、いる場所は別の空間のはず。ここで、どんなに探そうと見つかるわけがない。

そのとき木が一気に凍りつく。

ものすごい冷気、これは間違いなく氷璃のものだ。

「もしかして、ここに……」

別空間を壊すときは剣の魔力を吸収し、振り下ろした。

もしかするとこちらの側からも別の空間に入れるかもしれない。

たとえ無駄だったとしても構わない。

どうせ見つけられないんだっいたらなにもしないよりはいい。

聡一は剣を思いっきり振り下ろし凍りついている木を切り裂く。

「入れるのか……?」

木の中に氷璃の姿が見える。

そして、その横には柚月と美羽が倒れている。

木の中に右手を入れてみると水面に手をつけたかのように表面が揺れる。

そのまま全身が中に入るように進んで行く。

一瞬、目の前が真っ暗になったように感じたが無事、中に入れたようだ。

この空間も、森とほとんど変わらない。

色の变化などもなく、何一つ違和感がない。

「氷璃さん!」

「聡一君……」

「大丈夫ですか? 柚月と美羽さんも……」

「その二人は、もうダメかもしれないわ……そして私たちも……」
「なにがあつたんですか？」
「魔力よ……私たちが回収しに来た……まさかこんなに恐ろしいものだったなんて……」
「じゃあ、この空間は四つ目の魔力が作り出したものなんですか？」
「うん……でも、この魔力には絶対に勝てないわ……」
「聡一君……逃げて……」
「柚月！大丈夫なのか？」
「うん……」
柚月は無理矢理立ち上がり槍を杖のように地面について立っている。
「いつまでも寝ていられないわね……」
美羽も立ち上がる。
服の汚れや傷などから、どれだけの攻撃を受けたのかわからないほど無数の傷がついている。
「四つ目の魔力って、どんな姿をしてるんですか？」
「……そんなことより、よく私たちを見つけたわね」
「はい。俺も別空間に飛ばされていたので……」
「そう……今回の魔力は完全に空間を操ってくるわ……」
「空間を操るっていうのは……」
「……詳しいことはわからないけど、魔法を使えば全て相手に操られる……」
さらに動こうとすれば、空間自体が変えられて動くことが無意味にさせられる……」
「なんですか、それ……」
「まあ、いいわ……どうせもう一度戦ったところで殺されるだけだから……」
相手の魔法を知る必要がなければ特徴を知る必要もないわ……」
「……諦めるんですか？」
「そうね……今回はかりはどうしようもないわ……」
「氷璃さんらしくないですね……」

「そうよ……氷璃、私だって袖月ちゃんだって立ちあがったんだから……」

「無理に決まってるじゃない！なんで負けたのかもわからない、相手の魔法もわからない。」

「そんなんじゃ何度戦っても結果は同じにしかない！」

「……戦わないでどうやって勝ち方を見つけるのよ。もう氷璃は来なくていいわ。」

聡一君、袖月ちゃん行きましょう」

「え？でも……」

「いいから、行くわよ！手遅れになっても知らないから！」

美羽は魔力がどこに行ったのかもわからないまま、歩きだす。

体に大量の傷があるせいで、進む速度はとても遅い。

「氷璃さん、行きましょう」

「……」

「わかりました……先に行ってるので、ちゃんと来てくださいね」

「すみません……」

袖月は氷璃に一礼する。

ゆっくり進んでいる美羽の後を聡一と袖月が追う。

一人残された氷璃は、その場にしゃがみ土を拾う。

「考えなしで戦っても無駄だって……」

氷璃は拾った土を思いつき握り、目を閉じる。

「氷璃さん……大丈夫ですかね？」

「大丈夫よ。それに氷璃が諦めるわけないでしょ？」

「ですよね……」

どこに行けば魔力に会えるのか全く見当がつかない。

ただ歩いてても空間自体を操られているとしたら無駄になってしまう。

ゴゴゴゴ……

突然、地面が激しく揺れる。

「地震ですか？」

「違うわ……これは魔力が来る……」

「また、あれが来るの……」

柚月の声は震えている。

「うわ！」

あまりの揺れに耐えきれず聡一はその場に倒れてしまう。

「これが、この空間を作り出した魔力……」

聡一が一瞬目を閉じた際に目の前に巨大な龍が現れていた。

体が光っているかのように、半透明だ。

「また戦わなくちゃいけないのよね……」

美羽は風を発生させ、龍の体を切り刻もうとするが龍に届いてすらいない。

「やつぱり空間を操られると魔法もあたらないわよね……」

柚月も黒い球体を作り出している。

そのまま龍のいる方向へ放つが、途中でなにかに吸い込まれるかのようにして消えていく。

「柚月の魔法でもダメかよ……」

二人の魔法が効かないのなら、それをもとにして作った聡一の魔法も効かないはずだ。

これでは、どうすることもできない。

剣で戦うという作戦もあるが、それではあまりにも危険すぎる。魔法が一瞬で消されてしまうほどのものだから、一発貰えば命の保証は無いだろう。

「そうだ……この空間を壊せば……」
前に空間を壊したときのように剣の魔力を合成する。
そして剣を振り下ろす。

しかし、ここは魔力の目の前だ。こんなに簡単に壊れるはずがない。
「これも駄目なのかよ……」
ツツツツツ！

ほとんど音は聞こえないが空気と地面が恐ろしいほど揺れている。詳しいことはわからないが超音波を発生させられたのだろう。そのせいか、まわりの空間が割れるように崩れていく。

「自分で作りだした空間を壊した？」
「ちよつと待つて……この空間が壊れたら私たちはどうなるの？」
「……！」

確かにそうだ。

この空間が壊されるということは聡一たちが今いる場所がなくなるということだ。

これがどういふことなのか……大体の予想はつく。
絶対にそんなことになってはいけない。

「くそ！」

聡一はただ剣を振り上げ龍に向かって攻撃を仕掛ける。
なにも考えずにただ「死にたくない」そう思うと体が自然と体が動いた。

剣を振り下ろすが何も無い場所で聡一の動きが止まる。
剣の先が震えるように揺れ、透明な波が発生している。

「う……動けない……」
「聡一君！」

美羽は聡一のまわりに風の壁を作る。

「柚月ちゃん！この隙に……」

「はい！」

龍は聡一に集中している。

袖月は聡一が居る方向とは逆方向に走り龍の背後へ。

そこから魔法を使い黒い球体を龍に向かって放つ。

しかし龍に当たる直前で黒い球体の動きが止まる。

そして少しずつ小さくなつていき黒い球体は消えてしまう。

「なんで……」

「そんなんじゃ無駄よ！ちゃんと考えてから行動しないと！」

「氷璃さん！」

「ごめんね待たせちゃつて。こいつの魔法の正体、大体わかつたわよ」

「もしかして今まで……」

「そうよ。普通に戦つても勝てる相手じゃないからね」

ウウウウツツツツ！！

龍の巨大な唸り声が轟く。

「どんなに空間を変えたつて壊し方が分かれば相手じゃない……」

氷璃は静かに目を閉じると、少しづつ気温が下がっていく。

それに伴つてまわりの木々も凍りついていく。

十秒程経つた頃には、一面氷に包まれていた。

「これでこの空間は私の支配下……もう勝ち目は無いわよ！」

「すごい……」

こんな方法を思いつくこと自体すごいのだが実際にこんなことができてしまうこともすごいことだ。

さらに凍結させた空間が少しづつひび割れていく。

「さあ、空間が崩れていくわよ……どうする？」

ウウウウ……

そしてまわりの氷が全て崩れ落ちるとまわりは、もといた森に戻つていた。

「あとは、この龍を倒すだけね」

あとは龍を倒すだけ……確かに残っているのはこれだけだ。
しかしこれが一番大変だ。これだけ巨大な龍、簡単に倒れてくれるはずがない。

「聡一君！君の順番よ！」

「はい！」

聡一は剣を構えて龍に向かって行く。

空間を操る魔法の対処法を氷璃が知っているおかげで、相手はただの龍。

空間を操るといふ強力な魔法を使えるのだから他の魔法を使えるはずがない。

それならば、もう恐れることなどない。

真正面から突っ込んで切り裂くだけだ。

キン！

龍の目の前、そこで剣は弾かれる。

「もう魔法使えないんじゃない……」

「なんで！？こんなはずじゃ……」

「……」

柚月は無言のまま黒い球体を作り出す。

「柚月ちゃん？」

「私も戦います！」

「氷璃、私たちも戦つわよ」

「そうね」

美羽は風を発生させる。

台風を小さくしたような形状で、真ん中の台風の目に当たる位置を中心に回転している。

ただ回転しているだけ、それだけなのに金属同士が擦れ合うような甲高い音を響かせている。

氷璃は巨大な氷柱を作り出す。

氷柱とはいつても地面から生えているような形だ。

大きさは二メートル弱、直径もかなりのものだ。

その氷柱に美羽の風がむかつていく。

風は氷柱を切り刻んでいき、風の流れに沿って氷の欠片が飛んでいく。

氷柱の欠片は全て風の中に閉じ込められた。

竜巻の中を鋭く尖った氷柱の欠片が舞っている。

「キレイ……」

「柚月ちゃん！」

「あ、すみません……」

柚月が少し集中力を高めた瞬間、黒い球体が生まれる。

中心には白い格のようなものが光り、そのまわりが黒いオーラのよ
うなものを放っている。

そして、その球体からは低く不気味な音が聞こえている。

「聡一君！避けて！」

「はい」

聡一は消えるように龍から離れ、柚月、氷璃、美羽の魔法が当たらない位置まで行く。

氷柱の欠片を舞わせている竜巻が龍に当たる。

竜巻の中の氷は龍の体に傷をつけ、風は傷ついた部分をさらに深く
切り刻んでいく。

そして柚月の黒い球体は、龍の体を歪ませていく。

柚月が作りだした球体の性質は白い格を中心に強力な重力が渦を巻
いているようなもの。

龍の体は黒い球体の中心に引き込まれていくような感じだ。

ウウウウウツツッ！

これだけの猛攻を受けながらも龍は咆哮を轟かせる。

そして一気に口を開くと空気が揺れ、その振動が地面にも伝わり地
面も揺れ出す。

いつのまにか氷璃の氷柱と美羽の風で作りだした竜巻も消え、袖月の黒い球体もなくなっていた。

「私たちの魔法をこんな簡単に……」

「黙れ！」

氷璃が言った。

大きな声で叫んだわけでもなければ怒鳴ったわけでもない。

ただ「黙れ」と言っただけ。それなのにあたりは凍りつくかのよう
に静まっている。

「私の目の前で騒ぐな！」

誰にもなにか起きたのかわからなかった。

氷璃が「黙れ」と言ったあとの静寂、そしてその後の氷璃の一言……
それを聞いた時には、もうすでに龍が氷像と化していた。

まわりの様子はもとの森……そして真ん中には巨大な龍の氷像。

「氷璃……今、なにをしたの……」

「魔法よ。私の氷の前においていいのは静寂だけだから……」

「……」

誰もなにも言い返すことができなかった。

氷璃の表情は、とても真剣なものだ。

「聡一君、魔力を回収しなくていいの？」

「え？……はい……」

急変した氷璃のことを不思議に思いながらも龍の氷像に近づいてい
く。

手をかざすと、すこしずつ魔力が体の中に流れ込んでくるのがわか
った。

「もしかして、この魔力を吸収すれば空間を操れるようになるのか
……」

今まで、魔力を吸収するたびに新しい魔法が使えるようになってい
た。

そして使えるようになる魔法は吸収した魔力に何か関係のあるもの
だった。

ということとは今回は「空間を操る魔法」と考えても間違いではないだろう。

「吸収できた？」

「はい」

「じゃあ、行きましようか……」

氷璃は、まだこんな様子だ。

今までならば、なにかあってもすぐにもとに戻っていたはずなのだが……

「氷璃……ちょっと聞いてもいい？」

「なに……」

「さつき、大量の魔力を使ったでしょ？」

「……悪い？」

「別にいいけど……もしもこの世界が一面氷になったらどうするのよ！」「

「今度からは無理しないでね……聡一君も袖月ちゃんも私もいるんだから氷璃が本気を出す必要ないわよ」

「そうね……今度から気をつけるわ……」

「じゃあ、行きましようか」

帰り道は美羽が先頭を歩いている。

確かにこの様子の氷璃に先頭を歩かせるわけにはいかない。

「ハア……ハア……」

「大丈夫ですか？」

「うん……」

「肩、貸しますか？」

「大丈夫よ……」

氷璃はふらつきながら聡一の横を歩いている。

聡一はなんとなく後ろの様子を見てみた。

今まで歩いてきた道が凍りついている。

「美羽さん……」

「急に大声出してどうしたの？」

「これ見てください」

「……氷璃の魔力が放散しているようね」

「どうするんですか？」

「……わからないわ……こんなことになったの初めてだから……」

「そうですか……」

「ごめんね……私のせいで……」

「氷璃さん……」

「一回、休みましょう」

氷璃を地面に座らせ、聡一たちも腰を下ろす。

不思議なことに前に通った時は聞こえていた不気味な鳥の鳴き声や木々の揺れる音も聞こえない。

ほとんど無音の状態だ。

氷璃はまだ苦しそうだ。

美羽は真剣な表情で、なにか考えているようだ。

聡一たちが座っているまわりも少しずつ凍りついていく。

「そろそろ進みませんか？このままじゃここも……」

「そうね……氷璃、立てる？」

「うん……」

氷璃は立ちあがるうとして、ふらつき転びそうになる。

それにもものすごい速さで気づいた聡一は氷璃の肩を支える。

「大丈夫ですか？」

「ありがと……」

聡一が氷璃の体に触れた時、氷璃の体温はとても低かった。

普通の人間ならば死んでいるほど……体が氷ついているかのような体温だ。

しかし氷璃が氷の魔法使いだったおかげで助かったのだろう。

氷璃は立ち上がり、歩こうとする。

しかし、すぐにふらつきその場に膝をつくように倒れてしまう。

「氷璃さん、俺が……」

「いいわよ……」

「このままだったら、みんな氷づけになっちゃいますよ」

「そうね……」

氷璃は渋々聡一に背負われる。

その瞬間、聡一の背中が凍りつくような冷気に包まれる。

冷気からは氷璃の辛さが伝わってくるように感じる。

「進むわよ」

「はい」

もう一度、美羽を先頭にして歩き始める。

森の中は変わらず静寂に包まれたまま。

この状態で何かに襲われても対応できるかわからないので好都合だ。しかしこの静寂はとて不気味なものだった。

森の中もどんどん凍りついていき森だったことがわからないほどだ。

木は葉をつけたまま凍りつき、少しずつ朽ちていく。そして地面には草などが凍りついて氷の棘となっている。

「早く森を出ないと危ないわね……」

美羽の歩く速度はどんどん速くなっていく。

道を進むにつれて氷璃の状態も悪い方向に進んで行く。

もうすでに目を閉じて肩を動かすほどの荒い息になっている。

さらにそれに伴って森が凍りついていく速度と気温の低下が激しくなっている。

「聡一君、氷璃が放散している魔力吸収できない？」

「やってみます」

氷璃が放散している魔力は聡一の背中に触れているため吸収するのは容易なことだった。

しかし常に相当の量の魔力が放散されている。

今は吸収を続けることが可能だがいつまでもつかわからない。

「美羽さん、俺もいつまでもつか……」

「氷璃の魔力を全部吸収するなんてそう簡単なことじゃないからね……」

魔力を吸収し続けていると聡一の体温も下がってくる。

氷璃も自分の魔力とはいえ、これ以上に苦しんでいるのだろう。

「聡一君、一回吸収やめたほうがいいんじゃない？」

「まだ大丈夫です……」

「ダメ。顔色が相当悪いわよ。ここで聡一君まで倒れたら……」

「……わかりました」

聡一は一度吸収をやめる。

それと同時に気温が一気に下がっていく。

「思ったより早いわね……急ぎましょう」

寒さのせいで体が震え、早く歩くのが難しい。

「今のうちにどうにかしないと……聡一君、さっき吸収した空間魔法使える？」

「……やってみます」

「まだいいわ。多分このあと氷璃の魔力は一気に放散されると思うわ。」

そうならこの世界全体が凍りついてしまう。だからその瞬間に私たちだけ別の空間に飛ばしてくれない？」

「俺たちだけでいいんですか？」

「うん。氷璃は自分の魔力で死ぬとは思えないし、凍りついた世界をもとにもどす方法もあるから」

「……それってどんな方法なんですか？」

「そんなことより森から出ることを考えましょう」

「……わかりました」

寒さに耐えながら森の外に向かって歩いていく。

来た時は何度も襲われたり、まわりに集中していたため歩く速度は遅かった。

そのせいで森がとても広く感じていたが、ただ速く歩くことだけを考えればすぐに森の終わりが見えてくる。

「やっと出られるわね」

「そうですね」

町の中に入り森の中に入る前に泊った宿にむかう。

すぐに部屋を確保して、氷璃をベッドに寝かせる。

今は魔力の放散されている量が少ないおかげで気温が下がるだけですんでいる。

しかし美羽が言った魔力が一気に放散されるのはいつかわからない。それに備えて聡一は新しい空間を作り出す準備をする。

この魔法は、そんなに難しい魔法ではなく試さなくても使えることがわかってる。

氷璃の様子は眠っているが大分落ち着いているようだ。

部屋の気温も低いとはいえ凍えるというほどではない。

「この様子だと大丈夫そうですね」

「そうですね……」

いつ魔力が放散されてもいいように柚月と美羽は聡一のすぐそばに

いる。

なにも知らない人が見れば氷璃はただ眠っているだけのように見えるが魔力の放散は続いている。

今は極少量ずつ放散されているが氷璃の魔力が限りなくゼロに近づいた時に魔力は一気に放散される。

それでは一気に放散できたとしてもゼロまでなのだがその下がある。ゼロを超えマイナスに到達したとき、マイナスの魔力が放散される。マイナスの魔力の特徴は本人の意思で制御できないこと。

さらに限界値がないこと。

つまり無限に放散され続けるというわけだ。

「……そろそろ来るわね」

氷璃の寝ているベッドが凍りつき始める。

いつもも見ている氷璃の氷とは明らかに違う。

暗く、冷たく、不気味な雰囲気醸し出している。

「これ、本当に氷璃さんの氷ですか？」

「早く逃げるわよ！」

「はい！」

聡一は手に入れたばかりの空間を操る魔法を使い別の空間を作り出す。

そして柚月と美羽とともにその空間に包まれる。

新しい空間は透明なガラスのようなものでできた大きな箱のようなものだ。

聡一の意志で移動することも可能だ。

さらに中に入っている間は外の空間の影響は受けない。

透明な壁なので外の様子がよく見える。

ベッドは凍りつき氷璃も氷に包まれている。

「氷璃さん、大丈夫なんですか……」

「大丈夫よ」

「そうですか……」

「とりあえず宿から出しましょう」

「わかりました」

空間の箱ごと動かし宿の外に出る。

「もうこんな……」

町の外も完全に凍りつき人々は氷像と化している。

一瞬にして、この町は静寂と氷に包まれたらしい。

「これがマイナスの魔力……」

「マイナスの……魔力……？」

「そうよ魔力がゼロを超えてマイナスに達する……そうしたら、もう制御が効かない……」

そして魔力を無限に放散し続ける……」

「……」

「一回、地球に行きましょう。これからどうするかはそれから考えることにして……」

「でも氷璃さんが……」

「だから大丈夫だって。あと他の人たちも……」

「……わかりました」

「前に地球に戻る時に言った場所覚えてる？」

「はい」

「そこに行ってくれる？」

「……この魔法を使えば一瞬で行けないですか？」

「地球とこここの位置関係わかるの？」

「それは……」

「じゃあやめたほうがいいんじゃない？」

「わかりました」

聡一は別空間の箱を動かして空中を通って地球に行くために必要な場所へ向かう。

空から見える地上は全てが凍りついている。

とてもリアルに作られた氷の世界としか思えない。

人も動かず動物も動かず風が吹けば簡単に揺れるはずの植物ですら動いていない。

氷璃の魔力は、もうすでにこの世界のほぼ全体を包み込んでしまっただろうだ。

「聡一君、この魔法ってどれくらい続けて使える？」

「結構長い時間大丈夫そうですよ」

「そう……もしかしたら、これからこの魔法を何度も使ってもらわないといけないかもしれないのよね……」

「大丈夫ですよ。任せてください」

「あの……ちょっといいですか……」

「どうした？」

「これ……地球に持っていても大丈夫なんですか？」

「確かに地球には無い物質が含まれてるかもしれないけど影響はないと思うわよ」

「そうじゃなくて……」

「確かにこれは違反だよな……」

「違反って……なにに？」

「日本では銃刀法っていうのがあってですね……」

「なるほど、危険だから取り締まられてるってことね」

「そういうことです」

「隠しとけば大丈夫なんじゃない？」

「でも、これ大きいし背負ってるし……もしも人がたくさんいる所に出たらどうするんですか……」

「それなら問題ないわ。行き先は私がコントロールできるから」

「そうですか。じゃあ俺の家にしてくれませんか？」

「いいわよ。もうすぐつくわね」

「はい」

この空間の進む速度は結構速く、さらに目的地まで直進できるのですぐに移動することができる。

「ここも相当凍りついてるわね……問題は外に出た後どうするか……」

「俺が近くの魔力を吸収します」

「それはダメ。マイナスの魔力を吸収したらどうなるか……」

「寒さに耐えればいいんじゃないですか？」

「柚月ちゃん……」

「どんなに寒いといつても少しの間なら大丈夫なんじゃないでしょうか……」

柚月の意見はとても意外なものだった。

いつもしっかりと考え誰もが納得するような意見を出していた柚月の意見とは思えない。

「それが危険すぎるから別の方法を考えているのよ」

「確かに氷璃さんの魔力が放散されたときは一瞬で町も人々凍りつきました。

でも見てくださいあれを……」

柚月が指差した先には木の枝の先から滴り落ちる雫が。

「あれがどうかした？」

「水が滴るっていうことは、氷が溶けているということですよね？」

「そうか！今は氷璃の魔力が放散するのが止まってるっていうことね！」

「今なら気温は通常の状態と同じか、少なくとも零下ではないという事か……」

「それなら外に出ても大丈夫ね」

「はい」

「それにしても、何で氷璃の魔力の放散が止まっているんだらう……」

「いつ気温が下がるかわかりません。急ぎましょう」
「そうね」

聡一は空間を地上に向けて下ろしていく。
そして地上についたときに透明な空間と空間をわけていた壁が消える。

「やっぱり結構寒いわね……」

まわりが氷だらけのこと、気温もいつもよりも低いこともあり凍えるように寒い。

「急いで地球に行きましょう」

美羽は台の上上がり地球に移動するための魔法を使う。

ブラックホールのような黒い穴ができ、三人はその中へ入る。

これで、この寒い世界から抜け出せる。

美羽の知っている氷を溶かす方法がわかれば氷璃やこちらの世界の人も助けることができる。

詳しいことは地球の聡一の家についてから話すことにして、今は地球に向かうことを急ぐ。

act 30 放散された魔力

「あー 久しぶりの我が家ー」

「山奥に行った後、すぐに向こうの世界に行ったもんねー」

「柚月ちゃん、急に元気になったわね」

「久しぶりの地球ですもん」

向こうの世界にいたときの柚月は無表情でほとんど話すこともなかった。

しかし今は違う。いつもどおりの元気な柚月だ。

「じゃあ早速、氷を溶かす方法を話すわよ……」

美羽の声と表情は向こうの世界にいた時の美羽からは想像できないほど真剣だ。

「はい……」

あまりにも真剣なため聡一と柚月の肩にも力が入る。

「できるだけ早く終わらせたんだけど、結構長くなると思うわ。……

いい？」

「はい」

「まず氷を溶かす方法だけど、私たちの世界にある私の父の墓に行けばいい。」

そこには父の魔力がある。それを使えば氷は全部溶けるわ」

「墓って……」

「そうよ。私の父も母も死んでいるわ。そして氷璃が大量の魔力を持っていて理由も二人が死んだせい……」

「……」

気のせいかもしれないが氷璃の声が震えているように聞こえる。

「……母が使う魔法は「光」の魔法だった。その効果は自分の求めた光が得られる……」

つまり、なんでも願いが叶うっていう魔法だった……」

「そんな魔法があるんですか？」

「うん……多分、もう使える人はいないと思うけどね。」

母は、その魔法をまわりの人たちのために使っていた。そのおかげで私たちが住んでいた町はとても幸せだったわ。

でも、ある日母が……「この世界の全てを支配したい」と言いだしたの……

そんなことは光の魔法を使えば簡単にできる……

でも父はそれを止めた……それでも母はやめようとしなかった。

だから父は母を殺し、その魔力を娘である氷璃の体に移した……

「それで氷璃さんは魔力をたくさん持っているんですか？」

「そうよ。その後、父も自殺したわ。自分の妻を殺すなんてどれだけ重い罪だったのか……」

「もしかして、それからは美羽さんと氷璃さんの二人だけで……」

「そして父は自殺をする前に私に言った。「氷璃の魔力が暴走したら俺の魔力を使え。」

俺の魔力は墓に込めておくから……」ってね。だから父の墓に行かなくちゃいけない……」

「お父さんとお母さんのこと、恨んでますか？」

「袖月！」

袖月が平気でこんな質問をするとは思えなかった。

「別に恨んでないわよ。でも「光」の魔法は恨んでいるわ。」

あんなのは「光」なんかじゃない。人の欲を高めるだけの「闇」の魔法よ……」

「そうですか……」

「墓はどこにあるんですか？」

「ここでも、向こうの世界でもない別の空間よ」

「それって……」

「聡一君の力が必要ってこと。」

それと私は聡一君が空間を操る魔法を手に入れたことは偶然だとは思っていないわ」

「運命っていうことですか？」

「さあね。ただ私がそう思っているだけ」

「そうですね……」

「あの……マイナスになってしまった魔力はどうすればプラスに戻るんですか？」

「……」

「……」

「それは、多分これからわかると思うわ」

美羽がこんな大事なことを忘れてしまうとは思えない。相当、焦っているのだろう。

だとすれば氷璃がどんなに凍りついても大丈夫だということも聡一たちを落ち着かせるための嘘かもしれない。

「とりあえず墓に行きましょう。あと墓を守る者と戦うことになるかもしれないから……」

「わかりました。戦いにも大分慣れてきたので大丈夫です」

「そう……じゃあ、もう一度むこうの世界に行くわよ」

「待ってください。今行っても凍りついてしまうんじゃない？」

「私の父が使う魔法は炎の魔法。だから墓のまわりは凍りついてないと思うわよ？」

「死んだ後にも、その人の魔力が残るものなんですか？」

「父は自分の魔法で自分を火葬して、氷璃が暴走したときのために残った骨に魔力を込めたからよ」

「そうですね……」

「もう一度、向こうの世界に戻るけどいい？」

「はい」

「じゃあ、いくわよ……」

美羽は移動するためにブラックホールを作り出す。

一日の間にこれを二度も通るなんて思いもしなかった。

中に入り、美羽の父の墓にむかう。

「やっぱり、ここは凍りついてないようね」

「そういえば、なんで美羽さんは空間を移動する魔法を使えるんですか？」

「母からもらったものよ。「光」の魔法は他人に魔法を与えることもできる。」

とても小さくて弱いものだけだね……」

「すごいですね。それだったら、ほとんど神と変わらないじゃないですか……」

「「光」の魔法は別名「神」の魔法でもあるからね。」

人々に全てを与え、自分の欲しいものは手に入る……そんな魔法だから……」

「「神」の魔法……」

「まあ、そんな話しても無駄だし父の墓を探しましょう」

まるで別空間に分かれているかのように凍りついている部分とそうではない部分がわかれている。

これも「光」の魔法の影響なのか、それとも美羽の父が残した炎の魔力の影響なのか……

美羽の父の墓があるとはいっても、墓地のようになっているというわけではなく

さっきまで歩き続けてきた森のような場所の中にあるようだ。

美羽は迷わず奥に向かって進んで行く。

その先には空に浮いているかのような島がある。

しかし実際は浮いているわけではなく、一本の岩が支えとなって空中に陸があるだけだ。

どうやら、そこに美羽の父の墓があるらしい。

その方向は全く凍りついている様子がないため、間違いないだろう。美羽は無言のまま歩き続けている。

その後を聡一と柚月が歩き、空の陸を目指す。

「ここからは、どうやって上にかかるんですか？」

陸の真下についても、支えているのは一本の岩の柱。

それ以外に陸につながっているものはない。

岩の柱をのぼるのも不可能に近いため、陸に行く方法がない。

「久しぶりね、美羽ちゃん」

「この声……もしかして、お母さん？……でも、そんなはずは……」

「忘れたのかしら？私の魔法のことを……」

「もしかして……生き返った……」

「私の魔法は、使った者に「光」を与える魔法……死後も有効で助かったわ」

「美羽さんのあ母さん？でも、どこに……」

「ずいぶん素敵な魔法使いを連れてきてくれたみたいね。そして氷璃も今は制御が効かない状態……」

「……それがどうしたっていうの？」

「美羽ちゃんと、その二人の魔法使いで私を倒せると思う？」

「もしかして……」

「その通り。この上には行かせないわ！そして、ここで死んで頂戴！」

「最低な人ですね……」

「柚月！？」

「自分の娘に平気で、そんな言葉を言える親がいたなんて思いませんでした……」

「柚月ちゃん、あんなのは母親だと思っていないわ」

「そうですか……」

柚月は心の底から怒りがこみ上げてきているようだ。

それだけ美羽の母の言葉が気に入らなかったのだろう。

「なんとでも言う方がいいわ」

「二人とも、遠慮しなくていいからね！」

「はい！」

「……」

柚月と美羽からは怒りという生ぬるいものではなく、本物の殺気を感ずる。

それを感じ取るかのように、まわりの木々がざわめき始める。

「「光」の魔法に勝てると思ってるの？」

「やってみればわかるわよ！」

美羽が作りだした竜巻は様子を見るためなのか、いつもより小さなものだ。

しかし流石は美羽の竜巻といったところだ。小さいにも関わらず威力は大きく、まわりのものを巻き込んで行く。

砂埃が飛び、遠くの様子がよくみえない。

「いい竜巻だけど、「光」の前では無力よ。「竜巻を無力化」」

美羽の母がそう言葉にした瞬間、竜巻が消えてしまう。

「「対象の頭上に岩石を」」

「美羽さん！上！」

「「落下」」

巨大な岩が美羽の頭上から降ってくる。

しかし、聡一の言葉に美羽が反応したため直撃することはなかった。ゴゴゴゴ……

地面が揺れ始め、地面の形が変わる音が聞こえる。

「柚月！やりすぎだ！」

「重力を操る魔法か……恐ろしいけど「光」の前では無力。「発動者の質量を減少」」

「もとに戻らない？柚月の魔法が無力化されたんじゃ……」

「私の質量を減少させただけで魔法は無効にしていないわ。」

この重力の中で私の攻撃を避けられるのかしら？「三つの地点を発火」」

今度は聡一、柚月、美羽の足下が燃え少しずつ火が広がっていく。

「柚月！魔法を……」

「はい」

袖月が魔法を止めたので重力がもとに戻る。

聡一は、すぐに自分の足下の炎を吸収し袖月と美羽の足下の炎も吸収する。

act 3 2 吸い込むモノ

「これ……本当に炎なのか……」

「どうしたの？」

「なんか魔力の感じが……」

「もとの魔力が「光」の魔法だから吸収できる魔力も「光」の魔力なんじゃないの？」

「そういうことですか。じゃあ……」

「聡一君も光の魔法を使えるようになった……」

「かもしれません」

「今、なにやったの？吸収したとか言ってたけど……そんなはずないわよね」

「さあな」

聡一は氷璃の魔力を使い氷の刃を作り、美羽の母にむかって放つ。

「鉄の盾を正面に」

氷の刃は鉄の盾に突き刺さる。

それを見た美羽の母は、その氷を抜き取る。

「この氷は……氷璃ちゃんの……？」

「隙だらけね！」

美羽がかまいたちを発生させ美羽の母の足を切り裂く。

大量の血が噴き出し、痛みあまり膝を地面につけてしまっている。

「傷を治癒……」

その一言で大量に吹き出していた血も止まり、傷口ももとに戻っている。

「やっぱり一撃で仕留めないとダメか……」

「まさか娘に体を傷つけられる日が来るとは思っていなかったわ……もう本気で死んでもらう。「対象の心臓を停止」」

「ウツ……」

美羽が苦しむ声が一瞬、聞こえたような気がした。

しかし、そのときにはもう遅い。

美羽は地面に倒れ、起き上がるうともしない。

というより、起き上がることができないのだろう……

「残りは、あなたたち二人ね」

「なんで殺せるんですか？」

「は？」

「なんで自分の子どもを平気で殺せるんですか？」

「私には殺せないやつのが持ちがわからないけど？」

「あなたの答えはそれですか……」

「君、ちよつとうるさいわね。美羽ちゃんみたいに死にたいの？」

「死にたくないし、殺されるつもりもありません！」

袖月の目の前に黒い球体ができている。いつもより巨大なものだ。

「さつき見なかったの？あなたが魔法を使ったところで私には勝て

ない。「魔法を無力化」

「そう簡単に無力化できると思わないで」

「無力化できない！？ならば「発動者を左方向に五十メートル移動」

」

美羽の母の姿が一瞬消え、左方向にもう一度現れる。

「「対象に接近」」

「どの方向から来る……」

「「右腕を硬化」」

美羽の母はちょうど袖月の背後に現れ、鋼鉄と化した右腕で殴りか

かる。

「！！」

袖月の肩に命中したかのように見えたが一瞬だけ重力の向きを変え、

なんとか避けたようだ。

「美羽さんを殺しやがって……光の魔法を突破するには……」

「聡一君、この人は私だけに戦わせて。どうしても許せないから……

……」

「ダメだ。一人で……いや二人でも勝てるか怪しいほどの相手だぞ」

「……………」

柚月の目の前には、いつの間にか黒い球体ができている。

そのまま美羽の母に向かって放つ。

大きさがいつもの二倍……三倍はあるだろうか。

さらに奇妙な音まで放っている。グォングォンと重く低い音だ。

「その魔法は確かに無効化できないかもしれない。だけど避けるのは簡単なのよ！」

「対象の背後へ」「」

その言葉のとおり美羽の母の姿が消え、柚月の背後に現れる。

柚月はそうなることがわかっていたかのように、もう一度黒い球体を作り出す。

そして、美羽の母にむかって放つ。

美羽の母が自ら近づいてくれたおかげ黒い球体は胴体に直撃。

大きさは小さいものだったため、右の脇腹を貫いていく。

そこからは血が滲み出て、地面に垂れていく。

「「傷を再生……………」」

「やっぱり一撃で終わらせないとダメみたいですね」

「もう私にも余裕がないから死んでもらうわ……………」対象の……………」

「させるか！」

聡一は美羽の母に向かって剣を振り下ろそうとする。

「「対象を上空へ」「」

しかし聡一の体にはなにもおきず、そのまま美羽の母の右腕を切り落とす。

「本体にも魔法が効かない……………」？」

「さあ、どうですかね」

「「右腕を再生……………」どうやら相当厄介な魔法のようね」

「あなたには言われたくありませんよ」

「聡一君、避けて！」

「え？」

「その人は私が……………」

「おい……ちょっと待てよ……」

「いいから離れて！」

「……」

離れざるを得なかった。

美羽の母の目の前には小さな黒い球体ができている。

いつもと同じものなら何も警戒することはないのだが、それとは全く違う。

中心に向かって空気が吸い込まれていつている。

さらに空気だけではなくまわりにある木々、さらには聡一や柚月、美羽の母まで少しずつ吸い込まれていつている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1385w/>

魔法の合成師

2011年12月11日21時49分発行